戦闘狂は正義を振り翳す

HDアロー

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これまでの人生観を覆すような。

今までの倫理観を上塗りするような。

築き上げた世界を再構築するような。

そんなターニングポイントを経て、思ったことはただ一つ。

「この世界は狂っている。だから私が救ってあげる」

目次

一章　狂に入っては狂に従え
一話　ターニングポイント ―― 1
二話　「最近のロボットは宙に浮くのか―」 ―― 7
三話　スーちゃん ―― 13
四話　神々がポイした戦闘狂 ―― 19
五話　悪、あるいは正義と呼ぶべきもの ―― 26
六話　過去、あるいは未来と言うべきもの ―― 34
赤の章　慕 ―― 41
二章　まず壊より始めよ
一話　コニー ―― 47
二話　歯車 ―― 54
三話　撈月 ―― 60
四話　同志 ―― 66
五話　策謀 ―― 72
六話　逆光 ―― 78
七話　リトルエンディアン ―― 84
虚夢の章　狂 ―― 92
三章　七天魃倒
一話　Ｒｉｄｅ　ｏｎ　ｔｈｅ　ｃｉｔｉｅｓ ―― 99
二話　意図と思惑と ―― 112
三話　お転婆人魚 ―― 124
四話　言わせねーよ ―― 134
五話　未来視 ―― 141
緑の章　朽 ―― 152

六話　氷壊 ―― 160
七話　Ｓｅｅ　Ｙｏｕ ―― 169
赤の章　墓 ―― 175
八話　Ｙｏｕ　Ｓａｙ ―― 183
九話　真贋心眼 ―― 194
十話　或いはバッドエンドと呼ぶべき終焉 ―― 202
四章　日侵月捕
一話「呪われてやがる」 ―― 213
二話　色即是空 ―― 220
三話　勝利は一通りじゃない ―― 227
四話　赤報隊 ―― 234
五話　メテオドライブ ―― 241
六話　三十六計逃げるに如かず ―― 248
七話　正義を翳せ！ ―― 254
八話　同族嫌悪 ―― 264
九話　大罪人メアリー ―― 272
エピローグ ―― 287

一章　狂に入っては狂に従え

一話　ターニングポイント

人生にターニングポイントがあるというのなら、私にとってのそれはこの日だったに違いない。

その日、いい子ちゃんの私は器となり、その内側を狂気で満たした。

これは、原点の話でも頂点の話でもない。

戦闘に明け狂った彼女の物語である。

＊

『草むらに入ってはいけないよ』

私の生まれ育った町、マサラタウンにはそんな約束事があった。

それは、言わば未成年の飲酒や喫煙を禁止するものと同じことで、子供を危険から遠ざけるための規則だった。

いい子ちゃんの私はそれを守っていたし、破ることを忌避していた。

だけど悲しきかな。

私の弟分達はそうではなかった。

ある曇り空の日の事だった。

ナナミの弟が、その幼馴染とこそこそしているところを見つけた。

何か企んでいるに違いない。

そう思った私は彼らの後をこっそりとつけた。

「よ、よし。レッド、お前から行けよ」

「はぁ!?　なんでだよ、グリーンこそ先に行けよ」

「バカ、大声を出すな。そもそもお前が言い出したんだろ、草むらに入り込んでみようって」

「お前もノリノリだったじゃねーか！」

近くの木陰から様子を窺っていると、そんなやり取りが聞こえてきた。

馬鹿だ。本気でそう思った。

（なんでわざわざ命の危険を冒しているんだか）

男子という生き物は本当に理解できない。
何故そこまで勇敢であることに憧れを抱くのか。
何が彼らを駆り立てるのか。
私には分からないことだった。
（はぁ、とりあえず草むらに入るようなら呼び止めましょうかね。入らないようなら見なかったことにしてあげましょう）
隣の芝生は青いとはよく言ったもので、手の届かないものほど手を伸ばしたくなる。
それは分かるが、そこで踏みとどまる理性は自ら育まなければならない。
できれば可愛い弟分たちには、自分から引き返してほしかった。
けれど、そんな願いはあっさりと挫かれた。
「あーもう！　分かったよ！　行きゃいいんだろ、行きゃ！」
そう言ってレッド君が草むらに向けて足を向けた。
（あのバカ！）
私は木陰から身を乗り出し、駆け寄った。
「コラ！　あんたたち何してんの！」
「メ、メア姉ちゃん！」
「うげ、メア姉！」
私、レッド君、グリーン君がそれぞれ声を上げる。
何をどう間違えればこんなやんちゃに育つのか、甚だ疑問である。
薄ら笑いを貼り付けて説教を始める。
「草むらに入っちゃいけないって聞かなかったの？　馬鹿なの？　死ぬの？」
「お、俺は止めたんです！　それなのにレッドがどうしてもっていうから」
「な、グリーンてめぇ！」
レッド君とグリーン君が取っ組み合いを始める。
責任の押し付け合いだ、醜いったらありゃしない。
先の会話は聞いているから両成敗ということで。
そう思って説教を始めようとした時だった。

私から見てレッド君の延長線。
そこにある茂みがガサガサと揺らめいた。
知覚が引き延ばされていく。
思考が加速され、世界がスローモーになる。
「キシャーッ！」
草むらから薄紫色の獣が飛び出す。
角ばった耳に伸び切った前歯、先端の丸まったしっぽ。
その獣の名前はコラッタといった。
「レッド君！」
彼を押しのけて、間に自分の身をねじ込んだ。
自分の身を庇う様に右手で顔を隠した。
次の瞬間だった。
右手が鮮血を描き、火傷と錯覚するほどの熱を帯びた。
「メア姉ちゃん！」
レッド君の声が聞こえた。
聞こえはしたが、脳はそれを不要な情報だと切り捨てた。
まるで自分とコラッタだけが世界から切り離された、そんな錯覚を覚える。
私の腕に浅くない傷をつけたコラッタ。
そいつが地に足を付けようとした瞬間に回し蹴りを放つ。
着地狩りはクリーンヒットし、コラッタは二転三転と地面を転がり吹き飛んだ。
（なにこれ、体が、あつい）
私は私の体に起きた異変を観測していた。
右腕だけじゃない。
全身の血が沸騰するかのように、飽和せんばかりの熱量が私の中で蠢いていた。
不思議なことに右腕に痛みは一切なく、それどころか私は――。
歪な三日月のごとき笑みを浮かべていた。
（暑い熱いアツイッ！　だけど、だけどだけど！）
相対するコラッタに向けて歩を進める。

足元の草むらを踏みにじり、突き進む。
ああ、今なら分かる。
何故この子たちが草むらに忍び込もうとしたのか。
（今、私は生きているッ！）
これまでの人生観を覆すような。
今までの倫理観を上塗りするような。
築き上げた世界を再構築するような。
そんなターニングポイントがあるならば、私にとってそれは間違いなく今日だった。
その日私は、狂気に魅入られた。
「あは」
誰にも聞こえない、後ろの弟たちにも聞こえないほど小さな声で、私は産声を上げた。
目の前のコラッタに、恍惚の笑顔を向ける。
もっと私に生を実感させてくれ！
しかし悲しきかな。
コラッタは、肉食動物に見つかった草食動物のように、生態系の頂点と出会ってしまった哀れな小動物のように。
無我夢中と言った様子で私から逃げ出していった。
「……つまらない」
一気に熱が冷めて行った。
思考がクリアになり、世界に色が付き始めた。
途中からは、右腕がジンジンと痛みを訴え始めた。
「ツッ～～！」
「メア姉ちゃん！」
「メア姉！」
レッド君とグリーン君が私を呼ぶ。
右腕から流れ出る血は、私の足元を赤く汚した。
草むらから出て弟分たちのもとへ赴く。
「メア姉ちゃん！　俺、俺！　こんなことになるなんて思ってなくて！」

「よしよし、分かってるよ。でも、もう二度とこんなことしちゃダメだぞ？」
「メア姉！　腕が！」
「あはは、かわいい弟分が無事だったんだ。どうってことないよ」
右腕は肘の辺りから手首の付け根までパックリと開き、赤を吹き零している。
私はカバンから赤い糸を取り出すと付け根の辺りに固結びをして止血をした。
「さ、帰ろっか。みんなにごめんなさいしないと」
「メア姉ちゃん……、ごめん、ごめん！」
いつまでも泣き続けるレッド君の頭をポンポンと叩き、こちらを向かせる。
「ほら、泣き止んでよ。お姉ちゃん、レッド君の笑顔が見たいな」
「う、うわあぁぁぁぁん」
何故泣く!?
本当に、男子というものは良く分からない生き物だ。
だけど、今回一つ分かった。
どうして禁忌を犯そうとするのか……。
私の頬に、赤みが走った。
その熱は、どこから来たものだったのか。
今の私には答えることができなかった。
＊
あの後、私たちは真っ先にオーキド博士の研究所に向かった。
マサラで唯一、医療器具のある場所だからだ。
消毒をし、包帯を巻きつける。
幸運だったのは研究用のラッキーがいたことだろう。
ラッキーに癒しの波動を使ってもらうと、傷口は見る見るうちに閉じていった。
しかし失った分の血は取り戻されなかったというか。
私は貧血を訴え、研究所の宿泊施設で休む事にした。
眠る前に増血剤を飲むことも忘れない。

思考が鈍る。
血が足りていないから当然だ。
疲れているのに、目がさえて眠れない。
臨死体験をした直後なのだ、当然だ。
息が苦しい。
喉を掻きむしって、叫びだしたくなる。
衝動が体を突き抜ける。
右腕が熱を帯びる。
あの時の感覚が忘れられない。
叩き込まれた快楽が、脳から剥がれない。
「う……あぁ、ぐっ」
呻き声をあげる。
自分が自分じゃなくなるようで。
あの時の記憶が、脳内で鮮明にリピートされる。
決まって思うことは、ただただ楽しかったということだった。
（ああ、私はまだ生まれてすらいなかった。私はあの時、死と向き合ったとき、はじめて生を受けたんだ。もっと、もっとッ、私を潤してッ！）
人生にターニングポイントがあるというのなら、私にとってのそれはこの日だったに違いない。
その日、いい子ちゃんの私は器となり、その内側を狂気で満たした。
これは、原点の話でも頂点の話でもない。
戦闘に明け狂った彼女の物語である。

二話　「最近のロボットは宙に浮くのか―」

私はマサラタウンのメアリー。
いつかこの町を出たいと渇望する、稀有な人間だ。
大多数のマサラの人間が、この閉じた世界でその一生に近い時間を費やす。
旅行どころか、他の町に買い物に行くものすら少数だ。
こんな何もない場所で、無意味に生まれ、無為に過ごし、無意義に死ぬ。
誰一人としてその事を疑問に思うでもなく、能天気に過ごしていく。
そんな人生、私は耐えられない。
（ここから抜け出さなければ）
野生のコラッタと向き合ったときの事を思い出す。
全身の血が沸騰するような感覚が、肌を焼き焦がす緊張感が。
ここに居たままじゃ、二度と味わうことができない。
ここから抜け出さなければ、届かない。
（嫌だ嫌だ嫌だ）
私は思う。
刺激が欲しいと。
平穏な日常を抜け出したいと。
退屈な世界を飛び立ち、強者と戦いたいと。
たまらなく恐ろしい。
この広い世界を知ることなく、ここで朽ち果てる。
そんなつまらない人生、絶対にお断りだ。
（早く、速くここから出ないと）
未来の自分に思いをはせる。
死闘の中で、喜びに打ちひしがれる私。
生と死の境界で、狂ったように舞い上がる私。
早く、ハヤク。
＊

私の住む町マサラタウンは、かなり偏狭の地にある。
名所と言えばオーキド博士の研究所くらいで、そこも他の町の人は簡単には立ち入れない場所だから、わざわざマサラを訪れる人はいない。
強いて言えば、肺の病気などを患う空気の綺麗な場所で過ごさなければいけなくなった人が、時折移住してくるくらいか。
だからこそ、その男は異様だった。
(怪しい、怪しすぎる)
先程から家の陰にこそこそ隠れては町民の様子を窺っている。
もっとも、前方に意識が向きすぎていて、後ろから見られていることに気付かないのは愚かとしか言いようがないが。
接触しようかしまいかと散々悩んだ挙句、結局私は声を掛けることにした。
「すみません、どうかなさいましたか?」
「ぬおっ! い、いつの間に! いや、なんでもないですぞ。それでは私はコレで」
「まあ、お待ちください。先ほどから様子は窺っておりましたわ。何かすべきことがおありなのでしょう? 私に手伝えることがあればお助けいたしますわ」
周りから見た私というのは、清く、お淑やかで、心優しい少女。
ならば、その幻想の通りに行動しておいてあげよう。
私は、ここに居る奴らとは違う。
だが、自らが例外であることを知られてはいけない。
いつか来るその日まで、せいぜい空想上の生き物に踊らされるがいい。
「私はマサラで生まれマサラで育ちましたわ。せめて事情だけでも教えていただければ力になれると思いますわ」
「むむ、魅力的な提案ではあるが……いやしかし」
改めて男の容貌を観察する。
トレンチコートにサングラスにマスク。
うむ、どう考えても事案が発生する気がしてならない。

お巡りさん、こいつです。
「うむ、折角の申し出だ。ご協力をお願いしたい」
「はい！　よろこんで！」
精一杯の笑顔で受け入れる。
両手を胸の前で重ね、全身で演技する。
本心では失敗したなー、と思っているがそれを悟られるほど大根じゃない。
「しかしこれは極秘事項でもある、口外禁止だ。まず、私の正体についてだが、国際警察のハンサムという」
「……こいつお巡りさんです？」
ハンサムがこいつ？　と首をかしげている。
ネタが通じなかったか。
ハンサムは何かもやもやしているといった雰囲気を残しながら話をつづけた。
「そうだ、警察官だ。先日この近辺で未知のポケモンが発見されてな、私は今回保護しに来たというわけだ」
「未知のポケモン……ですか」
「そうだ。コードネーム、ＵＢ：ＳＴＩＣＫＹ」
そこからの話を要約するとこうなる。
この世界とは別次元、いわゆる異世界にウルトラスペースという場所が存在している。
そこに住んでるポケモン達をウルトラビースト、ＵＢと呼ぶ。
ＵＢはいずれも強大な力を持っており、こちらの世界の人間にとっては脅威になりうる。
「と、言うわけだ。最近珍しいポケモンを見なかったかね？」
「そうですね……、すみません。見かけていないです」
「むむ、そうか……。いや、目撃が無いという情報が手に入っただけでも進歩だ。ご協力、感謝する」
「いえ、それでは見かけたらお知らせに参りますわね」
私がそういうとハンサムはビシッと敬礼してお礼を言った。
素直に受け取るならば、純粋な感謝なのだろう。

けれど、ここに私という事例がある以上、本心と行動が一致していると考えるのは短絡的過ぎる。
こいつが国際警察でない場合の事も考えて行動することにしよう。
＊
ハンサムと別れた後、私はマサラの外れの河川敷に来ていた。
表向きの理由は清掃活動。
打ち上げられたごみをゴミ袋に入れて綺麗にしていく。
周りの人間からすれば、奉仕活動に従事する女性に映っているだろう。
（ごみ、ごみ、ごみ）
そんな私の目的は、宝探しであった。
時たま、本当にごくまれに、トキワシティのフレンドリィショップで売られているような商品が流れ着いてくる。
それは毒消しであったり傷薬であったり。
大体は使用後だが、本当に時折未使用のものも流れてくる。
そんなお宝を持ち帰り、いつか旅に出るときの下準備にする。
それが私の本当の狙いだった。
「はぁ、本当にゴミばっかりで嫌になっちゃう」
欲を言えばモンスターボールが流れ着いてきて欲しい。
そうすれば今日にでもこの狂った町から出られるというものを。
しかし願いは届かない。
レッドを庇って以来、私はもう何年もそれを待ち続け、裏切られ続けてきた。
「おかしい、絶対に。どうしてマサラにはフレンドリィショップが無いの？　どうしてマサラは四方を草むらや海で囲われているの？」
まるで何者かがマサラから旅立つことを拒んでいるようだ。
私はそう思った。
コラッタ一匹ですら重傷を負うのだ。
ポケモンも持たずにトキワシティに向かうなんて自殺行為に他ならない。
「フレンドリィショップがないからモンスターボールも買えない。ポ

ケモンを捕まえることもできない。ポケモンバトルもできない」
考えれば考えるほど、マサラという土地は詰んでいる。
ここに生まれたが最期。
死ぬまで幽閉され続けるシステム
「狂っている。この町も、それを疑問に思わない町民も。みんなみんな、どうかしている」
足元に落ちているペットボトルをゴミ袋に入れる。
気が狂いそうだ。
いや、既に狂っているのかもしれない。
異常な状況下で正常でいられるなんて、狂人以外の何者でもないのだから。
「なにこれ、ロボット?」
そうこうしていると、変な人形が流れ着いていた。
紫色の、二頭身の宇宙人のような人形だ。
頭頂部と耳からは針のようなものが伸びており、目は薄青く光っている。
それを火箸で掴もうとした時だった。
「べ、べべ?」
「!?」
思わずバックステップを踏んだ。
ゴロゴロとした丸石に足を取られ、転がりそうになる。
それからマサラ人特有の体感バランスで強制的に立ち直る。
「しゃ、喋った? いや、最近のロボットなら当然なのかな」
よくよく思い返すと、目は薄く輝いていた。
つまりあの内側に電球のような光源があるということだろう。
ということは、電源が入った状態であった。
なるほどなるほど、なんてことはないじゃないか。
何をそんなに驚いているんだ……か……。
「……最近のロボットは宙に浮くのか―」
目の前の宇宙人を模したと思われる紫がふよふよと宙に浮いた。
宙に浮いて、その後また、重力を思い出したように落下した。

「あ、電池切れた？」

モンスターボールではなかったが、なかなか面白いおもちゃだ。

せっかくだから持って帰ろうか。

三話　スーちゃん

あの後私は、適当なところで清掃を切り上げて帰宅した。
道中にあるごみ捨て場に今回の分を放り捨てることも忘れない。
昔は一度家に持ち帰り、回収の日に捨てに行っていた。
しかしいつからだったか、それに気づいた清掃業者さんが私用のスペースを設けてくれたのだ。
ありがたき。
さて、帰宅をしたものの私を待つ者はいない。
母はとうに他界しており、父はマサラを出て行った。
父が私を捨てたのではない、私がマサラに残ることを望んだのだ。
本当に、あの時はどうかしていたと思う。
もともと父はマサラの人間じゃなかった。
旅の途中、偶然立ち寄ったマサラで母と出会い、恋に落ちた。
母の希望によりマサラに居を構えることに相成った。
（どうしてこうも、マサラの人は外を嫌うのだろうか）
ここ最近、決まって考える事だった。
基本的に誰も外へ足を向けない。
この何もない土地で、不満を抱くこともない。
それどころか外に怯えているようにすら感じられる。
（まるで、穢れを恐れるかのように）
マサラは白、穢れ無き白。
だからなのか、なんてことを考える。
その点、レッド君とグリーン君の行動は異端だったと言えるだろう。
私にとっては幸運だったが。
（だとすれば、こうも私が外の世界を求めるのは穢れてしまったからなのだろうか）
そんなことを考えながらロボットを床に置き、替えの電池を取りに物置へ向かうのだった。
＊

「なにこれ」
帰ってきた私を待っていたのは、オレンの実を頬張るロボットの姿であった。
私は幻覚でも見ているのだろうか。
ここ最近は精神的な疲労も重なっていたし、ありえなくはないか。
目をごしごしとこすり、再認識する。
ああ、幻覚じゃなかったんだな、って。
「うーん？　バイオ燃料を内蔵しているとか？　へぇ～最近のおもちゃって凄いのね」
そんな感想を抱きながらロボットの方に歩み寄る。
私に気付いたのか、ロボットは慌てて物陰に隠れる。
物陰に隠れる……？
「え？」
その足を止める。
手に持っていた乾電池がコトリと零れ落ちる。
そうして気づく。
このロボットが感情を有しているだろうことに。
（……人工知能？　いや、知能を再現するとなれば知能の仕組みが解明されている必要がある。つまり、現時点での人工知能による感情の再現は不可能）
ぐるぐると回る思考。
色々な知識を引っ張り出しては評価。
適切な情報を求めてスロットルが加速する。
（それならば何？　このあまりにも生物らしい行動は一体どういう仕組み？　ポケモンなら博士の資料で見たことがあるはずだし……）
ナナミの唯一の同い年ということもあり、ちょくちょく研究所を見学させてもらったことがある。
私が好きだったのはポケモンの事が知れる資料室で、資料室にあるすべてのポケモンのタイプくらいまでは覚えた。
だがこの紫色の何かと一致するポケモンは、少なくとも私のデータベース上には存在しない。

（未知のポケモン？　そんな低確率が目の前で起きるわけ……）
『未知のポケモン……ですか』
『そうだ。コードネーム、ＵＢ：ＳＴＩＣＫＹ』
右足で思い切り床を蹴り飛ばす。
上体を器用に曲げ、重心を移動し、ひざの関節を使って着地の衝撃を和らげる。
至ってしまった。
その答えに。
『ＵＢはいずれも強大な力を持っており、こちらの世界の人間にとっては脅威になりうる』
もしこの生命体が件のウルトラビーストだとするのなら、未知の脅威だ。
（どうするどうするどうする）
今更になって後悔するが後の祭りだ。
どうしてロボットだと思い込んだのか。
なぜその話の事をぽっかりと忘れていたのか。
（簡単だ、あまりにも非現実的すぎて思考を停止していたんだ）
付け加えて言えば、ハンサムに対する苦手意識も原因だろう。
要するに、話を聞き流していたからで、油断が招いた危機だ。
（考えろ、どうするのがいい。ハンサムさんに知らせる？　駄目だ、どこにいるのかも分からない。その間放置するのは危険だ）
突拍子もない話と、胡散臭い容貌からどうせ今後関わらないだろうとタカをくくっていた。
連絡先も交換していないのだから、伝えようとすれば町中を探し回らなければいけない。
この部屋に閉じ込めておくという選択肢もあるが、相手は未知だ。
どんな方法で解決してくるか分からない。
そこまで考えて、ふと気づく。
（どうして、何もしてこないの？）
ハンサムの言うことを鵜呑みにするのであれば、こんなナリでも安全を脅かす生命体のはずだ。

それならばさっさと私を始末してしまえばいい。
（ハンサムが嘘を吐いている？　それとも情報が間違っている？）
ぐるぐる、ぐるぐると脳が回転する。
視界に映るのは、おびえた様子でこちらを窺う紫色。
私は意を決した。
近くにあった段ボール箱からオレンの実を一つ取り出し、紫からある程度距離を取って床に置く。
「はじめまして、私はメアリー。あなたは？」
得体の知れない男の言と、自分の目で見た事実。
どちらを信じるかなんて、考える前から答えが出ていた。
だから私は、その仮説の証明に挑んだ。
「大丈夫、私はあなたの味方だよ。さっきは驚かしてごめんね。仲直り……しよ？」
私がしゃがんで、紫に向けて手を伸ばす。
紫は恐る恐ると言った様子で顔をのぞかせ、やがて私のもとまでやってきた。
そうしてオレンの実を手に取ると私の顔色を窺う。
食べてもいいのかということだろう。
「どうぞ、召し上がれ！」
紫は顔をパァっと綻ばせ、嬉しそうにかじりついた。
何が恐ろしい存在か。
普通の、可愛らしいポケモンじゃないか。
あとでハンサムに文句を言いに行こう。
「紫……って呼ぶのは失礼か。うーん、そうだなー」
ここにきて呼び名に困ってしまった。
研究所にも載っていないポケモン。
おそらく未知であることは本当なのだろう。
となると、生物学名すらないはず。
コードネームはあるみたいだし、そっちで呼ぼうか。
「スティッキー……うーん、どうにもしっくりこないような」
オレンの実を食べ終えて満足げな笑みを浮かべる紫。

その純真無垢な様子に、コードネームで呼ぶことに躊躇いが生まれる。
「スティッキー、スティッキー。うん、じゃあ略してスーちゃんだ！」
私がスーちゃんと呼ぶと、紫色は嬉しそうにその場でくるくると回った。
ハッ！　これは一番道路を突破できるのでは⁉
絶好のチャンス！
（うーん、でも探しているハンサムさんに何も報告せずに行くのはまずい気がする）
その理由は二つだ。
一つは、ハンサムが既にいないポケモンを延々探し続ける羽目になるから。
まあこちらについては別に気にならない。
マサラを発つのならば、心優しいメアリーちゃんはいなくなるのだ。
人一人に迷惑をかけたところで良心の呵責もない。
問題はもう一つの理由だ。
今後公の場でこの子を繰り出したならば、国際警察から事情を聴かれることになるだろう。
こっちは結構厄介だ。
もちろん、これはハンサムが本当に国際警察だったらばの話だ。
ハンサムが経歴詐称していると決め打つのであれば何の痛手にもならない。
けれどもし、本当に国際的な問題だったとすれば。
最悪の場合国際的に指名手配される可能性まである。
「それは嫌だな」
私は戦いの中で生き続けるんだ。
満足に戦えない牢獄で過ごすことも、警察の目を気にして怯えて過ごすのも私の望むところではない。
ということは、取れる手段は一つしかないか……。
（ハンサムさんに引き渡すしかないかー）

千載一遇の好機だ。
これを逃がしてしまえば、次に機会が訪れるのはいつになるか分からない。
だけど、この子を無断で連れて行くにはあまりにリスクが大きすぎる。
そんな私の様子をくみ取ってくれたのか、スーちゃんは私の周りを浮揚する。
大丈夫？　とでもいうかのように。
「あはは、大丈夫大丈夫。これからちょっと行くところがあるからさ、スーちゃんもついてきてくれる？」
スーちゃんは安堵の顔を見せ、私の頭に乗っかった。
重いっちゃ重いけど、まあ誤差の範囲だ。
これ以上一緒にいると別れが悲しくなってしまう。
早くハンサムさんを見つけて引き渡してしまおう。
そう考えながら、私は家を後にするのだった。

四話　神々がポイした戦闘狂

私がハンサムさんを探してマサラを散策していた時だった。
そろそろ日も暮れて、人々が家に戻り、人口が減ったように錯覚し始めたころ。
ふと、自分が付けられていることに気付いた。
今まで気づかなかったのは単純な理由で、相手が複数だったからだ。
つまるところ、相手はローテーションしながら私を尾行していたのだ。
ある程度のタイミングで入れ替わるのだから、こちらが気づくことは難しい。
一応勘違いという可能性もあるので、適当なところで角を曲がってみる。
案の定先ほどまでつけていた男は直進していき、その代わり別の男が私の後ろを追いかけてきた。
今度はピタリと足を止めた。
つけていた男が追い抜いていき、別の男が物陰で立ち止まる。
「べべー？」
心当たりと言えば、この頭に乗せているスーちゃんだろうか。
ということは、国際警察の人なんだろうか。
（さて、どっちを信じればいいかな）
私には取れる選択肢が二つある。
一つはハンサムさんを探して受け渡すこと。
もう一つは、私をつけている人たちに渡すこと。
正直どちらも怪しすぎて、どちらにも渡したくはない。
（ああ、もう一つ選択肢があったか）
浮かんだ三つ目の選択肢は、相手が接触してくるのを待つというものだ。
ここまで人員を割いて付けてくるということは、何か意味があるはずだ。

例えば上司が到着するのを待っている。
例えば私の拠点を割り出し、夜間に強襲を仕掛ける。
例えば私が、人目につかないところに移動するタイミングを見計らっている。
（そうね……この場合、ハンサムさんを探しつつ人気のない方に進んでいくのがいいのかな）
どちらにせよ怪しいことに変わりないのだ。
なら選択を運否天賦に任せてしまおう。
それもまた一興だ。
そんなことを考えながら、私は一番道路の方へと進んでいった。
マサラの人間は草むらに近づかないからだ。
果たしてその選択が正解だったのか。
私は無事にハンサムさんと合流に成功することとなる。
「む、君は……待て、まさかそのポケモンはッ！」
「あら、ハンサムさん！　私、探しておりましたの」
もうすぐ一番道路といってもいいほどの、マサラの北部。
そこにハンサムはいた。
既に月は上り始めていて、その光を煌々と地上に注いでいた。
「君、その……なんだ、そのポケモンを頭に乗せて問題ないのか？」
「？　はい！　とても可愛らしいポケモンですね！」
にっこりと笑顔を向ける。
「いや、助かった。本当に！　そのポケモンをこちらに渡してもらえないか？」
「えと、その件なのですけどね」
そう言って私は切り出す。
ほぼ断られるだろう提案。
それでも、わずかでも可能性を見出したならば試行する。
どれだけ低い確率でも、回し続ければいつかは当たるのだから。
「あの後仲良くなってしまって、もしよかったら私に面倒を見させてほしいな……って」
「むむ……」

私の無理難題に、ハンサムさんは少し思案する。
一応頭ごなしに否定はされないみたいだ。
それなら信頼していいのかな。
そう思った時だった。
「コードネームハンサム。何をしている」
「ぶ、部長！」
声がした方を振り返る。
そこにいたのは私をつけていた男の一人だった。
知り合い……というよりハンサムの上司だったのか。
なんだ、どっちに渡しても結果は同じだったってことか。
「そこの少女、その生物は危険な生き物なんだ。こちらに渡してもらいたい」
「危険？　そんなことないですよ。スーちゃんは私の友達です」
目の前の男にそう投げかける。
あわよくば、私の手持ちとして認めてくれないかなーと願って。
だけど、その願いは届かない。
「友達、友達か。本当に申し訳ないが、そのポケモンには殺処分の命令が下っているんだ」
「……え？」
プツリと。
電源が切れる音を聞いた。
今、なんて言った？
＊
「ハンサムさん……？　今回の目的は『保護』だと、そうおっしゃいましたよね？」
ハンサムさんに問いかける。
バツの悪そうな顔をするだけで、答えない。
「なんで、なんでなんですか！」
「すまない。私だって組織の人間なんだ。上からの命令には逆らえないんだ」
ハンサムさんはそう言った。

違う。
論点がすり替わっている。
「そうじゃない！　どうして私に嘘を吐いたんですか！」
「……幼い少女に語るべき内容じゃないと思ったんだ。すまない」
「そんな、そんなことって……」
頭に乗っかるスーちゃんも、状況が深刻だと気づいたのか。
私の頭を握る力が硬くなる。
私は嫌だ嫌だと、一歩ずつ後退した。
「どうして、平然とそんなことができるんですか。あなた達には、人の心が無いんですか」
例え脅威があったとしても、罪を犯したわけではない。
無実の生物を殺す。
その事に、躊躇いが無いのならば、それはもはや人ではない。
人の皮を被った、バケモノだ。
「分かってくれとは言わない。だが、最大多数の最大幸福こそが、我々の目指すところなんだ」
「その為なら少数を切り捨てたっていいっていうんですか！」
「結果として大勢が救われるのなら、どんな罪でも背負う。それが国際警察というものだ」
「そんなものは開き直りだ！」
分かりやすく言おう。
トロッコがレールを進んでいる。
このままいくと五人が死ぬ。
スイッチを切り替えればレールは切り替わり、犠牲は一人で住む。
その時に五人を助けるためならば、喜んで一人を殺す。
そんな組織だったのだ、国際警察というものは。
「渡さない！　そんな人たちに、渡して堪るものか！」
「いい加減にしなさい！」
そう言った私を一喝した男。
それはハンサムさんの上司だった。
「これ以上我々に手間を掛けさせないでくれ。これ以上わがままを言

うのならば、公務執行妨害で君を摘発しなければいけなくなる」
「……ッ！」
その発言に、少しだけ心が揺すられた。
だが、視界の隅に映るハンサムを見て思い直す。
（ここで権力に屈したら、このクズと同じだ）
わが身可愛さに権力に屈する？
ああ、それは何とも楽なことだろう。
言われた通りに過ごし、思考を手放す。
そうすれば常に言い訳ができる。
『仕方がなかったんだ』って。
大多数はそれを良しとするのだろう。
現に国際警察というエリート集団でさえ、その考えが根付いてしまっている。
誰一人として、おかしいと思ったことに反論しない。
理由を探し、こじつけ、自分を納得させる。
「そんな人形みたいな人生……、ごめんなんだよ！」
私は走った。
全力で駆け抜けた。
一番道路を、段差にあふれた道を。
でこぼこな道を、曲がりくねった道を。
悲しきかな。
大人と子供。
脚力には絶対の差がある。
「対象を確保！」
「べべー！」
「スーちゃん！」
私は組み伏せられ、スーちゃんが取り上げられる。
ダメ！
スーちゃんは何も悪くない。
誤解なんだ。
だから、この際誰だっていい。

だから、だからッ！
「誰だっていい……ッ、お願いだから、誰かスーちゃんをッ、助けてェ！」
私は叫んだ。
それは心からの嘆きだった。
そんな私の声を。
私の悲鳴を。
聞き届けたポケモンが一匹。
「な、何だこれは！」
「スーちゃん……？」
目の前でスーちゃんが輝く。
空に浮かぶ月光すら霞むほど眩く。
周囲を昼間のように明るく照らす。
やがて光がおさまって行ったとき、そこにいたのは一体のドラゴンだった。
「ギシャァァァァ！」
光がおさまると同時に、見えない刃が空気を走る。
そのポケモンが放ったのは、おそらくエアカッター。
取り囲っていた国際警察をいっしょくたに切り伏せる。
あちこちで悲鳴が上がる。
鮮血が、殺風景なこの場所を殺伐としたものに変化させる。
吹き抜ける風だけが、音を立てていく。
吹かれた草木がざわめく。
恐る恐る、私は問いかけた。
「スーちゃん……なの？」
そのドラゴンは頷いた。
瞬間、緊張の糸が切れたかのように。
その場にへたり込んで、私は涙ぐんだ。
良かった、何とかこの場を凌いだんだと。
「早く、この場を後にしましょう！」
急いでトキワシティまで北上してしまおうとした時だった。

「待て……そのポケモンを置いていけ。見ただろう、ただのエアカッターがこの威力。そのポケモンは、世に放っちゃいけないポケモンなんだ」
「……本気で言っているの？」
私は足を止め、その警察官と向き合う。
ハンサムの上司だ。
エアカッターで腱を切られたのか、無様に這い蹲っている。
「ああ、本気だ。やはり異世界の化け物だ。今なら間に合う。さあ、早くこのボールに収めて、こちらに渡すんだ」
そう言って私にモンスターボールを差し出す。
私はそれを受け取った。
そして見下す。
「誰があなた達みたいな『悪党』の言うことなんて聞くかっていうのよ。この期に及んでまだ他の生命の死を望んでいるなんて、気が狂っているんじゃないの？」
ポケモンの攻撃を生身で受けて、命乞いではなく殺処分を遂行しようとする？
さぞかし崇高なことなんだろう。
けれど私には分からない、分かりたくもない。
分かったことは一つだけ。
「この世界は狂っている。誰も彼もが、自分を殺して生を装っている。私は、お前らみたいにはならない」
月明りだけが、私を照らす。
血を吸いこんだ大地を、私は歩いて行く。
この狂った世界を、根底から否定してやる。
＊
その日、マサラタウンで一人の少女が行方不明になった。
少女の名前はメアリー。
心優しく、お淑やかで。
今は国際警察から指名手配されている。

五話　悪、あるいは正義と呼ぶべきもの

その日のうちの、トキワシティ北部。
私たちはそのまま、二番道路に向かおうとしていた。
本当なら一晩過ごそうと思ったが、思い直したからだ。
（確実に連絡は行っているはず。トキワでのんびりしていたら明日には厳重態勢が敷かれてしまう）
男は言っていた。
スーちゃん――ＵＢ：ＳＴＩＣＫＹ――に殺処分命令が下っていること。
男は知っている。
ＵＢ：ＳＴＩＣＫＹが進化していて、そしてその力がいかに強大であるかを。
男は伝えたはずだ。
私がトキワに向かったということを。
私ならばトキワを封鎖する。
そして徐々に追い詰めていき、炙り出す。
トキワで一晩過ごすだけで事実上の詰みだ。
（だから、一刻も早くトキワの森を抜けなければいけない）
ニビにも警備は置かれるだろうが、トキワほどじゃない筈だ。
それにニビまで行ってしまえば、お月見山、ハナダシティとどんどん遠くへ行ける。
朝日が昇るまでに、ニビに行く。
だから、そこをどけ。
「ほぅ。国際警察に歯向かった者がいると聞いて足を運んでみれば……。随分とかわいらしい子供じゃないか」
「おあいにくさま、一回り以上年の離れた男性は対象外よ。あんたも国際警察の人かしら？」
「さぁ、どうだろうな」
私の目の前には、一人の男性が立っていた。
オールバック風の黒髪に黒いスーツ。

顔は彫りが深く、目つきは鋭い。
こんなのですら国際警察なのかと思うと気が滅入りそうになる。
しかし、可能性としては非常に高い。
まず一つ、私が国際警察に歯向かったことを知っている点。
これは今はまだ公表されていないだろう事実だ。
私を指名手配するなら、私が犯した罪について知らせる必要があり、そうなればスーちゃんの事を一般に知らせなければいけない。
しかしそれは民衆の不安を煽ることになり、それはあいつらのいう最大多数の最大幸福に反する。
故に、『なぜかは分からないがトキワに警察がいっぱいいる』くらいで済ませると考えるのが自然だ。
そして二つ目、漂う強者のオーラだ。
対峙して分かった。この人は強い、それも常識の外にいるほどに。
それだけの力を持った人物が、一般人の枠に収まるわけがない。
その点、国際警察だと言われれば納得できてしまう。
「……私を、いえ、私たちをどうするつもり？」
私はいつでもスーちゃんを繰り出せるようにボールに手を掛ける。
相手からは見えないように、半身になって、自分の体でボールを隠しながら。
ここで騒ぎを起こしたくない。
こんなところで時間を食っている場合じゃない。
だが、そうしなければ先が無いというのなら。
私は悪手だろうと打ってみせる。
「ふっ、冗談だ。私は国際警察の手のものではない。むしろ敵だ」
「……敵……？」
私が警戒している様子を見て、男が笑った。
私など取るに足らない相手だと言わんばかりの、強者の余裕を見せながら。
それは、一段と私の警戒心を強める。
気づけば重心を落とし、初速度を得られるよう体勢を整えていた。
「ああ、惜しい、実に惜しいな。その思考力、その考察力、その直感力。

十分な素質がありながら活かすだけの力が無い」
「あんた、何が言いたいの？」
私を見て、男は楽しそうに笑う。
「私の部下になれ」
「……はぁ？」
いろいろと考えていたことがプツリと途切れ、そしてまた思考を再開する。
部下になれ？
ということはこいつは何らかの組織に所属していて、それなりに身分のある立場？
そして国際警察と敵対しているという発言。
「ロケット団？」
私が何となしに呟いた言葉に、男が面食らった。
ほんの少し、静寂が訪れた後、男が快活に笑う。
「く、くく、ハーハッハッハーッ！」
男は高らかに笑う。
実に楽しそうに、実に愉快そうに。
空を仰ぎ、胸を震わせる。
「ああ、わずかな情報量から解を導き出す頭脳。いい、実にいい。私ならお前に力を与えてやれる。お前の居場所を作ってやれる」
ひとしきり笑った後、男は私にそう言った。
そしてこう続ける。
――さぁ、どうする？
と。
「お断りよ」
「ほう、何故だ？　分かっているのだろう。このままであれば近い将来捕まえられる。だから急いでニビに向かった。だから先を急いでいる」
即答で断った私に、男は問うた。
そこまでの頭がありながら、なぜ断るのかと。
私は答える。

「あなた達の考えは、根底ではあいつらと変わらない。ポケモンを尊重していない。独善的で自己中心的で、私が一番嫌い」
私は続ける。
「そして一つ勘違いしているわ。私たちは捕らえられるつもりはない。国際警察にも、狂ったこの世界にもッ」
私がそう言うと、男は落胆したようにこう言った。
「そこは未熟か。まあ、子供にしては自我がしっかりしていると誉めてやろう、特にマサラの人間にしては上出来だ」
男が腰に手をあてがう。
カチリと、ボールを取り外す音がする。
私も開閉スイッチを押し、準備する。
「口だけではどうにもならないことがあることを、力が無ければ何もできないということを知れ！」
「それは私が自分で掴み取るんだ！　誰かに与えられた力なんかで、懐柔されてたまるものかッ！」
そんな会話を口火に、戦いの火蓋は切られた。
私と男がボールからポケモンを繰り出す。
私は当然、スーちゃん。
相手が繰り出したのは。
「サイドン、蹂躙しろ！」
サイドン。
二メートル近い巨体に百キロ超えの体重。
怪獣を体現したドリルポケモンがそこに立っていた。
「ほう、それが噂のウルトラビーストという生物か。実に興味深い」
「岩地面タイプとか、ちょっと紳士的じゃないんじゃないですかねぇ」
私と男が、それぞれ思ったことを口にする。
スーちゃんはおそらく、毒ドラゴンタイプだと思うから毒技やドラゴン技を使えるだろう。
先の戦いからエアカッターが使えることも分かっている。
だが、エアカッター、毒技は半減され、それどころか相手の地面技で抜群を取られてしまう。

レベルも相手が圧倒的に上。
「スーちゃん、ドラゴン技！」
「……愚かな」
先手必勝と打って出た私。
それに対して男はあきれたように言った。
「わざわざ敵に情報を与えるなど言語道断。加えて自らの手持ちの事も理解できていない。そう言ったところはまだまだ子供か」
スーちゃんが指示通りドラゴン技を繰り出してくれる。
それがサイドンに当たる前に、飲み込まれた。
「なに、これ」
砂嵐が吹き荒れる。
トキワの、何もない更地にだ。
先ほどまでは無かった。
吹き荒れる風も、どこか不自然だ。
そうして思い当たる。
研究所の資料室にあった、ワザに関する記述項目。
昔は何のためにあるのか分からなかったその分類。
物理技でもなく、特殊技でもないその分類。
それに気づいた私は――
――歪な笑みを浮かべた。
「ああ、なるほど。・そう使う・のね」
子供の考えなど単純だ。
レベルを上げて、物理で殴ればいい。
しかし、それではダメなのだ。
届き得ない場所が、必ずある。
「スーちゃん」
学習する。
戦闘に関する知識を貪欲に。
スポンジが水を吸うように、戦いの中で成長する。
指示を出すのは確かに愚策だ。
ならばポケモンに意図を汲みとってもらえばいい。

ああ、楽しい。
私は今、考えている、成長している。
私という存在は、確かにここに存在しているッ。
サイドンが砂嵐を切り裂いて突進してきた。
直前まで知覚できないその攻撃に、対処することはできない。
だから、避けない。
ドシンと。
サイドンが思い切りぶつかる音が聞こえる。
攻撃をもろに受けたスーちゃんはしかし、どろんと煙を立てて消えた。
「サイドン！　上だッ！」
「もう遅い、スーちゃん！」
スーちゃんにあらかじめ使わせていた技は二つ。
一つは身代わり。
これは体力の四分の一を削ることで分身を生み出す技。
削った分のヒットポイントが削れるまでは、その名の通り身代わりになってくれる。
そしてサイドンが攻撃してくる前に空中に退避。
指示していたもう一つの技を行使する。
その技は、悪だくみ。
悪いことを考えて頭を活性化、特攻を倍にする。
「喰らえッ！」
スーちゃんのドラゴン技が通る。
悪だくみを積んだことにより、威力が跳ね上がったそれは、フィールドを吹き飛ばした。
その一撃を受けてサイドンは流石に倒れて……。
「ギシャァァァァ」
次の瞬間、襲ってきた岩石群。
スーちゃんの体力が一瞬で蒸発する。
砂嵐が晴れる。
そこには、大してダメージの通っていないサイドンと、倒れ伏した

スーちゃんがいた。
「バトル中に成長する才能。その類稀なるバトルセンス。実にいい。だが、今のお前には決定的に足りないものがある」
「そんな、スーちゃん……」
スーちゃんに歩み寄る。
男が何かを言っているが、丸で頭に入ってこない。
目の前が真っ暗になりそうになる。
痛かっただろう、苦しかっただろう。
そしてそうしてしまったのは、私が未熟だったからだ。
男はサイドンをボールに戻すと、こう続けた。
「力だ。力さえあればお前は勝てていたッ！」
左手をぎゅっと握りしめる。
「この結果、この結末はお前の甘えによるものだと知れッ！　砂嵐下で岩タイプの特防が上昇することを知っていれば、事前に防げれば、また違った展開が待っていたッ」
男が勝手なことをのたまう。
ふざけるな。
私はまだ、数十分前にトレーナーになったばかりなんだぞ？
そう。
『仕方がなかった』か？　そういって今を妥協するつもりかッ」
頭をぶん殴られた気がした。
実際にはそんなことは無いし、ただの錯覚だ。
だが、どうしようもなく頭に響いた。
「これから先、力及ばず敗れる度にそういうつもりか。ベストを尽くさなかった自分に言い訳をして、他人のせいにして、そうやって生きて行くつもりか？」
男の言葉が頭に染み渡る。
ああ、そうだ。
私は、強くならなければならない。
「もう一度言う。私の部下になれ。そうすればお前に力を与えてやる。理不尽に抗えるだけの力を」

善だろうが、悪だろうが関係ない。
私は、自分の信じる正義を執行しなければいけない。
その為なら、利用できるものはすべて利用しろ。
ベストを尽くせ。
だから、私は男の言葉にこう返した。
「寄越せ」
と。

六話　過去、あるいは未来と言うべきもの

「目覚めはどうだ」
「最ッ悪」
トキワジムの宿泊施設。
その日の朝は、こうして始まった。
一人は黒いスーツに身を包んだ男。
先に声を掛けた中年で、名をサカキといった。
もう一人は、右腕に大きな醜い傷を負った少女。
マサラ生まれのメアリーであった。
メアリーは先日、国際警察に喧嘩を売ったばかりであった。
そこを助けに入った男がサカキだった。
ならば何故、彼女の口から最悪という言葉が出たのか。
その原因は、昨日男の口から告げられたことにある。
彼女に接触してきたこの男が、ロケット団であることは分かっていた。
だがまさか、ロケット団のボスで、しかもトキワシティのジムリーダーとは誰が予想できようか。
彼女の中で、警察に対する評価がさらに下がった瞬間であった。
とまあ、そういう埒外の人物と寝覚めに会話することになり、気が滅入っている。
それが彼女の心情であった。
「まあそう邪険にするな。これから必要になるであろうものを持ってきたやっただけだ」
サカキはそう言うと、メアリーに小箱を放り投げた。
それを事もなく片手でキャッチすると、少し訝しげにしながら中を確認する。
そこには二つのものが入っていた。
「トレーナーカードと、なにこれ？」
一つは彼女も言ったようにトレーナーカード。
それも、身分を詐称したものであった。

「トキワシティのメア……ねえ」
そんな彼女のぼやきに、サカキは「ありがたく思えよ」と返す
マサラタウンのメアリーはこれから国際警察に目を付けられることになる。
故に、偽りの身分証が手に入るのは確かに、彼女にとってありがたかった。
「礼は言っておくわ。それで、こっちの機械は？」
箱に入っていたもう一つのブツ。
黒の直方体のような形状をしており、横には電源ボタンのようなものがある。
何となしに電源を入れると中央の液晶に画面が映る。
「？　ああ、そういうこと」
「気に入ってくれたかな？」
扉に目をやると、ニヤリとしたサカキが立っている。
苛立ちはするが、彼女としても非常に助かるものだ。
どこまでも周到な用意に、薄気味悪さを覚えながらも礼を言った。
そして、疑問に思ったことを素直に切り出す。
「あなたは何がしたいの。はっきり言って、行動が支離滅裂とし過ぎている」
そう、それが疑問だった。
「第一、どうして私に接触を試みたの？　スーちゃんが目的だったんじゃないの？」
サカキは言った。
国際警察に歯向かった者がいると聞いたから足を運んでみたと。
ならばその情報は、ロケット団のボスであるサカキに伝えなければいけないほど重要だったはず。
それは彼女が歯向かったということか、スーちゃんがフリーだということか。
普通に考えれば、スーちゃんのことだと考えるのが自然だ。
「第二、何故スーちゃんを奪い取らず私の手元に置いている」
仮にスーちゃんではなく、国際警察に歯向かう彼女に興味を持った

とする。
しかし、強力な力を持ったポケモンを取り上げることなく、そのままにしておくなど非合理にもほどがある。
それをするだけの実力を有しておきながら、何故そうしないのか。
「第三、いくら何でも厚遇過ぎる。何が狙いなの」
一度は自分にすら噛みついてきた未熟な子供。
彼女が従属しているわけじゃないことなど分かり切っているだろう。
力さえ身に付けてしまえばこんな組織、一握の価値すらない。
だというのに、先ほど渡された二つのアイテム。
私を懐柔できると思っているのか、裏切らないと思っているのか。
彼女には意図が全く見えない。
「答えられるものなら答えてみなさいよ」
だから彼女は問いかける。
お前の目的は何だと。
だが、サカキの口から告げられるのは答えではなかった。
「望んだものが与えられると思うなよ。それはお前が自らの手で手に入れるものだ」
「ここまで散々恵んでおいて……！」
苛立ちがてっぺんに到達する寸前。
ふとサカキの言葉が脳裏をよぎる。
『これから先、力及ばず敗れる度にそういうつもりか。ベストを尽くさなかった自分に言い訳をして、他人のせいにして、そうやって生きて行くつもりか？』
彼女は、彼女に向けて言ったものだと思っていた。
だがもし、その前提が間違っていたとすれば……？
「……同情のつもり？」
その仮説が浮上して、一気に冷静さを取り戻した。
『「仕方がなかった」か？　そういって今を妥協するつもりかッ』
あれも、これもそうだ。
彼女はそう思った。

どれもこれも、彼女の未来を指しているものである。
だから疑問に思わなかった。
故に気付かなかった。
あまりに、具体的過ぎるという違和感に。
まるで、未来を見てきたように。
さも、その未来を知っているかのように
あたかも、未来を体験してきたように。
だからこそ、心に響いた。
それゆえに、心ゆすぶられた。
それだけに、心を動かされた。
そうして『核心』に至る。
（私の未来を指摘したものではなく、自分の過去を罵ったものではないのか？）
果たしてその『確信』は正しかったのか。
サカキはそれに、無言という形で返答した。
だからこそ私は、意を決した。
（私は、お前と同じ未来は選ばない）
沈黙という肯定を見て確信した。
こいつは失敗したと、否、現在進行形で失敗し続けていると。
もともと何を求めていたのかは私の知るところではない。
だが結果として、ロケット団は悪としてみなされ、それに付き従うものもまた悪意を持った者達だ。
（私はそんな組織で埋没するつもりはない）
私が望む未来は、誰もが私を正義だとあがめるものだ。
異なる考えを受け入れ、共鳴し、ハーモニーを奏でる。
そんな未来を、私が切り開くんだ。
国際警察のように、一方的な慈悲を向けるのではない。
ロケット団のように、どこからも慕われない組織ではない。
誰もが自らを尊重し、他を尊ぶ。
そんな未来を、私は切り開いて見せる。
（だから、せいぜい反面教師にでもなってくれ）

＊

その日の夜、サカキの自家用ジェット機で私は移動させられていた。

行先はニューアイランドとかいう孤島らしい。

なんでもポケモンの研究をしている施設で、スーちゃんの特殊技能も計測する予定だとか。

もちろん生体実験を行うことは拒否した。

せいぜい戦闘中のデータを計測する程度にしろと。

端から期待してはいなかったが、意外にも受け入れられて拍子抜けしてしまった。

椅子に腰かけ、与えられた機械をいじくる。

おもちゃを与えられた子供の様に。

その機械には、膨大なポケモンの情報が記されていた。

そして、手持ちの情報も。

「学術名アーゴヨン、毒・ドラゴンタイプ、特性ビーストブースト」

サカキは言った。

私は、自らの手持ちの事も理解できていない、と。

知は力なりとはうまくいったもので。

どうせ向こうに着くまで暇なのだ。

おとなしく知識を貪ろう。

「主なワザ、龍の波動、流星群、ヘドロウェーブ、火炎放射、大文字、目覚めるパワー、とんぼ返り、身代わり、悪だくみ」

それぞれの技の効果を調べていく。

放った後に特攻が下がるもの、毒や火傷の追加効果があるもの。

個体によってタイプが変わるもの、攻撃後控えに戻るもの。

実に多種多様なワザがあり、ポケモンバトルがいかに複雑かの一端が垣間見える。

ある程度の事前知識を習得し終えた私は、他のデータに目を通す。

手持ちの事は、実体験して叩き込んだ方がいい。

それよりも先に知るべきことがある。

（例えば戦略・戦術）

アーゴヨン一匹でさえ、持ち物によって立ち回りが変わる。
例えばスカーフを持たせた超速アタッカー。
あるいは命の珠を持たせた高火力アタッカー。
もしくは気合の襷を持たせたストッパー。
それが最大六体まで連れ歩けるのだ。
パーティの組み合わせは、創意工夫次第で無数に広がる。
だが、それを全て知るのはフレーム問題により不可能だ。
故に、大まかに分類し、組み分ける。
（大きく二分するならサイクル寄りか、対面寄りか）
サイクル寄りというのは、いわゆる交換合戦に重きを置いた戦い方だ。
相手が水タイプならば草タイプを、草タイプには炎タイプを、炎タイプには水タイプを。
そうして有利な状況を作り出していくゲームプランニング。
これには役割論理、受けループ、トンボルチェン、コントロールなどが当たる。
一方対面寄りというのは、交代を基本的に行わない戦い方を指す。
交換するということはつまり、隙を作るということだ。
その隙を相手に与えるくらいなら、そのポケモンは切り捨てて裏のポケモンで対処する。
これには汎用理論、天候パ、起点構築などが当たる。
（さらにそれらも細かく分類される）
例えば起点構築には、壁張りエース、トリルパ、バトンパなどがあるし、天候パには砂パや雨パがある。
トンボルチェンといっても、上からとんぼ返りやボルトチェンジをうち、後ろのポケモンで攻撃を受けるものもあれば、攻撃を受けてから後続につなぎ、後続の負担を減らすものもある。
それらもさらに分類していくと、砂パにもバンギラスを使うのかカバルドンを使うのかギガイアスを使うのか。
そういった様々な戦術が、多種多様に存在している。
つまるところ、知ることから始めろと言われても、知らなければい

けないことが多すぎるのだ。
それほどの知識、詰め込んだとしても利用できない。
どれほど優良な燃料があっても、エンジンがボロボロではまともに機能しない。
（あはは）
けれど、その少女はうすら笑いを浮かべて。
まるでのめりこんでいくかのように、貪欲にそれらを吸収していった。

赤の章　慕

俺の名前はレッド。
マサラタウンのレッドだ。
俺には三つ上の姉貴分がいる。
優しくて、お淑やかで、でも叱るときはきちんと怒ってくれて。
そんなメア姉の事が好きだった。
メア姉といっても、別に血がつながっているわけではない。
それなのに、何故メア姉と呼ぶか。
それは彼女の家庭ぐるみの問題だったりする。
彼女の母は、俺が生まれたころに他界したらしい。
そして、父はマサラタウンを出て行ったと聞く。
憤慨もしたけど、メア姉がマサラを選んで残ってくれたと知ったときはうれしくもあった。
そんなわけで、身一人の子供ということもあり、度々我が家で食卓を一緒に囲んだりもしたのだ。
俺からすれば昔からずっと一緒にいる存在。
姉みたいなものだった。
＊
『草むらに入ってはいけないよ』
俺の育ったマサラタウンには、そんな約束事があった。
だけど禁止されると破りたくなるもので、ダメだと言われれば知りたくなるもので。
四歳の時の事だった。
俺は幼馴染のグリーンを誘って、一番道路にこっそり忍び込むことにしたんだ。
それが禁止されている理由は、知っていた。
野生のポケモンが現れるから。
だけど俺はそのことに対して、きちんと危険性を理解していなかったんだ。
テレビで見るポケモン達は、みんな人と仲良くしていたから。

知る由もなかったんだ。
あの日の事は、今でも夢に見る。
メア姉に叱られたということも、グリーンが俺に責任を擦り付けてきたことも。
全てが大したことなく感じるような悲劇。
あの時の俺に言ってやりたい。
迂闊なことはするなと。
だけど分かるはずがないだろう？
当時四歳だった俺に、ポケモンが危険な生き物だと言われたって、分かるわけがないんだ。
自分の愚かしさが嫌になる。
呪ってしまいたくなる。
今も網膜に焼き付いて離れない、あの日の光景。
鮮血を噴き上げながら、俺を庇ったメア姉の姿。
俺のせいだ。
俺が野生のポケモンの怖さを知らなかったから。
俺が草むらに行こうなんて言ったから。
俺が約束事を、破ろうとしたから。
俺が、俺が……。
痛々しかった。
血が流れ出ていくさまが、恐ろしかった。
だがそれは、俺の主観的な感想で、メア姉がどれだけ苦しかったかなんて、俺には推し量ることしかできない。
知る機会を、永遠に失ってしまったんだ。
どうすれば謝れるのか分からなかった。
許してもらえるなんて思わなかった。
もうあの優しさにも触れることも、笑顔を見ることもできない。
それほどの罪を犯したと思った。
なのに、それなのに。
『よしよし、分かってるよ。でも、もう二度とこんなことしちゃダメだぞ？』

『あはは、かわいい弟分が無事だったんだ。どうってことないよ』
怒るでも、嘆くでも、悲しむのでもなく。
ただやさしく、諭してくれたんだ。
暴力的な優しさだった。
悪いことをして、優しくされることが、これほど痛いことだとは思わなかった。
俺を思う言葉一つ一つが、俺を貫いた。
俺は、俺は……。
＊
いつか、恩返しをしようと思った。
それがどういう形なのか、どうすればいいのかなんてわからない。
一生かかっても、俺の罪が許されることは無いだろう。
否、たとえ天が許しても、俺自身は一生背負っていくつもりだ。
いつか、手助けになりたいと思った。
俺と違って、完全無欠のメア姉に、そんなことが起きるのかと思った。
だけど、未来というのは存外分からないものだ。
メア姉が苦しむことがあるのなら、その時は支えになってあげたいと思った。
いつか、頼られたいと思った。
庇護対象で、やんちゃで、手のかかる弟分。
今はそう思われているだろうけど、いつの日か俺を頼ってくれるような。
そんな立派な男に成長しようと思った。
だからかな。
今となっては、こう思う。
（いつかって、いつだ……？）
お前はいつだって、行動が遅い。
すべてが手遅れになってから、あの時ああすればよかったと、こんなことしなければよかったと。
取り返しがつかなくなってから過去を嘆く。

（いつかって、いつだよ……ッ。未来が分からないと言いながら、何故明日が当たり前のように続くと思っていた……ッ！）
歯を食いしばる。
こぶしを握り締める。
やり場のない怒りを、机に向かって振り下ろす。
（お前はいつもそうだ！　いつだって失敗してッ！　約束の一つも、誓いの一つも守れやしねェ！）
立てた誓いを果たす機会は、音を立てて崩れ去った。
俺が八歳になったある日の事。
メア姉がマサラから姿を消した。
（それどころじゃねえ、いつも一緒にいたのに、大事な時に限って一人にしたッ！）
その数か月後の事である。
メア姉が国際警察に指名手配されたのは。
曰く、公務執行妨害と、過剰防衛。
非常に危険なポケモンを連れ歩いている。
嘘だと思った。
あるいは、何か理由があったんだと思った。
その理由を知ることはできない。
姿を消してしまったのだから。
それまでに手助けできていれば、俺の事を頼りになる弟分だと思ってくれていればッ。
国際警察と問題ごとを起こす前に、俺に話してくれていたら。
そうすれば、支えに成れたのに。
（お前が役立たずだったからだ！　愚鈍で愚劣で愚昧だったからッ！）
己の無力さを嘆く。
もっと強ければ、もっと力があれば。
だけど過去はすでに確定していて、抗う術もなく。
自らの非力さを呪うしかなかった。
（俺は一体……何のために……）

生き残ったのだろう。
悔やんでも悔やみきれない。
無気力に、今日を生きて行く。
（メア姉、俺にはメア姉の右腕を犠牲にしてまで、生き残る価値、あったのかなぁ）
魂が抜けたように、虚空を見つめた。
何もない。
何もない。
……見据えた先にも、俺の将来にも。
＊
あれから三年がたった。
メア姉が居なくなった時と同じ、十一歳になった。
時というのは、あまり役に立たないらしい。
俺の心が癒されることは無く、それどころか夢見る度に摩耗していくばかりだった。
「何の意味があるというんだろう。こんな無価値で空っぽな、俺の一生に」
そんな思いが、ついに言葉として吐き出されてしまった。
もうだめだった。
結局俺は、どこまでも無力で無価値で何もなくて。
このまま一生、引きこもって死ぬくらいなら。
そう思うと、体がふらふらと動き出した。
どこに向かっているのか、俺にすら分からない。
いや、分かっている。
知らない振りをしているだけだ。
一番道路を前にする。
これから行うことは、メア姉の思いを犠牲にすることだ。
だけど、だけどッ。
「ごめんメア姉……、俺、もう無理なんだッ」
一歩また一歩と踏み出す。
死が、すぐそばにある。

存在を増し、俺を支配する。
草むらに一歩踏み入れようとして、声が聞こえた。
「おーい、待てー、待つんじゃー」
どこかで聞いた声。
昔々の話。
振り返り、思い出す。
ああ、グリーンのおじいちゃんか、と。
グリーンのおじいちゃん、オーキド博士は続ける。
草むらでは、危険な野生のポケモンが飛び出すと。
（痛いほど知っている）
こちらもポケモンを持っていれば、対抗できると。
（その力を持っていたら、あるいは過去を変えられたかもしれない）
すべてはたらればで、無意味だ。
過去を嘆いたところで、未来は変わってくれない。
世界はそんなに、優しくできていない。
そんな世界だから、俺は。
命を投げ捨てようと思った。
メア姉が国際警察と交戦した、一番道路で断とうと思った。
だから、放っておいてくれ。
そんな俺の後ろ向きな考えは、続く言葉で打ち消されることになる。
「そうじゃ！　ちょっとついてきなさい」
「は？」
その日、人生で一番間抜けな声を晒した。

二章　まず壊より始めよ

一話　コニー

これから話すのは、とある少女の昔話。
私がニューアイランドにきて三年目。
十四歳の夏の頃の話である。
＊
「あ、あの！　ポケモンの回復が終了しました！」
「……誰？」
私がニューアイランドに来てから、約三年の月日が経過していた。
その間施設内の顔触れに変わり映えは無いので、ここに居る全員見たことある程度の認識は持っている。
否、認識していると自負していた、と言い直すべきか。
唐突に私の部屋に押し入ってきた彼女の顔は、過去三年で見た覚えが一切なかったからだ。
「は、はい！　本日付けでここに配属されたコーニッシュといいます！　よろしくお願いいたします！」
なるほど、新顔だったか。
さすがに三年間一度もあったことがないというのは考えづらいものな。
私の記憶力もまだまだ捨てたものじゃないな。
「ん、スーちゃんのお届けありがとね。あと悪いんだけど名前覚えるつもりないから」
上げて落とす。
それだけで私の評価は底知らずに落ちるだろう。
もともと実力をつけるためにここに来ただけだ。
ある程度の力もついたし、頃合いを見てここを抜け出そう。
故に、こいつと馴れ合う必要もない。
届けられたスーちゃん――アーゴヨンのボールを受け取る。
そしてその足で戦闘訓練場へ向かった。

＊

「次」

私の声に反応し、訓練場が動き出す。

四方に点在する門から、様々なポケモンが襲い掛かってくる。

「スーちゃん、ヘドロウェーブ」

それらをまとめてなぎ倒す。

時折タイプ相性で耐え切り、荒波を抜けてくる相手もいる。

しかしそういった輩はやはり、龍の波動や目覚めるパワーで斬り伏せられる。

「次」

淡々としたルーチンワーク。

そこに在るのは一方的な虐殺劇であり、圧倒的な蹂躙であった。

要するに、そこに心揺すぶられる刺激は存在していない。

「次」

与えられたノルマを淡々とこなすだけの毎日。

そろそろ飽きてきたな。

潮時だ、組織を抜ける準備を開始し始めよう。

そんなレベリングを淡々とこなし、いつしか戦場には私たちだけが残っていた。

血と汗と屍の上に、私たちは存在していた。

血液が暴れ、細胞が酸素を欲する。

けれど、汗をかくことも肩で息をすることもしない。

強者は決して自分の疲労を表に出さない。

「お疲れ様です、メア先輩」

「ああ、さっきの」

そんな私の前に現れたのは、先ほどスーちゃんを私に送り届けに来た団員だった。

「コーニッシュです、コニーと呼んでください」

「いやよ」

そう、コーニッシュと言ったか。

だが先ほども言ったように、私はここに長く居座るつもりはない。

このまま誰とも仲良くなるつもりもない、情が移ったりするとめんどくさいし。
今でこそ落ち着いてきているが、当初は結構メンタルがやられていた。
マサラに対して思い入れがあったわけではない。
けれども、おいてきた弟分――あの子たちがどうなったか。
その事が私を度々滅入らせていた。
三年という月日は幾分か私から人情というものを削り取ったが、ついぞ消し去ることは叶わなかった。
きっとこれから先もなくなることは無いだろう。
苦しまずに済む唯一の方法は、最初から関わり合わないことだ。
「それは、困るんじゃないですかね？」
「私はここに居る全員の名前を憶えていないわ。無駄だもの」
「いえ、そういうわけじゃなくてですねぇ……」
彼女は、歯切れが悪そうにこう言った。
「私、今日から配属されたんですよ。メア先輩の侍女として」
「……はぁ？　ああ、なるほどね」
一瞬、何を言っているんだこいつはと思ったがすぐに理解した。
つまりこいつは、私の監視役というわけだ。
侍女という名目で私に付きまとい、行動を逐一報告するのだろう。
むさいおっさんならセクハラで訴えることもできるが相手は私より幼い幼女。
引き剥がすなんて無慈悲なことができるはずがない。
そう思っているんだろう。
「なるほど、じゃあコニたん。あんたクビで」
一瞬の静寂。
止まったのは思考か時間か。
少しして停止状態が解けた彼女は大声で叫んだ。
「えええええぇ!?」
うるさっ。
おおう、三半規管がぶち抜かれるかと思った。

手遅れだと感じてからでも耳を塞いじゃう現象何なんだろうね、脊髄反射の一種なんだろうか？　聴覚も脊髄で反射するのかな？
「な、なんでですか!?　私まだ粗相してませんよ!?」
「ちょ、おま、揺するな」
爆音でくらくらしているところに、追い打ちを仕掛けるように彼女が私を揺する。
おぇ、気持ち悪い。
スーちゃんのベノムショックの餌食にしてやろうか。
そんな感じで軽く殺気を飛ばす。
「っ！　ご、すみませんでした！」
私の殺気を直に喰らった彼女は、コソクムシもびっくりな速度で逃げ出した。
こっちは有酸素運動を無呼吸で為し終えた後なんだよ、ちょっとは気を使え。
「で、でも。どうしてクビなんですか」
「……はぁ」
見捨てても問題の無い相手。
むしろ、これから切り捨てる相手なのだ。
別にそれにこたえる必要はない。
けれど、どこかに弟分の面影を見てしまい、つい甘く接してしまった。
「第一に、自分の事は自分でできる。人手に困っているということもない。故に、私の世話係といわれてもただのニート以外の何者でもない」
私の言葉に、涙目になる彼女。
それくらいでいい。
今仲良くなったって、苦しくなるだけだ。
「第二に、私の領域に土足で踏み込まれたくない。私には私の時間や空間があるの。そこを勝手に侵さないで」
これは暗に、私の逃走計画の邪魔をするなということだ。
彼女が私のお目付け役としての役割を認知しているかいないかで、

この言葉の意味は大きく変わる。
もし、私の動向を逐一報告しろと言われているのであれば、この発言は受け入れられないだろう。
だが単純に、私のそばにいろとだけ言われている場合、交渉の余地を残すものになっている。
要するに、この後の彼女の言動で、サカキとこの子の関係を見抜こうというものだ。
「あとついでに、まだ粗相してないって……これから粗相するみたいな発言してるんじゃないわよ。そんな奴雇うわけないでしょ」
また同じような失敗をしてしまうかもしれない、そんな言葉を使う相手を信頼できるだろうか。
人によっては、もう一度チャンスを与えるというかもしれない。
だけど私が思うにそれは信用であって信頼ではない。
携帯小説で『ご都合主義』とか『拙作』とか書いてあると読みたくなくなるようなものだ。
「以上から私にあなたを侍女にするメリットがない。分かったらさっさと荷物をまとめて帰ることね。あなたにも家族がいるでしょう？」
くにへ　かえるんだな。　おまえにも　かぞくがいるだろう……。
私の脳内に浮かんでいたのはそんなセリフだった。
「う、」
う？
ウから始まる言葉、何かあっただろうか。
「ぐすっ、ひっく。えぐっ」
落ち着け、私はできる子だ。
まず現状を理解しよう。
目の前にはロケット団員がいる。
ロケット団なんてカントー、ジョウトの掃きだめ集団みたいなものだ。
人間らしさの一つや二つ、既に失っているようなろくでなしだ。
血も涙も笑顔もない、そんな人で無し集団。
ならば、この少女の態度は何だ？

「……泣いて、いるの？」
現状から推論するに、最も尤もらしい答え。
だがしかし、少女とはいえロケット団にいるような存在が、涙なんて流すのだろうか。
「ず、ずびばぜん」
泥のように濁った謝罪し、彼女は走り去っていった。
失礼しますと、言い残して。
私は、自らの手を少しだけ伸ばした。
けれど、足を縫い付けられたのかと錯覚するほどに、その場を動くことは無かった。
声をなくしてしまったかのように、無音だけが喉を通り過ぎた。
「ああ、もう。いったい何だっていうのよ」
イライラする。
唐突に表れて、無遠慮に忍び込み、ちょっときつく当たるだけで泣き出す。
純粋な子供かっていうんだよ。
なんでそんな子供がロケット団なんてやっているのさ。
「……」
どうすればいいかなんて、分かっている。
私からごめんねと謝る。それだけの事で彼女の心は晴れるだろう。
だが、私の醜い部分が囁く。
（どうして彼女にそこまで肩入れするの？）
私としては、ロケット団に人権は無いと思っている。
自ら正義であることを諦めた底辺だ。
私の描く理想に対する、不純物だ。
「……あほくさ」
私は考えることを止めた。
そうさ、どうして私が彼女の機嫌を取らなければいけないのさ。
それぞれの意思を尊重する、そんな世界を思い描いていたんだろ？
ならば、彼女がしたいようにさせてやる、それでいいじゃないか。
これから話すのは、とある少女の昔話。

私がニューアイランドにきて三年目。
十四歳の夏の頃の話である。

二話　歯車

暁の水平線が、一日の始まりを告げ始める。
あと数分もすれば日も差し始めるだろう。
そんな空気の変わり目を察知し、私は寝床を後にした。
（結局、あの子は戻ってこなかったのね）
ぐるりと部屋を一瞥する。
普段はしない、いつもとちょっと変わった朝。
あの子はあの後、結局帰ったのだろうか。
（まあいい。それもまた彼女の自由意思）
備え付けの洗面所で歯磨きや顔洗いを済ませる。
櫛で髪を梳かし、右腕の傷を隠すアームカバーを身に付ける。
それが終わると、ニューアイランドの外周に沿ってランニングを開始する。
ポケモントレーナーは、ポケモンに指示を出すだけの存在である。
そう考えている人間は数え知れないほどいる。
だが、そうではないのだ。
例えばフルパーティで勝負する場合、かなり長い時間が掛かる。
その間一切緊張の糸を切らすことなく、常に集中力を欠かさずに戦いきれる。
そんなトレーナーがどれだけ存在するだろうか。
下手すれば世界で三桁もいないかもしれない。
また、トレーナーの筋力なども重要だ。
ポケモンからだと死角になってしまうような情報、それらを補完し伝達する。
そうするためには脚力がいる。
脚力を十全に扱うためには、全身の筋肉を満遍なく鍛え、重心移動を正確に行えなければいけない。
要するに、トレーナーというのは常在戦場を心がけるべき存在なのだ。
その為にトレーナー自身が己を鍛えなければいけない。

私がいま行っていることは、私自身のトレーニングであった。
心臓が破れそうになる。
汗を吸った衣服がまとわりついて鬱陶しい。
それでも私は走り続けた。
島の周りをぐるっと一周して、漸く私はランニングを止めた。
呼吸を整えるために、クールダウンを兼ねてゆっくりと歩きだす。
そうしてしばらく、ようやっと心臓が落ち着いたのを確認して茂みに声を掛ける。
「それで、何の用かしら」
先に言った通り、トレーナーというのは常在戦場だ。
絶えず気配察知を行え、自身に向けられる視線にも気付けないのは愚かものだ。
私が声を掛けた先の人物は、しばらく息をひそめていたが、私が横眼も降らずに見続けるのを見て諦めた。
茂みが揺れ、姿を現す。
「あ、あの。先日は申し訳ございませんでした」
「ああ、あんたか」
声の主は、昨日の少女だった。
一晩泣き続けたのか、涙袋は膨れ上がり、目は赤く充血している。
「いいわよ別に。あなたがどうしようと私の知ったことじゃないわ。好きにするといいわ」
「もう一度だけチャンスをください！　お願いします」
汗を拭いながら立ち去ろうとする私に、少女はそう願いこむ。
そんな彼女を尻目に、私は軽くため息をついた。
ダメだな、どうにもこの子には甘くしてしまいがちだ。
「言ったでしょ。あなたがどうしようと私の知ったことじゃない、好きにしなさい」
「ッ！　ありがとうございます！」
後ろ手に腕を振り、その場を後にする。
彼女の声は、良く弾んでいた。
（はぁ、どうにも調子が狂う）

私の気が晴れることは無かった。

シャワーを浴び、着替えて、朝食を済ます。
戦闘訓練を行い、反省点をノートに書き記す。
改善点を取り上げ、また別のノートに記述する。
「はぁ、どうにも眠いな」
いつもなら眠気など感じる時間ではないというのに。
なんだかんだ私も、昨日の事が気になって熟睡できていなかったということか。
別に今日一日くらいどうということは無いが、疲労は取れるときに取っておかないとドミノ倒しに増加する。
(三十分くらい仮眠しますかね)
昼寝の三十分は、夜の二時間分の睡眠に相当する。
うん、早いうちに眠気を解消しておこう。
アラームを三十分後に指定して、意識を手放した。

＊

夢を、見ていた。
弟分が四歳の頃だから、私が七歳の頃の記憶か。
もうずいぶん昔の事だというのに、色あせることなく鮮明に描写される。
吹き抜ける風が、騒めく木々が、赤く吹き上がる血が。
脳裏に焼き付いた記憶が延々リピートされる。
だけど私にはわかる。
これは夢だと。
あの迫りくる死の恐怖はない。
生と死のはざまで、私の心が突き動かされることは無い。
すべてはまがい物で、私が望むものは手に入らない。
弟分が駆け寄ってくる。
先ほどまで鮮明だった映像に、ノイズが掛かる。
この時、弟分はどんな表情をしていたんだったか。
万全だったはずのビジョンに、欠けが生じる。

この時私は、何と話しかけたのだったか。
分からない、分からない。
すべては虚構で、本質は戦いの中にだけあった。
また夢が繰り返される。
いつもと同じ光景。
変わり映えの無い惨状。
繰り返されるまがい物。
そこに、違和感が走った。
誰かに夢を観測されているような、そんな感覚。
理性だったのか、本能だったのか。
私は動き出した。
＊
「がはっ！」
突き出した右腕に、何か柔らかい物がぶつかった。
それを振り払うように押し出し、その後空気を零すような悲鳴が上がった。
「す、すっびばせん」
「あんたねぇ、何やっているのよ」
私が突き飛ばしたのは、いつもの少女だった。
私の空間に立ち入るなって言ってるでしょうに。
懲りずにまた忍び寄ったのか、うん、私は悪くないな。
「申し訳ございません」
「はいはい、もう謝罪なら聞いたから。用は何？　無いなら疾く立ち去って」
「は、はい。申し訳ございませんでした」
そういうと彼女は走り出していった。
私は思ったよね。
「用、無かったのか」
用事もないのに部屋に入ってきたのか？
どうにもおかしい気がする。
そんな違和感を覚えながら、時刻を確認する。

アラームの時間を少しだけ回っていた。
（アラームの設定、切ったっけ？）
目覚まし時計を裏返し確認する。
オンの状態のままだった。
（それだけ寝入っていたっていこと？　そんなはずは……）
ここに来てから、深く眠りについたことなんてなかった。
周りは敵だらけ、常に警戒は怠れない。
心を許せる相手もいない。
そんな状況下で熟睡できるなんて、よっぽどの狂人だ。
（アラームが鳴っても私が起きないから起こしに来た。けれど私が飛び起きたせいで用がなくなった。そんなところかしらね）
アラームの設定をオフにして、時計をまた立て掛けなおす。
妙に頭はさえていたが、しばらく何をするにもやる気が起きず、布団の上でボーとしていた。
どうにもあいつが来てからおかしい。
「本当に、調子が狂う」
そんなことを零す。
だけど同時に、私はこうも思っていた。
（本当に狂い始めているのだろうか。それとも、正常に戻りつつあるんだろうか）
その問いが、自分の中でぐるぐると回る。
私がその問いに答えを出すことは、ついぞなかった。
＊
「で、どういうこと？」
ところかわって訓練場。
私の前には彼女が立っていた。
「あ、あの！　私、メア先輩の役に全然立てていないのです！」
「知ってる」
「あうぅ。そ、それでですね、戦闘訓練なら、私でもできることあるんじゃないかな……って思って」
「……強そうには見えないけれど」

要するに、いつもの有象無象に変わって、この少女が相手をするということか。
私のスカウターだと戦闘力五のゴミなんだけどな。
戦ってみたら強かったりするのかしら。
「いいわ、変わり映えの無い相手に飽き飽きしていたところだから。まあ、せいぜい、私を楽しませてよ」
「！　はい！　行くよ、ルクシオ！」
そう言って彼女が繰り出したのは青地に黒毛の猫のようなポケモン。
（ルクシオ……確かシンオウ地方に多く生息するポケモン、だよね）
脳内データベースにアクセスする。
オーキド博士の研究所に、そんな一ページがあったはずだ。
記憶から抜け落ちかけているが、存外きっかけさえ与えられれば思い出せるものだ。
ルクシオの爪の辺りに視線を移す。
パチパチと、過剰供給された電流がはじけていた。
（そう、確か電気タイプ。スーちゃんなら有利を取れる）
私は無言でスーちゃんを繰り出す。
相手の間合いに入らず、私と死角をカバーし合えるポジションを考慮したところに、寸分の狂いもなく。
（電気タイプに氷技は良く採用される。その内、ルクシオが使えそうなのは目覚めるパワー氷と氷の牙くらい）
気を付けてねと、スーちゃんに合図を送る。
スーちゃんもこちらに視線を送る。
それだけで私たちの意思疎通は完了した。
＊
「う、ぐすっ……ひっぐ」
私の目の前には、またも泣きじゃくる幼女。
結論から言おう。
めっちゃ弱かった。

三話　撈月

「次、お願いします」
膝に手を突き、呼吸を乱しながらも、私は止まらない。止められない。
バトルフィールドの、向こうにいる対戦相手が顔を引きつらせる。
休憩をはさむことなくバトルを続け、今は何連勝だったか。
数字が二桁を超えてからは数えていない。
(足りない。こんなのじゃ物足りない)
こちらのパフォーマンスは、疲労から徐々に落ちてきている。
けれども、それでもなお、私たちの牙城を崩すような相手には当たらない。
そもそもここは、研究員気質の強い人員が多いのだ。
私のような戦闘員は、いない。
私が対人戦に打ち込み始めたのは、コニーと戦ってから。
コニー自体は非常に弱かったが、同時にこうも思った。
むやみに飛び込んでくるポケモン達よりも相手しづらい、と。
この施設で放し飼いされているポケモン達に対しては後の先が成立する。
相手の攻撃を誘い出し、回避不能なタイミングでカウンターを決める。
これだけでよかった。
だがしかし、トレーナーが相手であれば私の意図が読まれる。
そう簡単に釣られてくれないし、場合によっては積みの起点にしてしまうだろう。
私は、自らの対人経験の少なさを自覚した。
「スーちゃん、龍の波動」
「オコリザル、避けなさい!」
スーちゃんに龍の波動を指示する、相手に聞こえるように。
相手は私の声を聞き、回避行動を指示する。
避けろと言われて、オコリザルは龍の波動を避ける。

波動を避けるために、上空に向かって。
その瞬間、私は次の試合に向けて意識を切り替えた。
瞳を閉じ、呼吸を整える。
勝敗は、既に確定した。
「オコリザル!?」
スーちゃんのエアスラッシュが、空中で回避不能のオコリザルに突き刺さる。
だめだ、これじゃあ満たされない。
相手の様子を見る限り、何故自分が負けたのかもわかっていないだろう。
「あんた、何をしたのよ!」
対戦相手だったモノがこちらに歩み寄ってくる。
しかしすでに、私の興味からは外れている。
肩に置かれたそいつの手を払いのけて、次の対戦相手を待つ。
「次、お願いします」
「あんたねぇ!」
私のそんな態度が癪に障ったのか。
そいつは私に殴りかかってきた。
その拳を、右手一本で受け止める。
「うるさい。私の目の前に現れるな。目障りだ」
そのまま右手を握り締め、握りこぶしを握りつぶす。
ゴリゴリと、鳴ってはいけない音がした。
そいつが甲高い悲鳴を上げる。
うるさいって言ってんだよ。
そいつを蹴り飛ばす。
壁にぶつかったそいつは、意識を手放した。
ああ、まったくもって無益な日々だ。
そう思っていると、件の少女が話しかけてきた。
「メア先輩、やり過ぎですよ……」
「どこが?」
その少女は先日こっちにやってきた、私の事を先輩と呼ぶ少女だっ

た。
極悪非道のロケット団が、たかが殺傷行為にやり過ぎ？
何ともちぐはぐな相手だ。
「メア先輩。あなた、周りの人たちから何と言われているか知っていますか？」
「……さあね。私の価値は私が決める。他人の定規なんかで定義されてたまるかって話だよ」
「先輩はもう少し、周りの目を気にしたほうがいいと思います」
「はは、私ほど気配察知に長けた人間なんてそうそういないよ、相手の意図を読むことに長けた人間もね」
全て必要なことだから。
人事を尽くし、勝負を運否天賦に賭す。
そこだけは唯一、サカキと理念を共有できるところで、私がここに来た理由だ。
だが、相手の意図に気付くことと、汲み取ることは別だ。
「私はね、あんたを含めロケット団っていう組織が大嫌いなのさ。どうしてそんな奴らに施しを与えなければいけないの？」
好きでもない相手の好感度を必死に稼いで、それで一体何の役に立つというのか。
だから私は、私が生きたいように生きる。
「……それなら先輩は、どうしてこんなところにいるんですか」
「ははっ、愚問だね」
近くにスーちゃんが寄ってくる。
その顔を、右手で軽く撫でる。
「生きるためだよ」
それだけ、それだけだ。
それ以外、私は何も望まない。
それを成し遂げるだけの力量さえ手に入れば、もはやこんな場所に用はない。
＊
「先輩！　海を見に行きましょう！」

「やだよ、めんどくさい」
その日の夜の事だった、彼女が私の部屋に押し掛けてきたのは。
いや、よく考えると彼女は毎日のように私の部屋に押し掛けてきていた。
訂正しよう、彼女が私を夜の海に誘いに来たのは、その日の事だったと。
「行きましょうよ！　きっと綺麗ですって！」
「あんたはここにきて日も浅いから感動するかもしれないけどさ、こちとらもう三年も見続けてきた光景だよ。今更なにに心動かされるのさ」
「いいから行きましょうって！」
浜辺で待ってますからねと言って、彼女は走り去っていった。
あほらし。
なんで私がそんなことに付き合わされなければいけないんだ。
ドアに鍵をかけ、アームカバーを取り外し、ベッドにダイブした。
いつもなら、必要とあれば眠りに落ちるこの体だというのに、どうにも眠りに付けなかった。
眠れないという思考が、私を睡眠から遠ざける。
しばらく布団の上でゴロゴロしていたが、やがて寝ることを諦めた。
（ああもう！　あいつのせいだ）
布団を引っぺがし、アームカバーを身に付ける。
ドアの鍵を開け、私は海へと歩き出した。
＊
「あ、先輩！　来てくれたんですね！」
「あんた、まだいたの？」
詳しくは覚えていないが、私は部屋の中で一時間弱ゴロゴロしていたはずだ。
とっくに諦めて、部屋に戻っているだろうと思っていた。
右腕に手を掛けると、先ほどつけたアームカバーが触れた。
（そういえば、どうしてアームカバーを付けてきたんだろう？）

彼女が既に立ち去ったと考えるなら、この醜い傷跡も、誰に見られることもないはずだったのだ。
結果的に彼女がいたから付けてきて正解だったわけだが、それはあくまで結果論だ。
私がそういう行為に出た理由は何だったんだろう。
彼女がここに居ることを、心のどこかでは期待していた？
（まさかね）
らしくないとはいえ、彼女もまたロケット団なのだ。
そんなのを相手に、会いたいと思うなんてことがあるはずない。
虫の知らせとか、きっとそういうのだろう。
「先輩、海っていうのは広いですね」
「何を当たり前のこと言ってるのよ」
「あはは、私は海の見えない街で育ったので」
彼女は微笑んだ。
夢を語る子供の様に、明るく朗らかに。
「潮風っていうのは、こんな感じなんですね。見たり聞いたりしただけじゃ、感じ取り切れない。においや、肌をなでる感覚。自分の足で踏み込んで、初めて知れる領域です」
「……そうだね。人の話が、いつも正しいとは限らない。人それぞれ養った感性があるんだから、自分の身で経験しなければ分からないことは多々ある」
誰かが言った。
死は危険なものだと。
けれど、その人は死の隣にある生を知らなかった。
その一点で既に、その誰かの言葉は完璧ではなかった。
そもそも言語なんて不完全な伝達手段だ。
こうして形にしている私の言葉も、相手に伝わる時にはフィルタが掛かり、微妙に受け取り方が変わるだろう。
アグノムバンドリュと聞いて、バンギラスを物理型と予想するか特殊型と予想するかのようなものだ。
「先輩、水面に映る月は、ときに空に輝く月よりもきれいだと思いませ

んか？」
　すこしだけ頬を赤らめて、彼女はそういった。
「私は先輩の事をよく知りません。でも、それでもいいです。私の目で見た先輩がメア先輩という人物です。波に揺られようと、光がねじ曲がっていようと構わないです」
　彼女は私の方に向き直った。
「先輩が私に本当の月を見せてくれる日が来るのかはわかりません。でも、私は私の見える月も好きなんですよ？」
　彼女は、そう言ってほほ笑んだ。

四話　同志

彼女、コーニッシュがここに来てから約一月が経過した。
覚えるつもりの無かった名前も、ついに覚えてしまった。
彼女は実に、ロケット団ぽく無かった。
彼女はよく笑い、よく泣き、とにかく感情を表に出した。
彼女は彼女のルクシオを、とても慈しんだ。
彼女はこの施設にいる実験用のポケモンを見て、顔を悲痛に歪ませた。
彼女は、彼女は……。
「あんたさ」
「コーニッシュです、コニーと呼んでください」
「コニたんはさ」
ずっと気になっていた。
けれど、なんとなく聞いちゃいけないことの気がして、聞けずにいた。
その事を、ついに聞いてみることにした。
「答えたくなかったら、答えなくていいんだけどさ。なんでロケット団なんかにいるのさ。あなたは、ここに居るような存在じゃないでしょう？」
ロケット団のような擦れた人たちとは違う。
純真に育った、無垢な少女。
そんな彼女が、どうしてこんな穢れた場所にいるのか。
答えたくなかったのか、彼女は沈黙を貫いていた。
「ごめん、踏み込み過ぎた。忘れて」
自分には過干渉するなと言っておきながら、自分からは踏み抜く、最低だね。
「いえ、いい機会です。聞いてください」
そう思ったが、どういうつもりなのか。
彼女は私に話し始めた。
どうしてここに居るのかを。

＊

私の名前はコーニッシュといいます。
わけあってロケット団というポケモンマフィアに所属しています。
これは私が、メア先輩に出会うまでのお話です。
私は遥か北方の地、シンオウ地方で生まれました。
日は短く、年中雪の降っている場所もありましたが、住民は皆心暖かく、いいところでした。
私の生まれたクロガネシティは、石炭に恵まれた山間部に属していました。
そんな街なので、父も当然炭鉱で働いていました。
よく、父についていって、炭鉱の中を探検したものです。
炭鉱は楽しかったですが、時折顔を出すズバットが嫌いでした。
イシツブテやイワークは頼もしくカッコいいのに、どうしてあれだけは気持ち悪いのか。
こほん、話がそれました。
まあ、父は私にとって偉大な人で、私は父の事が好きでした。
けれど、ある日の事でした。
父は、落盤に巻き込まれて、帰らぬ人となってしまいました。
なんでも、同僚の人を守るために身を挺し、代わりに犠牲になったらしいです。
どうして父が死ななければいけなかったんだろう。
そう考えない日はありませんでした。
その同僚が、私たちの家にお礼をしに来ました。
父のおかげで助かったと。
ふざけるなと思いました。
お前が死んでいたら、父は助かったんだ。
それをよくも、よくもぬけぬけと私の前に顔が出せたなと。
いえ、思っただけではなかったでしょう。
きっと口に出し、非力ながらに精一杯殴りつけた気がします。
まあ、今となっては行き過ぎた行為だったと反省しています。
父の善意を捨て去るような愚行だったと。

けれど、今も思うのです。
せめてその同僚さんが、危険な場所にいなければ。
父は死ななかったんじゃないかと。
もちろん、炭鉱などで完全な安置というのは存在しないでしょう。
それでも、もし、もし偶然落盤に巻き込まれるところにいたように、運よく安全地帯にいてくれたら。
そんな思いが、ぐるぐると巡りました。
そんなことがあってから、母との関係もこじれ始めました。
反抗ばかりする私と、ヒステリックな母。
父を失い、大黒柱という言葉の意味を知りました。
父が私たち家族を結んでいたんだと知りました。
父が、父が……。
そんな折、ついに母は耐え切れなくなったのでしょう。
私を売り飛ばすことにしたのです。
その取引先が、ロケット団でした。
二束三文で買い叩かれたようでしたが、私を引き取ってくれるというだけで母は大喜びでした。
そんな母を、私はどんな目で見ていたんでしょうか。
侮蔑でしょうか？　それとも悲哀？
すべてが、過去のどうでもいい思い出です。
そうしてヤマブキシティに送り込まれた私でしたが、まったくの役立たずでした。
与えられた仕事もできない。
捕らえられたポケモンを見ると吐く。
周りの人たちは冷たい目をした大人たちばかり。
クロガネでの一件以来、大人に対して嫌悪を抱いている私は、いつも怯えていました。
とにかく、私の居場所はヤマブキにはなかったのです。
そんなだったので、ここに飛ばされることになりました。
そこで私は、メア先輩に出会ったのです。
年齢の近い女の子なんてヤマブキにはいなかったので、私はどうし

ても先輩の隣に居座ろうとしたのです。
まあ、先輩は全然優しくなかったのですが。
初日からまさか解雇通告を受けるとは思いませんでしたよ……。
その晩は一人で泣き明かし、翌日謝罪に向かいました。
日が昇り、すぐに押し掛けたというのに、先輩の部屋は既にもぬけの殻でした。
窓から外を見れば、先輩が走っている様子が窺えました。
私の体力では到底走り切れないので、先輩が戻ってくるのを待とうと思ったのです。
この島はとても大きいので、きっと長い時間待つことになるだろうと思いました。
けれど、予想に反して、先輩はすぐに戻ってきました。
心の準備ができていなかったので、思わず茂みに隠れてしまいました。
バクバクと脈打つ心臓を握り締め、どうにか落ち着こうと頑張りました。
茂みの隙間から見える先輩は、苦しそうだったのに楽しそうでした。
私は驚きました。
こんな場所にいるのに、どうして先輩はこうも輝いているんだろう、と。
とても、とても眩しかったです。
きっと憧れたんだと思います。
こんな場所にいながら、私の様に演技ではなく、本心で生を楽しむ様子に。
きっと、憧憬を抱いたんだと思います。
私は生きる意味を見つけました。
その後、先輩に隠れていることを指摘されました。
恥ずかしくて、耳まで真っ赤になってしまいました。
必死に火照りを抑えてから、茂みから出ました。
先輩に見つかりました。

私は謝りました。
先輩は受け流すばかりで、まともに取り合ってくれませんでした。
でも、私に、好きにしていいと言ってくれました。
その言葉が、どれだけ私の心を救ってくれたか。
先輩、知っていますか？
私は先輩に付きまといました。
迷惑を掛けないように、気を害されない程度の距離を保ちながら。
ある時は戦闘訓練の相手として、ある時はアラームに気付かない先輩を起こすために。
……あの時の発勁はきつかったなぁ。
とまあ、それが私がここに居る理由です。
＊
「と、最初は為す術もなくロケット団に居たんです。でも、今は違います。メア先輩の役に立ちたいです。メア先輩のそばにいたいです。ロケット団に入って、メア先輩に出会えて、本当によかったと思っています」
「……」
私は彼女の独白を、時折相槌を打ちながら聞いていた。
道理でロケット団らしくないわけだ。
そしてロケット団、お前らは人身売買にまで手を出していたのか。
とことんゴミみたいな組織だな。
「もし、もしさ」
分かっている。
これは憐憫の情で、相手に向けるということは相手を弱者と定義してしまうことだ。
理解している。
こんなこと、なんのメリットもなく、切り出す意味はないと。
考慮している。
彼女の言葉が嘘で、私の監視が目的であるという可能性。
それでも、私は聞かずにはいられなかった。
「ここを抜け出す手段があると言ったら、あなたはここに残る？」

「……先輩はどうするんですか？」
「あはは、ここから抜け出すつもりがあるからそう聞いているんだよ」
もし彼女が、私の動向を監視するために派遣された人員であれば、私の言は失敗だ。
だけど、私に残された人間らしさが、彼女を捨て去ることを許さなかった。
「私は、先輩について行きます。どこまでも、いつまでも」
そんな私の思いにこたえるように、彼女はそう言ってくれた。
彼女は知らないだろう。
彼女が来てから、私の心が元に戻り始めているということに。
ここを出たら、やり直そう。
その日私たちの間に、ニューアイランド脱出同盟が結ばれた。

五話　策謀

私たちがここからの脱出を決めてからの事だ。
私達はまず、この建物の内部からしらみつぶしに調査を開始した。
消灯時間になってから施設内を駆け回り、逐一マッピングしていく。
するとこの建物の中央部に、謎の空間があることが分かった。
「さて、鬼が出るか蛇が出るか」
できれば仏様が出て欲しいものだ。
そんなことを思いながら隠し通路を開く。
どうやって侵入方法を知ったかって？
それっぽいところ数か所に隠しカメラを取り付けて、人の出入りを探ったんだよ。
案の定、その内の一箇所がビンゴだった。
ちなみにコニたんは私の部屋で待機中だ。
感覚的には消灯確認に来る先生を誤魔化してもらうやつに近い。
私は林間学校も修学旅行も言ったことないけれどね。
というか、マサラにそんな行事はない。
本棚から数冊の本を順番に取り出していく。
すると本棚がスライドを始める。
その裏には壁材の張られたドアがあった。
ドアに手をかけ、息をのむ。
心臓が早鐘を打つ。
どくどくと、鼓膜を内側から叩く。
呼吸を二つ置くと躊躇いが生じる。
だから私は、一つ息を吐きだして、意を決した。
扉を開くと、そこには培養器があった。
「なにこれ……ポケモン？」
その培養器の中には、見たことのない化け物がいた。
＊
「うーん、昨日のあれは何だったんだろうか」

翌日、部屋で作戦会議を開く。
参加者は私とコニたん、以上だ。
「もう一度確認から始めましょうか。そもそもこの部屋に入ったのはどういった目的からでしたか？」
「そりゃあ何らかの脱出手段がないかっていう確認のためだよ」
この島は、外界から完全に遮断されている。
船もなく、空路はサカキの自家用ジェットや、コニたんのように新人が来る場合のみ。
新人はこの三年で初めての事なので、次に来るのはいつになることやら。
加えて、仮に来たとしてジャックすることが可能かどうか。
サカキレベルとは言わずとも、私に対して時間稼ぎができるだけのトレーナーがいればその時点で詰みだ。
というわけなので、ボートや潜水艦のような海路に使える乗り物がないかと期待し潜入したのだった。
しかし、そこに在ったのは大きな培養器と、その中で眠る化け物だけだった。
「白い体に紫のしっぽ。人型のポケモン……」
「聞いたことがないポケモンですね」
「うーん、どっかで聞いたことはある気がするんだけどねぇ」
あと少し、きっかけがあれば思い出せそうな気がするんだよな。
何だったか？
「あっ」
私はふと思い出した。
ここ数年で、すっかり使わなくなった機械。
ここに来るとき、サカキに渡された備品。
「そうだ、これ使えばよかったんじゃん」
なんですか、それ、そうコニたんが体を寄せてくる。
黒色の筐体。
便宜上私は、『ポケモン図鑑』と呼んでいる。
持ち歩いているポシェットの中に、一応入っていたのだ。

もしかするとポケモンとして認識しているかもしれない。
私の期待通り、ポケモン図鑑はそのポケモンを登録してくれていた。
「遺伝子ポケモン、ミュウツー……」
思い……出した！
ベッドに図鑑を放り投げ、部屋の隅に存在する資料棚に駆け寄る。
確かこの辺に。
「ミュウの遺伝子から生み出された、人造ポケモン。その凶暴性から、生みの親すら飼い慣らすことを諦めた」
「……ひどい話ですね……」
「うん、そうだね」
人間の都合で作られ、人間の勝手で捨てられた。
報われない、悲しいポケモンだ。
しかし、こうなると疑問が浮かんでくる。
「どうしてそのポケモンがここに？　一体サカキは何を企んでいるの？」
資料を隅から隅まで見遣る。
どれもこれも、信じがたいような強さについて言及されたもので、到底御せるポケモンではないことがうかがえる。
そんなポケモンを内部において、一体どうするつもりなのか。
「先輩、すっごい悪い顔してますよ」
「さて、どうでしょうね」
とにかく、これで脱出の計画が練れた。
ミュウツー、悲しき星の下生まれた悲哀なるポケモンよ。
私があなたを助けてあげる。
だから――。
（あなたも、私を助けてね？）
私は歪に口角を上げた。
＊
「危険すぎます！」
「まあまあ」

私の脱出計画を聞かされたコニたんが怒鳴り散らす。
ちなみにこの部屋の防音対策は完璧なので何の問題もない。
自分の生活音を聞かれるとか堪ったものじゃないので融通を聞かせてもらった。
一応立場的にはサカキの直属の部下だからね、私。
そこらの団員より立場は上なのだよ。
「じゃあ聞くけど、他に何かいい案ある？　あるなら考えてやってもいいよ」
「それは、今は思いつかないですけど……きっと他に方法があるはずです」
「却下。コニたんは気付いてないみたいだけどさ、サカキはきっと私の動向に気付き始めている。そろそろタイムリミットが近づいてきているはずだよ」
具体的なリミットは分からないが、流石にそろそろ怪しまれ始めているだろう。
コニたんが私についたことも、きっと伝わっているはずだ。
そうなれば、私が近いうちにアクションを起こすことは想像に難くないだろう。
つまり、先手必勝というのが現状だ。
「でも、だからってあのポケモンを世に解き放つのは……」
「何もしなくても、ロケット団の手に落ちるか、別の経路で世に解き放たれるかだよ。ロケット団の手に落ちるのが最悪のパターン、だから未来は都合よく切り替わるんだ」
「はやまる必要はないでしょう!?」
確かに、自分が不利になる択を先延ばしにするというのは一つの選択肢だ。
分かりやすいところだと、追い打ち不意打ち択だろうか。
この場合に追い打ちを挟まず、不意打ちだけ打ち続ける。
八回もあれば、相手はどこかでしびれを切らせてくれる場合が多い。
攻撃したくなる気持ちをぐっとこらえて耐え忍ぶ。それができる

トレーナーは本当に少ない。
だから、問題の先送りというのは必ずしも悪いものではない。
ただし、のちの事を考えずに済む場合は、である。
例えば草タイプと炎タイプの対面でこちらが水タイプに引く。
そうして相手が電気タイプに引き、私がさらに草タイプに交換する。
これを繰り返していけば、確かに勝敗は先延ばしにすることができる。
だが、それを繰り返したときに私が先に倒れることが予測できるとすれば？
問題を先延ばしにしたところで、後々皺寄せが来るというのなら意味が無いのだ。
「ゆえに、行動は迅速に。この機会を逃す手はないの」

私が立てた作戦は、ミュウツーを逃がしてしまおうというものだった。
ついでにその間に施設をボロボロにしてもらえればなおよい。
この島での生活が不可能になれば、いくらサカキといえど救助を寄越さないわけにもいかないだろう。
カントーに降り立つことさえできれば、チャンスはいくらでもある。

「先輩、死なないでくださいね？」
「あはは、私は死なないよ」
少し前は、ただ戦うために生きていた。
だけど、コニたんと出会い、私の中で異なる生きる意味が生まれた。
コニたんを守り抜く。
そのためにこの命を懸けるのも、ありだと思うようになった。
「こんなところで、死んでたまるか。私には、生きて成し遂げなければいけないことがあるんだ」
コニたん、知っている？

あなたは、いつの間にか私の中で、とても大きな存在になっていたんだよ？
私の生に対する強い意志に折れたのか。
コニたんはしぶしぶだけどこの作戦を受け入れてくれた。
さて、折角私を信じて任せてくれたんだ。
期待にそえるように、ちょっくら本気出してきますかね。
――決行は今夜二十四時。
チャンスは一度きり。
必ず、成功させてみせる。

六話　逆光

私の眼前には、近未来的な装置が立ちふさがっている。
存在を秘匿された、空白の場所。
緑色の液体を内包した機械に、白い怪物が閉じ込められていた。
さあ、物語を始めよう。

＊

「聞こえる？」
私は培養器の外側から、その化け物に問いかけた。
前回来たときは姿だけ確認してすぐに帰っちゃったからね、このポケモンが覚醒しているかどうか分からず仕舞いだったのさ。
機械に手をあてて、じっくりと観察する。
その時、白い怪物の、長らく開かれることのなかった瞼が開かれた。
『お前は……誰だ』
そんな声が聞こえた。
私は慌てて周囲を見渡す。
誰も居ないと踏んでいたが誰かいたのだろうか。
そんな焦りが生じ、首筋に大きな汗が噴き出した。
『どこを向いている、こっちだ』
私に声を掛けてきたのは、機械に閉じ込められているポケモンだった。
人語を介すポケモンに、少しだけ驚いた。
けれども、幻のポケモンミュウから作られたポケモンならありうるかと考え直した。
「夜分遅くにごめんなさいね。私は……メア。トキワシティのメア」
どちらで名乗るか、少しだけ悩んでメアと名乗った。
あの日、決別したはずだろう。
この世界に、マサラタウンのメアリーはもう存在しない。
「あなたは、ミュウツーで合っているかしら？」
『ミュウツー……そうだな。貴様ら人間は私の事をそう呼んでいた』
思ったより会話が成り立っていることに違和感を覚えた。

ミュウツーは、その凶暴性から捨てられたんじゃなかったのか？
私が聞いていいか悩んでいると、ミュウツーから話しかけてきた。
『それは貴様らが勝手に作り出した絵空事だ』
「え、何？　思考読めるとかそういう感じ？」
無いわー、そんなの交渉の余地すらないじゃん。
こっちの切り札が最初から見えているっていうことでしょ？
ミュウツーがフッと笑った。
なんとなく馬鹿にされた気がしないでもないけど、きっと気のせいだろう。
「はあ、折角身構えてきたのに無駄だったってことね。それで？　返事を聞かせてもらえる？」
『ふっ、断るさ。先ほど言った通り、私は残虐性とは無縁なのでな。無駄な殺生をするつもりはない』
「……あなたを今現在、こんな目に遭わせている相手であっても？」
『どんな相手であっても、だ』
うーん、これはちょっと予想外だ。
だれだよミュウツーが凶暴な性格だとか言ったやつ、見つけ出してぶん殴ってやる。
（さて、それはさておき厄介なことになったな）
ミュウツーを引き込めないとなれば、計画が頓挫する。
普段なら二重三重に次善策を用意しておくが、今回の場合は筋道が細すぎる。
スーちゃんの流星群で施設を破壊するという選択肢もあるが、そうすると今度は被害者面して救出されるという選択肢が取れない。
いやー、それでもやるしかないか？
『貴様ら人間はいつもそうだな。身勝手で、傍若無人で、独善的。いつも自分の事を優先している』
「いやいや、相手が人間ならそれなりの対応を取るよ。でも結局のところロケット団は潰すべき相手だし」
『善だろうが、悪だろうが、生きている相手ではないのか？　それを淘汰するお前は、何を以て正義を振り翳すのだ？』

ミュウツーの問いかけに、私は少し悩む。
私の正義とは何か……か。
「陽に照らされて、月は輝く。けれどその陽射しは必ず影を生み出す。この世界は、秩序という陽に照らされていて、抗う術を持たない人たちは影を背負って生き続けなければいけない。そんな人の影を掬い上げる」
狂った世界に望まずに生まれ、抗う術無く囚われる人たち。
そんな人を抑圧から解放する。
誰もが自由意思のもとに行動できる世界。
「それが私の正義」
『……なるほど。しかしお前は結局、別の影を生み出すことになるのではないか？』
「さて、どうでしょうね。どちらにせよ、行動を起こさなければ願いを手繰り寄せることもできないわ。だから私は進み続けるの」
理想としては、私がすべての影を背負うことか。
だけど、私の死後はどうなるのだろうか。
また別の、次代を担うものが背負っていくのか。
それとも消えることは無く、残り続けるのか。
まあ、そんな先の事を見据えても仕方がない。
『狂っているな』
「さて、どうかしらね。時代が進めば、狂っていたのは世界の方だったってなるかもしれないわよ」
さてと。
それじゃあお暇しますかね。
無駄に時間を食ってしまった。
計画は一から練り直しだ。
入り口に向かって歩き出そうとする私を、ミュウツーが呼び止めた。
『待て……気が変わった。私も……私の好きなように生きたい』
だから頼む。
そうミュウツーが頭を下げた。

『私をここから出してくれ』
「……どういうつもり？」
少し離れた場所から問いかける。
『私は、ずっと考えていたのだ。私は何故ココに在るのかと。ココに在っていい存在なのかと』
ミュウツーが空を仰ぐ。
当然、天井がそれを塞いでいて、星の一つも見えやしない。
『ここに来る前に、月というものを見た。綺麗だが、陰っていた。私は思った。私はこの月の、影のような存在なのだと』
ミュウツーの独白は続く。
私はそれを、ただひたすら聞いていた。
『私はミュウから作られたコピーだ。ミュウを光だとするのならば私は影。日の目を見ることなく、ひっそりと生涯を終える。それが私なのだと思っていた』
ミュウツーが空に手を伸ばす。
培養液にはきっと、ミュウツーの力を制限する物質が含まれているのだろう。
その動きは緩慢で、重苦しい。
『だが同時にこうも思っていた。そんな一生に、一体何の価値があるのかと。何のために在るのかと』
力無くも、伸ばした先の拳を握り締める。
月をつかみ取るように。
『もし、本当に。お前の掲げる理想をお前が貫くというのなら、まず私を解き放ってくれ』
ミュウツーがそういう。
私はそれに、笑って答えた。
「それが君の意思だというのなら、私はそれを尊重するよ」
ボールに手をかけ、スーちゃんを繰り出す。
機械とか難しいことはちんぷんかんぷんだ。
どのボタンを押せばいいとか悪いとか、まったくわからない。
なら、すべて壊してしまえばいい。

「スーちゃん、熱風」
スーちゃんの怒号が響きわたる。
この部屋の気温が一気に上がる。
様々な精密部品がショートを起こし、漏電を開始する。
あちこちでスパークがはじけ、次いで小規模の爆発が起こる。
「スーちゃん」
そうして最後に指示を出す。
ベノムショックとベノムトラップ。
二つの異なる、特殊な毒液を配合した溶解液。
「強化ガラスだろうと知ったこっちゃないね。お願い」
スーちゃんが放った毒液は、培養器をあっという間に蒸発させた。
そこから緑の液体が流れだし、ミュウツーに自由が与えられる。
『ああ、懐かしいな。そうだ、これが世界だ』
ミュウツーは手を握ったり、首を捻ったりして可動域を確認している。
そうして私に向けて手を差し伸べた。
……その手を取ろうとして、私は飛び退いた。
＊
「どういうつもりかな？」
先ほどまで私がいた直線上の床が削り取られていた。
まるで鋭利な刃物で切り裂いたかのように。
今このポケモンは、私を殺すつもりで攻撃してきた。
「さすがにちょっと予想外なんだけど。さっきの話は嘘だったっていうこと？」
もともとリスクは承知の上での作戦だった。
こちらの思考が読まれるという想定外の事は起きたが、結果的に私の手助けをしてくれるという話じゃなかったのか。
そう思い、私はミュウツーに問い掛ける。
『お前には感謝している。先ほどの言葉にも、嘘はない』
ただ、と。
ミュウツーはそう前置きをしてこう言い残した。

『誰が私を生めと願った。誰が私を作れと頼んだ。私は私を生んだ人間たちを許さない。お前がロケット団全てを悪とみなすというのならば、私は人間すべてを悪とみなす。たとえ恩人であろうとだ』
「無駄な殺生はしないんじゃなかったの？」
『必要とあれば殺しだってしてみせるさ』
これは攻撃でも宣戦布告でもない。
そうミュウツーが、高らかに宣言する。
『私を生んだ貴様らへの逆襲だ』
「ははっ」
笑えない状況に、笑みが零れてくる。
久しく感じていなかった、死に対する恐怖。
今、私のすぐ隣には死が待っている。
手ぐすね引いて、今か今かと待ち望んでいる。
絶対に敵わないような強者を前にして、私は嗤った。

七話　リトルエンディアン

駆け抜ける。
スーちゃんに抱きかかえられて、施設の狭い廊下を。
時折迫りくるシャドーボールやサイコカッターを、順次処理していく。
「あはははは」
一度でも、一度でも攻撃を食らえばそれまでだ。
瞬く間に機動力を奪われ、あっという間に追い詰められるだろう。
オワタ式。
そんな状況を前に、私は感情の高ぶりを抑えられなかった。
この異常事態に気付いたのか、夜中だというのに団員たちが歩き回っている。
それを知ったことじゃないと言った風に吹き飛ばし、ミュウツーとの命がけの鬼ごっこに心血を注ぐ。
「スーちゃん」
それだけで言いたいことを理解してくれたスーちゃんが、できるだけ勢いをそのままに直角の角を曲がる。
そして、ミュウツーが追いかけて角を曲がるタイミングでベノムトラップを発動する。
実は培養器から救出した段階でこっそり毒毒を放っていた。
ミュウツーの攻撃を全て躱しきり、毒に倒れ伏すまで逃げ切れば私の勝ち。
体力が尽きるまでに一撃でも当てることができればミュウツーの勝ち。
いたってシンプルなゲームだ。
強いて言うことがあるとすれば、ミュウツーには自己再生という体力を回復する技があるということか。
先ほどから削っては回復され、削っては回復されのいたちごっこだ。
そのため、ベノムトラップなどの搦手で少しでも有利に試合を運び

たいのだが。
「まあ避けられるよね。思考を読まれているから当然だけど」
不意の一撃であるはずのベノムトラップを、ミュウツーは難なく躱しきる。
だがその回避行動の為に停止せざるを得ず、結果として私との間に距離が開く。
そうして鬼ごっこを続けていると、またも団員が立ち歩いていた。
そいつを吹き飛ばそうとして、私は逆にブレーキを掛けた。
「スーちゃんストップ！」
しまったと思ったときには、大体すべてが手遅れだ。
どうしてあなたがここに居るのか。
そんな疑問を抱きながら、私とスーちゃんは迫りくる刃に吹き飛ばされた。
「がはっ」
刃の軌道上に割り込んででも守りたい人がいた。
私は、失敗したのだろう。
だけど、私は後悔しない選択をできたことを嬉しく思う。
「メア先輩！」
身を挺してでも守りたかった少女が、私に駆け寄ってきた。
＊
『愚かな、そいつもお前が言うロケット団だったのではないのか？
何故かばう必要があった？　独善主義が貴様ら人間の特権だろう？』
「ごふっ……ああ、そういうことね」
私はコーニッシュに、私の部屋にいるように指示していた。
コーニッシュが言いつけを無視して飛び出してきた？
そんなはずがない。
この作戦の危険性は、彼女が一番知っていたのだから。
そこに至れば後は簡単だ。
「あんた、コーニッシュの思考を読んで、ここにテレポートさせたでしょ」
『フッ、そういうことだ』

コーニッシュはきっと、絶え間なく私の事を考えていたはずだ。
思考を読めるというのなら、コーニッシュという異質の存在にも気付けるだろう。
サイコカッターやシャドーボール、そしてテレパシー。
ここまで来ればミュウツーがエスパータイプであることが予想できる。
ならばテレポートを使えても違和感はない。
『答えろ人間。どうしてその人間を助けた』
「かふっ、はぁ……。そんなの、私が知ったことじゃないよ」
喉に詰まった血を吐き出す。
あの一瞬で、正常な判断なんてできるわけがないい。
血の迷いだといってしまえば、それまでの事だと切り捨てられる。
それでも、強いて言うのならば。
「存外……私も世界に囚われたままで、自分を演じきれなかったんじゃない？」
分かんないけどね。
そう答えると、ミュウツーはスプーンを作り出した。
サイキック能力で生み出した、念動力のスプーンだ。
『お前に恨みはないが、いや、感謝しているからこそ。ここで終わりにしよう』
ああ、失敗した、失敗したなあ。
私が犠牲になったところで、コニーが助かるわけじゃない。
私がやられれば、次はコニーの番だ。
だから言ったんだ。
問題の先送りなんて、意味がないと。
（ああ、終わりっていうのはあっけない物なんだな）
ミュウツーのスプーンが、私に迫りくる。
自らの死に怯え、世界がスローモーになっていく。
一秒先は、いつ訪れるというのか。
無限に引き延ばされる世界で、死の苦痛に、永遠もがき苦しまなければいけないのだろうか。

抗おうとするも、既に体に力は入らない。
ダメだ。
見切っているのに、躱すこともできない。
（グッバイ）
せめてもの抵抗として、私は視界を遮断した。
次の瞬間、何かに弾き飛ばされ、世界が再び加速し始めた。
ぴちゃりと、生暖かい何かが頬にぶち撒かれる。
微かに香る鉄の匂いが、鼻腔をくすぐる。
瞳を開く。
頬に手をあて、その正体を見る。
べたりと手に付いたそれは、真っ赤な血だった。
ただしそれは、私のものではなく。
「コニー？」
訳が分からない。
私の目の前には、肺を貫かれ血を吹き零す彼女の姿。
瞼の裏に、惨憺たる状況が焼き付けられる。
「コニー！」
私は叫んだ。
私が駆け寄ると、ミュウツーはそのスプーンからコニーを振り払い、私に投げつけた。
「コニー、そんな、どうして……」
「……先輩、やっと私の名前を」
崩れ落ちるコニーを抱きかかえる。
膝を床に付き、泣き崩れそうになるのを堪える。
「どうして、私なんかを庇ったのさ。何のために私が庇ったと思って……」
「先輩？　そこにいますよね？」
コニーの瞳から、徐々に光が失われていく。
コニーの手を取り、握り返した。
「いる！　ここに居る！」
「ああ……先輩の、手のぬくもりだ。先輩……、私、先輩の役に……立

ちたかったんですよ?」
一度は握り返してくれたコニーの握力が失われていく。
どこだ、どこで間違えたんだ。
「コニー!」
「先輩……聞こえていますか? 私は……ずっと……」
コニーの瞼が、閉じられた。
「コニー……、コニー? 嘘だよね?」
もう一度握り返してくれと、強くその手を握り締める。
まだ温かい、血の通った人と変わりのない温もり。
だから、嘘だと言ってよ。
『人間というのはつくづく訳が分からんな。自分勝手にふるまったかと思えば人の為に身を投げ捨てる。人の思いを汲むように見せかけて踏みにじる』
「だまれよ」
立ち上がり、ミュウツーを睨みつける。
先ほどまで一歩も動けなかったというのに、今はむしろ体が軽い。
スーちゃんも、まだ戦えるだろ?
「あんたに個人的な恨みができた。これは正義でも、まして悪でもない」
これは私の逆襲だ
『烏滸言を。人のためだと言いながら、本当は楽しんでいたのだろう? この戦いを、身を削る争いを。そこの小娘がどれだけお前の身を案じていたのかも考えずに』
「違う、私はそんな人間じゃない!」
『ならばなぜ、お前は笑っていたのだ』
指摘されて、ハッとした。
私はこいつと戦うことになって、笑っていた。
どうしようもない絶望的な状況で、笑っていたんだ。
コニーと出会って、やり直せると思った。
コニーと一緒なら、変わり映えのしない毎日でも生きていると実感できると思っていた。

コニーとともに、生きて行けると思っていた。
だけど、思った以上に私という人間は壊れていてしまったらしい。
歪んだ嗜好は伸ばしてもしわくちゃで、戦いというものに囚われた狂人。
「……そう、だね。私はただ、戦いたかっただけなのかもしれない」
本当は、脱走なんて、平凡な日常なんてどうでもよかったのかもしれない。
ただ単に、臨死体験がしたいだけの変異体。
それが私の本質なのかもしれない。
「だけどさ、そこまで分かっているなら、その先の事も考えておくべきだったんじゃないかなぁ？」
『何のことだ。……ッ?!』
開き直るように、ミュウツーに問いかける。
ミュウツーは最初分かっていなかったようだが、すぐに自身の違和感に気付いた。
自身を蝕む毒のスピードが、徐々に増してきていることに。
「思考を読めるといっても、知識までは読み取れないみたいね。あなたを蝕んだ毒は、ただの毒じゃない。徐々にその脅威を増す猛毒。自己再生を途中途中挟んでいたみたいだけど、そろそろ回復が追い付かないんじゃないかしら？」
最初は微々たるダメージを、けれど時間経過に連れて大きなダメージを与える。
それが毒毒の効果。
ずっとその効果に侵されていたミュウツーは、既に疲労困憊であった。
慌てて自己再生にとりかかろうとするミュウツー。
そんな甘えを、許すと思ったか？
「スーちゃん、咎めて」
甘えを許さない、絶望の知らせ。
スーちゃんが放った技は、『横取り』という、補助技を奪う技。
ミュウツーの自己再生が失敗に終わり、代わりにスーちゃんの体力

が回復する。
「スーちゃん、ベノムショック」
ミュウツーがスピードスターを放ちそれに対抗しようとする。
だがそれもまた、無意味だ。
スーちゃんのベノムショックは、ことごとくその星を砕いて行く。
微塵の衰えも見せず、ミュウツーの体を貫く。
その体力を、綺麗に削り取った。
「スーちゃんにはあらかじめ、隙があれば悪だくみを積むように指示してあるのよ。あなたとの鬼ごっこ中、ただ逃げているだけだと思った？　自分が捕食者で、私が被食者だと思った？」
甘いんだよと、言い捨てる。
「被食者が弱者だと誰が決めた。被食者が強者にかなわないと誰が決めた。いつだって強者を討ち取ってきたのは、誇り高き被食者だ」
これで終わりだ。
私を始めるために、ここで死ね。
とどめを刺そうと、ミュウツーの前に立った。
そんな私を、一匹のポケモンが食い止めた。
コニーの、ルクシオだ。
「……邪魔しないでよ、ルクシオ。コイツを放っておいて、私は前に進めない。この先もずっとここに縛られ続けられることになる」
放せと、ルクシオを蹴り飛ばす。
足にしがみ付き、その手を離さない。
「あんたもコニーのポケモンだったなら分かるでしょう!?　私の悲しみが、私の怒りがッ！　邪魔しないでよ！」
これ以上邪魔するというのなら、たとえコニーのポケモンでも許さない。
そういう思いで殺気を飛ばす。
ルクシオはその身を震わせた。
覚束ない脚は、今にでも逃げ出そうとしている。
けれど決して、立ち去ることは無かった。
真っすぐ、私を見つめてくる。

なんだよ。私が悪いっていうのかよ。
（ああ、そうだよ。焦らず他の作戦を考えればよかったんだ。功を急いて、リスク管理に失敗したのがこの惨状だ）
だからこそ、私はケジメをつけなければいけないんだ。
（コニーは優しい子だった。復讐なんか望んでいない、そう言いたいんだろ？　でも、関係ないんだ。これは『私の』逆襲だ。コニーを思っての行為じゃない）
だから、この手を払って。
この手を。
……手を。
「……チッ、この子とコニーに感謝することね」
空のボールを取り出し、ミュウツーを捕獲する。
抗う体力もなく、あっさりとボールに収まった。
（あ、ダメだこれ）
戦いが終わったと、一瞬だけ緊張の糸が切れた。
そうして私は、電池が切れたロボットのようにプツリと。
その意識を手放した。

虚夢の章　狂

私は、どうすればよかったんだろう。
そんなことを、何度となく考えた。
思い返してみれば、いつだって私に選択の余地はなかった。
悩む余裕もないほどに、切羽詰まっていた。
弟分を守ったことに後悔はない。
紆余曲折あったが、スーちゃんを守ったことに後悔はない。
後悔はない、その言葉に嘘はない。
けれど、弟分を庇わなければ腕にこんな醜いけがを負うこともなく、スーちゃんを見捨てていれば私は指名手配されることは無かった。
私のとった一挙手一投足は、着実に私の首を絞めて行った。
私は無力だった。
この狂った世界の波に流されることしかできない、非力な人間だった。
サカキに声を掛けられて、力を望んだ。
他に選択肢はなかった。
ニューアイランドに隔離された。
脱出手段なんてなかった。
リスク承知の上で、脱走を画策するしか道はなかった。
コーニッシュの言葉を無視して、独断で実行した。
私はいつも自分で行動を選んでいるつもりだった。
けれどいつだってその選択肢は押し付けられたもので、そうする以外に道がない物ばかりだった。
それでも自分に嘘を吐き続けてこられたのは、大事なものを守れたという誇りがあったからだ。
その誇りは、儚くも砕け散った。
あの時私が、戦いにのめりこんでいなければ。
コニーの出現にいち早く気づけていれば。
あるいはコニーが犠牲になる必要はなかったんじゃないか。

そんな思いだけが、ぐるぐる、ぐるぐると駆け巡る。
手の中に握りしめられているのは、ルクシオの入ったモンスターボール。
今はもういない、彼女に思いを馳せる。
「コーニッシュ……」
見たくない現実が、認めたくない真実が私を責め立てる。
コニーが死んだのは、私のせいだと。
今でも分からない。
どうしてコニーは、私なんかを庇ったんだろう。
「お前があいつの事を好いてしまった偶然、あいつがお前の事を好いてしまった偶然。二つの偶然が奇跡的に重なっただけだ」
「……サカキ」
先日のミュウツーの暴走で壊滅した施設。
私の部屋だけは無事だった。
あの時、私の部屋にはコニーがいた。
危険が及ばないようにと、無意識に避けていた。
そんな私の部屋に忍び込んだ男は、ロケット団のボス、サカキだった。
「ミュウツーの捕獲、ご苦労だった」
「あんた、ここまで全部計算済みだったでしょう」
「さて、なんのことかな」
白々しい。
なにが二つの偶然が奇跡的に重なっただけだ。
全て、あらかじめ筋道が立てられていたんだろう。
私が平凡から抜け出すように、脱走を試みること。
そこに少女を押し付けられて、私が情を抱くこと。
そして少女もまた、私に好意を持つこと。
一見秘匿しているように見せかけてガバガバの秘密の部屋。
すべては必然だ。
そう考える方が、よっぽど尤もらしい。
「勘違いしているようだが、私は切っ掛けを作ったにすぎん。そこか

ら先は本当に偶然だ」
具体的に言えば、お前とあいつをここに送ったことだなとサカキは言った。
それ以外は、私たちの選択に過ぎないと。
「お前が牙を失い服従してもよかった。お前が情を無くしていてもよかった。お前がミュウツーにたどり着かなくてもよかった」
すべては偶然で、この未来を選んだのは私だとサカキは言う。
「まあ、お前が生きていてよかったがな。その点で、コーニッシュがお前に好意を抱いたのは嬉しい誤算だった」
「……そうかよ」
空を仰ぐ。
天井がそれを塞ぎ、青の一つも見えやしない。
結局私は、何も選べていなかったのだ。
いや、どう行動したとしても、サカキにとってプラスに働くように仕組まれていた。
ロケット団として教育されても、バトルマシーンとなっても、ミュウツーを私が捕獲しても。
全て、サカキが得するようになっていた。
いや、一つだけあったか。
サカキにダメージを与えられる方法が。
私がミュウツーに、倒されていた場合だ。
この場合なら、ミュウツーはロケット団の手から解き放たれ、サカキは私を失うことになる。
あいつの手札を二枚、捨てさせるチャンスだったのだ。
少しだけ、コーニッシュが守ってくれたこの命が恨めしかった。
「さて、ミュウツーはこちらが預かっておく」
「ほらよ」
私はミュウツーのボールを放り投げる。
開閉スイッチは押していないので、ただのキャッチボールと同じだ。
サカキはそれを右手でワンハンドキャッチした。

「ふむ、いいのか？　そんな簡単に手放して」
「いいんだよ。そいつがいると、心がざわつく」
どうして身内を殺した相手と一緒にいられるだろうか。
いや、いられない。
私は一秒でも早くこのポケモンを手放したかった。
野生に放つよりかは、サカキのもとの方がまだ安心できるだろう。
なんだかんだこいつ、リスク管理がうまいみたいだからな。
「なるほどな。さて、次の指令だ。お前にはカントー各地のジムバッジを集めてもらう」
「……私が素直に聞き入れるとでも？」
「まさか。お前は無償では働かんだろうさ。だからこそ手元に置いている」
良く分からない指示だが、各地のバッジを集めるということはある程度の自由があるのだろう。
そうすれば私は、当然逃げ出す。
それを分かっていながら、どうしてそんな指示を出すというのか。
「バッジエネルギー増幅器は知っているか？」
そうサカキが問い掛けてくる。
私が首を横に振ると、だろうなと言った後こう続けた。
「読んで字の通りだな。トレーナーバッジにはそれぞれ、特殊なエネルギーが内包されている」
ポケモンのステータスを補強したり、他人のポケモンが言うことを聞くようになったりな。
そう続ける。
「そういったエネルギーを増幅させる装置が、バッジエネルギー増幅器だ」
「それで？」
いまいち話が見えてこない。
何だ？　こいつは何が言いたいんだ？
「そのエネルギー、どのように扱えると思う？」
「……そんなの、できるわけがないでしょう」

ようやく話が見えてきた。
今の私が、つい受諾してしまうような甘言。
そんな切り札をサカキが持っているとしたら、そして切ってくるとすれば。
それは間違いなく、死者の蘇生だ。
「そんなの、許されるはずがない」
「私は何も言ってないぞ？」
「言わなくても分かるわよ。あんたは『死者の蘇生だ』という。当然、根はあれど葉はない虚構」
私が指摘すれば、サカキは笑みを浮かべる。
手札を一つ潰したというのに、この男にとっては痛手ではないということか。
いや、私がこいつの思考をトレースできたように、こいつも私の思考をトレースしているのか。
「それなら、やめておいてもいいぞ？」
ほら来た。
その誘いは、乗る必要がないものだ。
いわば詐欺のような、あるいは無賃労働のようなものだ。
だけど私は、それを断ることはできない。
「やるよ」
「ほう？　死者の蘇生はできないんじゃなかったのか？」
「論理的にはね」
そう、普通に考えてできるはずがない。
だけど、僅かばかりでも可能性があるのならば、私はそれに縋るしかない。
根があるのなら、葉もあるのではないかと思わずにはいられない。
たとえそれが、虚数の彼方にしか存在しない可能性だったとしても。
だからこそ、サカキはこう問いかけたのだ。
やめておいてもいいぞ、と。
私が断れないことを知っていて、口では否定しておきながらも希望

を抱いていることを知って。
あえて希望をちらつかせ、その希望に縋らせる。
ああ、こいつは紛れもない悪だよ。
「さて、それはお前が嫌うロケット団に所属し続けることになるがいいのか？」
「構わないね」
バッジなんて、あっという間に集めてみせる。
そしてコニーの蘇生を試みて、失敗すればその時抜ける。
それで十分間に合う。
三年も待ったのだ。
たかが数ヶ月、今更誤差の範囲でしかない。
「敢えて狂うことも厭わない。そんな正義を極めてみせる」
覚えておきなさいと、サカキに言い渡す。
サカキは満足そうに笑い、私たちはニューアイランドを後にした。
＊
久しぶりに踏みしめた、カントーの大地。
トキワは、何も変わらなかった。
トキワは緑、永遠の色だったか。
私が指名手配されて、三年ほど経過している。
いつまでも厳重な警備を敷いていられないし、私がトキワにいないことは分かっただろう。
既に警戒態勢は解除されていた。
「さて、トキワのジムバッジは別に要らないとして、どういう順番で巡ろうかね」
忘れているかもしれないが、トキワのジムリーダーはサカキなのだ。
故にトキワのジムバッジを入手する必要はない。
ならばニビ、ハナダと北の方から攻め落としていくか。
ある程度脳内で旅路を決めて、トキワの森へと進みだした。
「ういーっ！　ひっく……待ちやがれ！　わしの話を聞け！」
酔っ払いの、そんな声が聞こえた。

真昼間から酔いつぶれるとか、世界は終わっているな。
話から察するに、誰かが酔っ払いに絡まれているのだろう。
かわいそうにと思いながらも特に気には留めず、私はトキワの森へと足を進めた。

三章　七天魃倒

一話　Ｒｉｄｅ　ｏｎ　ｔｈｅ　ｃｉｔｉｅｓ

よく、勝てば官軍負ければ賊軍という言葉を聞く。
この言葉の意味は『勝てばよかろうなのだ』ということで、『勝ったものが正義だ』ということだ。
ならば、この勝利というのはいつ訪れるのだろうか。
例えば遠いカロス地方。
ここでは三千年前に、他国から侵略を受けるということがあった。
終わることのない戦争を前に、一人の男が兵器を用いて、すべてを終わらせたという。
この場合、男の一人勝ちなのだろう。
それは分かる。
だがしかし、男はこの戦争で大切なポケモンを失ったと聞いている。
つまり、男が兵器を持ち込むまでのカロスは負け続きだったのだ。
ならばどうして、カロスを攻めた国は正義にならなかったのか。
戦争の勝敗は、どのタイミングで決まったのか。
最近読んだ仮想戦記に、『神国日本』というものがあった。
強敵と言われた清という国から領土を勝ち取り、難攻不落の露国を攻め落としたその国はしかし、十全な資源が得られずに敗北した。
どれだけ勝っても、たった一度の敗北で、その国の正義は悪へと転がり落ちた。
歴史を振り返ればいつだってそうだ。
後に正義と謳われるものは、最後の勝利を掴むまでに何度も敗れている。
何度敗れても、最終的に勝てれば勝ちなのだ。
ならば、最後はいつ訪れるのか。
相手も自分も諦めない限り、終わることのない戦いなのか。
私の正義は、あとどれだけふりさけ見れば姿を現すのだろうか。

＊
森は好きか？　私は好きだ。
吹き抜ける風も、揺れる木の葉の奏でる音色も、遠くで響くせせらぎも、すべてが好きだ。
強いて言うなら虫ポケモンがいるところがマイナス評価といったところか。
木漏れ日の落ちる草原を、私はルクシオと一緒に歩いていた。
このルクシオは、無き友人の忘れ形見。
友人の名を借りて、この子にもコニーと名付けた。
周囲のポケモンのレベルを見る限り、スーちゃんはレベルが高すぎる。
せっかくだからコニーのレベリングも行うことにした。
「よーしッ！　君はポケモン持ってるな？　勝負しようぜ！」
「……あ、はい」
不意に、麦わら帽子に半袖短パン、虫取り網を抱えた如何にも虫取り少年という子供に話しかけられた。
驚いた、カントーはこんな無法地帯だったのか。
いや、話には聞いていた。
目と目が合えば、始まるものがあると。
恋ではなく、ポケモンバトルだ。
なんだかんだ野良バトルは初めての気がする。
いつもはきちんと対戦メニューが組まれていたからね、突発的なバトルなんて初めてだ。
思った以上に世界はバトルジャンキーだらけだった。
少しくらい、期待してもいいのかな？
「行くよ、コニー」
そうルクシオに語り掛ける。
ルクシオの爪から、バチバチと電流が流れだす。
……この癖は治した方がいいな。
さて、相手のポケモンは？
「いけっ！　ビードル！」

……そっかぁ。
私の興味は、一瞬で消えうせた。
せめてスピアーまで育てろよ。
何のための成長が早い虫ポケモンだと思ってるんだ。
そんな相手に苦戦するはずもなく、試合は一方的に終わった。
ビードルの裏にキャタピーがいたが、こちらも低レベルだった。
試合とも呼べない、実力差による暴力。
それだけならまあ、別によかった。
トレーナーの質を知るという授業料だと考えれば無駄な時間ではなかったのだから。
だが、その後に放たれた言葉は、聞き流すことができなかった。
「負けたー！　キャタピーなんかじゃダメか！」
「……は？」
踵を返していた体を巻き戻す。
負けて悔しがるのではなく、次は勝てるようにと反省するでもなく、こいつは何と言った？
「キャタピーなんかじゃダメ……？　本気で言ってるの？」
「な、何だよ。文句あんのかよ」
堪えきれないくらいの怒りが沸き上がっていた。
虫取り少年は、私がなぜ怒っているのかまるで分っていない様子だった。
これが、トレーナーの実態だというのか。
『これから先、力及ばず敗れる度にそう言うつもりか。ベストを尽くさなかった自分に言い訳をして、他人のせいにして、そうやって生きて行くつもりか？』
あの日の言葉が蘇る。
脳裏に焼き付き、剥がれ落ちない、嫌な思い出。
たった一度、ただ一度だけ経験した、敗北の記憶。
ああ、そりゃ憂うわけだと、そう思った。
こんなトレーナーに使われるポケモンがかわいそうだ。
自然に生きていれば、成長し、サナギとなり、羽ばたくときがあっ

ただろう。
だがもしかすると、この少年に捕まったことで、永遠に幼虫のまま飼い殺しとなってしまったのかもしれない。
指示を出すだけなんて、トレーナーじゃなくてもできるというのに。
「あなたは、自分の事が情けなくないの？」
底冷えするような声で私は問い掛けた。
少しだけ零れてしまった殺気で、虫取り少年は意識を失った。
「チッ」
恐怖を刻み込もうと思ったのに、その前に意識を失いやがった。
幸せな野郎だ。
少し先に進むと、また別のトレーナーたちがバトルをしていた。
こっちはこっちで、互いにたいあたりするだけの児戯のような戦闘。
糸を吐くで相手を縛ったり、結界を作ったりすることもない、低レベルの争い。
こちらも、偶然の勝利に喜び、当然の敗北を受け入れていた。
（トレーナーのレベル、凄い低かったんだな）
私の水準値は、ニューアイランドにいた彼らだ。
彼らでさえ物足りなかったというのに、ここに居るトレーナーたちでは彼らにさえ手も足も出まい。
（どこかに、私の渇きを癒してくれるようなトレーナーはいないかしら）
無駄な争いをせずに済むように、トレーナーと極力目を合わせずにトキワの森を後にした。
＊
「博物館？　ポケモンジムじゃなくて？」
私はなぜこんなところにいるのだろうか。
ジムリーダーならあるいは、私を打ち負かすかもしれないと期待を胸にニビシティに立ち寄ったのが少し前。
第一村人を発見し、ジムの場所を聞くと北にあると言っていた。

だから北へ北へと進んでいったのに、何故私は博物館にいるのだろう？
まあ折角なので見学していくことにした。
見学料五十円て……それでよく経営できてるな。
まあ私としてはラッキーだから何も言うまい。
（んー？）
展示物の陰に、良く見知った集団がいた。
黒い服に黒い帽子。
胸元には大きく赤で書かれたＲのマーク。
（ロケット団じゃん。なんでこんなところに？）
うん、いつ見てもダサい。
私？　あんな恰好するわけないじゃん
普通におしゃれしてるよ、右腕のアームカバーを含めてね。
それが許されるくらいの立場なのさ。
そんなことはどうでもいいんだ。
大事なのは、あのゴミどもが何をしているのかということだ。
（んー、私としてはジムバッジさえ集められればそれでいいんだよね）
それは絶対に外せない。
逆に言えば、それ以外は好きにしていいということなのでは？
「……潰すか」
何を企んでいるのか知らないが、こいつらを潰したところで誰も悲しまないだろう。
悲しんでくれる相手がいる奴らが、こんな組織に属さないだろう。
なら潰しても問題ないな。
よーし、暴れるぞー。
そう思った時だった。
不意に部屋の温度が下がったような気がした。
背筋が凍り付いたかという錯覚。
直後、私の背後に飾られていたポケモンの化石が。
まるで意識を持っているかのように、動き出した。
「ッ！　コニー！」

ルクシオのコニーを繰り出す。
一体何がどうなっているんだ。
館内アナウンスが鳴り響く。
入場客が慌てふためく。
我先にと出口に駆け込み、かえって詰まっている。
くそっ、ロケット団を見失ったじゃないか。
仕方ない、こっちで我慢してやろう。
私は今目の前で活動している骨と向き合った。
「コニー！　スパークで加速して！」
ルクシオとは付き合いが短い。
少し前まで彼女のポケモンだったんだ。
スーちゃんの様に、視線で会話なんてことはまだできない。
故に、細かな指示を出して補助をする。
ルクシオは電気を足元に集中させて、自らをはじいた。
電光石火すら置き去りにするスピードで、化石にとびかかる。
「図鑑は……」
ルクシオが弾き飛ばした隙に図鑑で調べる。
しかし、合致する情報は出てこなかった。
「なら、この目で見極める」
骨格から、化石になる前のポケモンを推測する。
尖った二つの角、鋭い牙、発達した顎、長いしっぽ、翼の部分にある手。
一言で言えば、翼竜のような見た目。
そんなポケモンがいたはずだ。
「そう、あなたの名前はプテラだわ」
＊
化石ポケモンプテラ。
それが化石の状態で動いている。
一体どういうカラクリなわけだか、さっきのロケット団達が一枚噛んでいるのは間違いないと思うが。
じりじりと間合いを詰める。

どちらかの射程圏内に入ったタイミングで、勝負が動くはずだ。
だから、近づくにつれ緊張感は増すはずで、それに対し私は高揚感を覚えるはずなのだ。
しかし今あるのは、ただただ奇妙な感覚だけ。
（……？　どうしてこうも昂らないんだろう）
私自身がどうしようもないほど壊れているのは、既にわかっている。
私は、私に対して絶対的な信頼を置いているのだ。
ならばなぜ、こうも胸躍らないのだろう。
目の前で羽ばたくプテラの化石を観察する。
そもそも、翼の無い骨格だけなのだから、羽ばたく必要もないのだ。
そして次に、こいつからは間合いに入ってきた瞬間に食い殺してやる、そういった気概が感じられない。
そう、まるで操り人形のように。
どこかでピースがハマったような気がした。
けれどその全体像を確認する前に、私の意識は引っ張り戻された。
「君！　無事か？」
「誰、あんた」
ほんの一瞬だけ、流し目で声の主を確認する。
糸目の男だった。
危ないから下がっておけばいいのに。
「俺はニビジムのジムリーダーのタケシだ。ここまで持ちこたえてくれて感謝する。君も早く避難するんだ」
「ジムリーダー？」
その単語に、ピクリと反応する。
バックステップを踏み、タケシを視界に入れる。
ふーん、これがジムリーダーか。
なかなか実力者っぽいじゃん？
「タケシって言ったわね。何か手立てはあるの？」
「いや、ない。だが町のみんなを不安にするような危険を前に、リーダーの俺が引くわけにはいかないんだ」

「ふーん」
なかなかにカッコいいこと言うじゃないか。
「それなら、私も手伝うよ」
「いや、みんなを危険に晒すわけにはいかない」
「いいのいいの、どうせ私ここの人間じゃないし。それにこの後あんたに挑むつもりだったのよね。だからチャチャっと済ましちゃいましょ」
私が助力を申し出ると、タケシは少し驚いた様子をした。
糸目だというのに、どうしてそんなにも表情が出せるんだ？
世界はなぞに包まれている。
「ああ、君は実力も十分そうだ。頼んだぞ、イシツブテ！」
ラッシャイ！
イシツブテが場に現れる。
サカキが地面タイプのエキスパートだったはずだから、この男は岩タイプか。
良く鍛えられたイシツブテだ。
おそらく、意図的に進化させていないのだろう。
ジムリーダーは立場上、様々なトレーナーと対峙する。
駆け出しトレーナーから、他のバッジをそろえたエリートトレーナーまで。
その為、意図的に実力を抑えたポケモンというものを育成している。
こういった場合、能力以外の部分を鍛えることが多く、強力な技を覚えている場合が多い。
「しかしまあ、何だってプテラの化石が動いてるんだ？　君がここに来たときからこうだったのか？」
「まさか、私が来たときは止まっていましたよ。突然、不意に動き出したんですよ。ポルターガイスト、操り人形、下がった室温。
ポルターガイストのように……」
それぞれのキーワードが結びつく。
そうか。

「タケシ、種はおそらくゴーストポケモンよ」
「ゴーストポケモン……そうか！」
　このプテラは生きていないし、自我も有していない。
　何者かが動かしているだけ。
「しかしどうしてゴーストポケモンなんだ？　エスパーポケモンの可能性はないのか？」
「このポケモンが動き出す前に、空気が凍り付く感覚があったわ。それはきっと、ゲンガーの仕業」
　ゲンガーというポケモンが現れると、部屋の温度が五度下がるとも言われている。
　私の知る情報の中では、一番それがしっくりくる。
「なるほど、しかし困ったな。相手がゲンガーということは実体がないというわけだろ？　どうするんだ？」
「実体がない……？　まさか。ありますよ、実体。ゲンガーにはね」
　進化前のゴース、ゴーストの体重は僅か百グラム、それに対してゲンガーの体重は四十キロほどある。
　ただのガスがあの体積で四十キロもあるはずがない。
「それなら、一体ゲンガーはどこに」
「まあ見ててくださいよ。いくよ、コニー」
　コニーに放電を纏わせる。
　体表に煌めく稲妻を纏い、一条の光になる。
「コニー、プテラの影を貫いて！」
　ゲンガーには、熱を奪うという効果の他に、もう一つ特徴がある。
　それは影に忍び込むというものだ。
　化石を操るのなら、化石の影に忍んでいる可能性が高い。
　コニーが先ほどのスパークの要領で射出される。
　一条の稲妻が、プテラの影を引き裂く。
「ゲンゲロゲーッ!?」
　たまらずと言った様子で、ゲンガーが影から飛び出してくる。
　さて、お膳立てはしたぞ？
「タケシ！」

「任せろ！　イシツブテ、とおせんぼう！」
なるほど、あくまで人の安全を優先するか。
先ほどのとおせんぼうは、相手に逃げの一手を打てなくする技。
これでゲンガーは、どちらかが倒れるまで逃げることができなくなった。
「イシツブテ！　撃ち落とすだ！」
唯一の有利だった浮遊できるという特性も、撃ち落とすという技で封じられる。
確かにリーダーというだけある。
技の効果をしっかりと把握している。
「コニー、戻って」
となれば、最後に放つ技は地面技だろう。
ルクシオが居たら巻き沿いを食らってしまう。
「感謝する。イシツブテ！　とどめだ！」
地均しかマグニチュードか地震か。
どれかは分からないが、タケシが放ったのはやはり地面技だった。
しっかりと情報を隠すあたり、やっぱりジムリーダーなんだなと思う。
先ほどまで指示を出していたのは、私に作戦を知らせるためか。
ゲンガーは避けることも逃げることもかなわず、その地面技に倒れ伏した。
タケシは警察に連絡を取り、引き渡しの準備を始めた。
ヤバ、流石に警察とかだと私の顔知ってる人いるんじゃね？
……よし、逃げるか。
「助かったよ。君、名前は？」
「メア。トキワシティのメア」
「メアか。この後ジム戦を希望しているんだったね。準備をしておくよ。ジムバッジは何個持っている？」
すまん、お前が警察を呼んだせいで長居出来ないんだ。
早く済ましてくれ。
そう思い、素直にゼロだと言った。

「ゼロ個!?　あれだけの知識を有しながら?　いや、トキワシティから来たと言っていたか。ならばニビは一番近くにあるジムでもあるのか」
　タケシは少しだけ思案していた。
「ふむ、本来対戦相手の保有バッジによってポケモンを調整するのだが、君相手には不要かと思う。君が了承してくれるならば、まともなメンバーで戦いたい」
「へぇ」
　それは何とも、心惹かれる提案だ。
　もちろん快諾だ。
　より刺激的な戦いを得られるならば。
「じゃあそれで頼むわ。せいぜい私を楽しませてよね」
「もちろんだ」
　じゃあ私はコレで!
　早く逃げないといけないので、ではっ!
　そういう感じでそそくさと逃げようと思ったが、折角だから情報を流してみた。
　タケシに歩み寄り、ちょいちょいと顔を招く。
　タケシは膝をかがめ、私に耳を寄せる。
「町々を襲いつくせ、撃ちのめせ、悪の牙たちよ」
「……それはッ!」
「じゃあ、伝えたからね」
　ふむ、流石にジムリーダーともなれば伝わるか。
　私は手を振り、博物館を後にした。
＊
　俺はニビシティのタケシ、ジムリーダーをやっている。
　いつも通りジムで挑戦者を待ったり、ポケモンを育成したりしていると複数の住民が駆けつけてきた。
　今日は挑戦者がいっぱいだなと喜んだが、どうもそうではないらしい。
　なにやら博物館で、化石が暴れ出したというのだ。

うん、知ってた。誰もジムに挑戦するつもりがない事くらい。
化石が動くとは一体どういうことか。
そう思いながら博物館に駆けつけた俺が視たのは、確かに動く化石だった。
そしてそれを、一人の少女が足止めしていた。
「君！　無事か？」
俺はそう声を掛けた。
ジムリーダーが来たからもう大丈夫だと安心させようと思って。
「誰、あんた」
ショックだった。
いや、ジムリーダーといっても全員に顔を覚えてもらえているわけではない。
ただまあ、それなりに有名人だと自負しているだけに、少し凹んだ。
だが話を聞いて行くうちに、彼女がニビの人間ではないことが分かった。
それなら仕方ないな！　他の街の町長とか覚えている人の方が少ないだろう、そのはずだ。
さて、そんな話をしていたわけだが、現状を打破する手段は思いついていない。
俺だって岩タイプをエキスパートにしているんだ。
この化石は、プテラのものだということは分かる。
だが、それ以上の事は分からない。
どうしたものかと悩んでいると、そこからは彼女の独壇場だった。
わずかの情報から相手を絞り、豊富な知識で特定する。
一体どれだけポケモンに精通しているというのか。
俺は少し恐れを抱いた。
（こんな子供が、これだけの実力を有しているのか）
トキワのメア。
聞いたことがない名前だ。
どうしてこれだけの実力者が、今まで無名だったのか。
何にしろ、彼女の協力もあり、無事に事件は解決できた。

ジムバッジの数を聞くと、なんとゼロだと言っていた。
なるほど、今までは鍛錬に励み、ようやく旅に出た感じか。
それならば彼女が無名なことにも頷ける。
だがそうなると、非常に口惜しくもなる。
彼女はこれから先、絶対に有名になるトレーナーだ。
そんな相手と、全力で戦うことができないなんて。
後半のリーダーたちが全力で戦えるのに少し嫉妬し、彼女に全力で挑んでいいかと提案した。
彼女はこれを了承した。
よし、久々の強敵だ。
腕が鳴る。
立ち去ろうとする彼女は、思い出したかのように俺を手招きした。
何か言いたいことがあるのかと思い、顔を近づける。
彼女が放った言葉は、俺に衝撃を与えた。
「町々を襲いつくせ、撃ちのめせ、悪の牙たちよ」
まて、どうして君がそれを知っている。
彼女は事も無げに、立ち去って行った。
今の言葉を、英語に訳すとこうなる。
『Ｒａｉｄ　Ｏｎ　ｔｈｅ　Ｃｉｔｙ，Ｋｎｏｃｋ　ｏｕｔ　Ｅｖｉｌ　Ｔｕｓｋｓ．』
『ＲＯＣＫＥＴ』……ロケット。
このカントーを根城とする集団。
極悪非道のポケモンマフィア。
そんな彼らを表す言葉だった。

二話　意図と思惑と

博物館事件の後、私は少し遠回りしてジムへ向かっていた。
理由は二つ。
一つはロケット団の動向を知ること、もう一つは警察の様子を窺うためだ。
前者は聞き込みですぐにわかった。
東の方へ逃げて行ったということなので、おそらくお月見山かハナダシティに逃げたんだろう。
いずれ私も向かう方面なのでこれは後回しでいい。
問題は、警察の私に対する警戒がどれほどかということだ。
近くの短パン小僧を呼び寄せて、警察署から指名手配犯の写真をカメラに収めてくるように頼む。
千円をチラつかせるだけで子供はコレを快諾してくれた。
モンスターボール五個分だからね、そりゃあ喜ぶよ。
幸い博物館での事件のために、警察署内はごたついている。
短パン小僧が多少怪しいことをしたところで気にかける余裕なんてないだろう。
実際その読みは当たり、何事もなかったように戻ってきた。
指名手配リストを携えて。
「ありがとねっ」
「またなんかあったら任せてくれよな！」
大きく手を振る少年に、私も軽く振り返す。
さて、中身を確認しますか。
一番いいのはこの中にないパターンだね。
ロケット団のせいでカントーの治安は割と悪い。
私の名前がないという可能性も無きにしも非ず。
そんなことなかったわ。
（マサラタウンのメアリー十四歳。国際警察数名に対し過剰な攻撃をしそのまま逃走。強力なポケモンを携えている……ねぇ）
どこにも嘘は書かれていない。

書かれていないが、あくまで私を悪と言い張るか。
（……覚悟していた、ことだろう？）
カメラを握る力が強くなる。
こうなることも考慮したうえで、スーちゃんを助けることを選んだんだ。
ならば受け入れろ。
その先は、まっすぐな道が続くだけだ。
「スーちゃんについての情報は、一切出てないのね」
これならば最悪スーちゃんを繰り出すことになっても問題なさそうだ。
＊
「しまった！　一万光年は時間じゃない、距離だ！」
（なんだこのボーイスカウト。頭おかしいんじゃないか？）
ジム内に配置されたトレーナーを下し、冷視する。
私は今、ニビジムに来ていた。
お目当てはタケシとの戦闘……もといジムバッジだ。
ジム内に配置されたトレーナーということもあり実力に期待したが、どうにも弱っちい。
というか、トレーナーがこいつ一人って。
このジム経営ヤバいのか？
ニビの住民は損得勘定を即刻覚えるべきだと思う。
「待っていたよ、トキワのメア」
「それはどうも、ニビジムリーダータケシ」
フィールドに立つ。
向こう側にはタケシが居て、天井に吊るされた照明に照らされていた。
「レギュレーションを決めようか、手持ちは何匹だい？」
「二匹」
一応、公式に採用されるレギュレーションには『六三五零フラット』というものがある。
『六』匹を事前に申請し、一分半の見せ合いののち『三』匹を選出。

レベル五十以上のポケモンは『五十に引き下げられる』、そんなルール。
しかし私の手持ちは二匹なので、そのルールでは戦えない。
加えて言えばルクシオのレベルも足りていない。
「そうか、なら見せ合い無しの二匹選出。二十レベルフラットでどうだ？」
「オーケー、それでいいわ」
ボールに手を掛ける。
カチャリという音が、一際大きく聞こえる。
世界が引き延ばされる。
ああ、この感覚だ。
「行くぞ！　ゴローニャ！」
「お願い！　コニー！」
二人が繰り出したのは同じタイミングだった。
ゴローニャと聞いて、思わず口角が上がりそうになる。
もちろん、戦闘において表情なんていう情報アドバンテージを与えるわけにはいかない。
実際には能面のようなポーカーフェイスが貼り付いているだけだ。
コニーがスパークを地面に放ち、反作用を推進力に変えて突進する。
空中で半回転し、アイアンテールを決めた。
ゴローニャに鋼タイプの技は効果抜群。
これは大きいはず。
そんな私をあざ笑うように。
ゴローニャは不敵に笑った。
「コニー！　引いて！」
「ゴローニャ！」
ゴローニャが地面を揺らす。
それを空中でスパークを放つことで回避させる。
いわば多段ジャンプだ。
「ほう、スパークをそのように使うのか。面白いな」

「あんたのゴローニャ、なんかおかしくない？」
タケシはルクシオが地面技を避けたことに感心し、私はゴローニャが普通ではないことに気付く。
具体的に言えば、頭部から大きな角が生えていた。
「これはアローラゴローニャと言ってな。遠い地方、アローラに生息するゴローニャだ」
「へぇ……？」
そんなものがあるのか。
どうやら見た目だけじゃなく、性能にも違いがありそうだ。
ポケモン図鑑に載ってるかなー。
でもバトル中に意識を他に割くのはもったいないしな。
「コニー」
私はルクシオに呼び掛ける。
ルクシオは先ほどと同じように突進するが、そこから先は違う。
これは作戦変更の合図だ。
ゴローニャの近くまで潜り込むと、毒毒を放った。
「ゴローニャ！」
それを咎めるように、ゴローニャのパンチが炸裂する。
ルクシオが吹き飛ばされるが、見落としてはいけない重要なことがあった。
（あのパンチ、帯電している）
なるほどね。見えてきた。
鋼タイプの技を受け、ケロッとしていること。
帯電したパンチ。
（アローラゴローニャのタイプは岩電気ってところかな？）
育つ地方が変わるだけでタイプまで変わるのか。
面白いな。
ゴローニャに吹き飛ばされたコニーが空を蹴り、私のもとまで帰ってくる。
毒毒は上手いこと決まったということか。
ナイスだ。

「コニー、眠る」
「む、ゴローニャ！」
眠るでルクシオの体力を回復する。
これを好機と見たか、タケシがゴローニャに地震を打たせる。
「コニー」
ただそれだけの指示。
眠って体力を回復したはずのコニーはまた空を蹴り、ゴローニャに向かって行った。
「ゴローニャ！　スイッチ！」
ゴローニャは地震を途中で切り上げ、岩石封じにシフトした。
勢いよく飛び込んだルクシオは避けることもかなわず、もろに食らった。
岩に足を取られ、動きを封じられる。
「コニー！」
「遅い！」
ルクシオをボールに戻そうとするが、それよりも早くゴローニャの技が決まった。
くっ、一歩届かなかったか。
「ごめんね、コニー。ゆっくり休んで」
コニーをボールに戻す。
先発勝負はタケシの勝利。
やるじゃん。
「驚いた。今のはカゴの実か」
「流石ですね」
ルクシオが眠った後に、すぐ行動できたのには仕掛けがある。
ルクシオの持ち物はカゴの実。
眠り状態に陥ったときに回復する効果がある木の実だ。
わざと隙を作り攻撃を誘導。
その隙にカウンターを決めるつもりだったが、流石はジムリーダーか。
そう簡単にはいかなかった。

「ふふっ」
ああ、愉しいな。
ポケモンバトルは、私に生を与えてくれる。
この瞬間だけが、私の心を突き動かす。
「行くよ、スーちゃん」
小さくボールに語り掛け、繰り出した。
「ギシャァァァァ」
「む、見たことがないポケモンだ。ゴローニャ、一度引くんだ」
タケシはゴローニャをボールに戻し、次のポケモンを繰り出した。
現れたポケモンは、岩蛇。
「頼んだぞ！　イワークッ！」
イワーク？　攻撃力がポッポ並みだと言われるあの？
何を考えているんだ？
なんでハガネールにしないんだ？
（あっ、そっか。岩タイプのリーダーだから進化できないのか）
イワークは岩地面タイプだが、ハガネールは鋼地面タイプ。
故にイワークを使わざるを得なかったと。
悲しいやつだな。
（さて、スーちゃん。準備はオッケー？）
そうスーちゃんにアイコンタクトを送る。
スーちゃんは少しだけ頷く。
それは悪だくみを積み終えたという知らせだった。
やっちゃえ。
「ギシャァァァァ」
スーちゃんの龍の波動がイワークを襲う。
特攻が倍に跳ね上がった龍の波動だ。
イワークごとき、軽く吹き飛ばす。
フィールドを土ぼこりが覆う。
そんな煙を、タケシの声が切り裂いた。
「岩石封じ！」
イワークがいた方向から、岩石が飛んでくる。

それは的確にスーちゃんを襲った。
別に、あのタイミングでゴローニャに入れ替えたというわけではない。
単純に、イワークがミリ耐えしただけだ。
何故耐えられたか、その答えは特性にある。
「イワークの特性は頑丈、体力が満タンであればどんな技でも一度だけ堪えることができる」
タケシがそう自慢げに語る。
だからさ。
私はこう答えたんだ。
「知っているわ」
もう、油断も慢心も隙も見せない。
続く第二波で、着実に削り取る。
「参ったな。君の知識量は底知らずか」
「さてね、まだ深くなることだけは確かよ」
少なくとも、この戦いが終わったらアローラという地方の生態系について調べなければいけない。
まだまだ知るべきことはいっぱいだ。
「だが、それなら知っているだろう。岩石封じの効果を」
「受けた相手は、素早さが一段階遅くなる」
他にも岩雪崩やストーンエッジなど、威力が高い岩技は色々あるのに採用される理由。
それはこの追加効果にあった。
龍の舞や蝶の舞のような素早さのあがる技の起点にならない他、後続の中速アタッカーを相手より早く動かすことができるなど、様々な利用方法が考えられる。
スピードが下がったスーちゃんならば、ゴローニャの方が速い。
そう考えているのだろう。
「さあ！　これで終わりだ、行け！　ゴローニャ！」
ゴローニャと、アーゴヨンが向かい合う。
「スーちゃん！　目覚めるパワー」

「ゴローニャ！　地震！」
素早さが下がったアーゴヨンと、下がっていないゴローニャ。
先に動いた方が勝ち。
そんな勝負で。
勝利を確信した私は、漸く顔に笑みを浮かべた。
「ゴローニャ?!」
倒れ伏したのは、ゴローニャだった。
＊
「驚いた。いったいどういう仕組みなんだ?」
「それはですね……」
対戦後の感想戦というのは、意外と為になる。
もちろん、トキワの森にいた虫取り少年のような奴としても意味がない。
自分が負けた試合、負け筋があった試合に、どうすればよかったか見つめなおす、いい機会だからだ。
「スーちゃんの特性が理由ですね」
「特性?」
スーちゃんの特性を覚えているだろうか。
私がサカキに図鑑を貰ってすぐ、少しだけ触れたのだが。
「ビーストブースト。相手を倒したときに、一番高いステータスのランクが上昇する特性です」
「そんなものがあるのか！」
つまり、一度ゴローニャによって下げられた素早さは、特性ビーストブーストによって引き上げられプラスマイナスゼロ。
素の素早さ対決ならばスーちゃんはそうそう後れを取らない。
知識量の差ですよ、これが。
「いや、勉強になったよ。グレーバッジだ、受け取ってくれ」
「ん、サンキュー」
タケシに、鈍色に輝くバッジを貰う。
八角形の、岩を模したバッジだ。
「それと、これも」

「……これは？」
もう一つ受け取ったのは、ディスクのようなもの。
ナンバリングは三十九になっている。
もしかしてタケシは歌手なのか？　歌ってみたなのか？
「技マシン三十九、岩石封じだ。今回はいいようにやられてしまったが、上手く使いこなせれば試合を有利に運べるんだ」
「へー、これが技マシンなんだ」
話には聞いていた。
一瞬でポケモンに技を教えられるディスクがあると。
一体どういう仕組みなんだか。
科学の力ってすげー。
「さて、君に聞きたいことがある」
「あーはいはい。いいけどさ、先に確認しておくよ？　盗聴器とかはしかけられてないよね？」
「ああ、その辺は抜かりない」
「聞き耳立ててるやつもいない？」
大丈夫だと、タケシは言った。
それから、博物館での発言の真意を聞きたいと。
「どうして君がロケット団のことを深く知っている。君は一体何者だ」
「……ふふっ」
私はわらった。
特に意味はない。
私にとっては、だけどね。
タケシにとっては薄気味悪く映っているだろう。
そういう空気を作れれば、あとはどうでもいい。
「私はトキワシティからやってきましたが、ジムバッジはゼロでした。どうしてトキワシティのジムに挑まなかったでしょう？」
「……まさか、嘘だろう？」
「さて、私も確信があるわけじゃないんですよ。ただ、忠告です」
トキワのジムリーダーサカキには気を付けてください。

「それでは、対戦ありがとうございました」
私は、ニビジムを後にした。
＊
（上手く運べた）
私の最終目的の一つに、ロケット団を潰すというものがある。
だがしかし、サカキほどの実力者を倒せるだけの人材は、カントーにはそうそういない。
そうなればサカキは好き放題やる。
それは面白くない。
（ま、せいぜいサカキの動きを制限してよ）
サカキと言えど、同じジムリーダーから怪しまれているとなれば大きなことはできない筈だ。
いくらあいつでも、カントーのリーダー七人を相手にして無事で済むはずがない。
リスクを嫌うあいつの事だ。
きっと目立った行動はできない。
（いやー、いいことした後は気持ちいいな）
どうやら私はまた一つ、カントーの平和に貢献してしまったようだ。
私の善行がオーバーフローしてしまわないか怖いね。
そんなことを考えていると、あとからタケシが付いてきた。
「おーい、メア！　待ってくれ！」
「どったの？」
タケシは息を切らしながら走ってきた。
よく見ると、カバンのようなものを抱えている。
私の前にそのかばんを丁寧に置くと、中身を取り出した。
「……これは？」
カバンから現れたのは、大きな卵だった。
ダチョウの卵くらい大きい。
「実はな、俺はジムリーダーであると同時にポケモンブリーダーも目指しているんだ」

「目指す？　ブリーダーって目指すものだっけ？」
私は疑問に思ったことを素直に聞いた。
ブリーダーやらトレーナーはその人が勝手に名乗るだけではないのかと。
タケシは、俺はまだまだ未熟だからと言った。
それならこの世のトレーナーのほとんどがただの人になり下がるぞ。
全人類ニート化計画でも立ててるのか？
「そんな折、この卵を受け取ったんだ。一説によると、ポケモンの卵なんじゃないかと言われている」
「ポケモンの、タマゴ？」
ポケモンは長らく、その生殖方法が判明していなかった。
気づけば次世代が生まれている。
そんなことから、自然がポップしているという説まで浮上してくるほどだ。
それに対して、ポケモンの卵とな？
「ああ、その真実を知るつもりだったが、先ほどのお礼だ。受け取ってほしい」
「いいの？」
そんな貴重なものを、私なんかに預けてしまっていいのか。
そんな思いで、私は問い掛けた。
「ああ、君はポケモンの事をよく知っている。君なら安心して任せられる」
「……ありがと」
タケシから卵を受け取る。
卵が、小さく動いた気がした。
「さて、メア。君はこの後もジムバッジを集めるのかい？」
「そのつもりよ」
集めきり、本物のコニーの蘇生を試みる。
その為だけに、私はバッジ巡りを行う。
「それなら次はハナダシティに向かうんだろ？　そういうことならジ

ムリーダーのカスミにその卵の事を見せてみるといいかもしれない」
「？　どうして？」
「卵の模様、水玉模様になっているだろ？　もしかすると、水タイプのポケモンかもしれない」
「ふーん、ハナダのリーダーは水使いなんだ」
　いいことを聞いた。
「メア、君はもっとジムリーダーについて調べてから挑んだ方がいいぞ」
　切り札とか、得意な技とか。
　そういう情報を事前に仕入れているかどうかで、対策をしているかどうかで。
　敗因は取り除くことができる。
　そうタケシが力説する。
「そんなことをしたら、つまらないでしょう？」
　私の答えは、そんなものだった。
　ガッチガチにメタを張って勝っても、意味がない。
　ギリギリの試合を、全力で楽しむ。
　だからこそいいんじゃないか。
　分かってないなあ。
「じゃ、またねタケシ。色々ありがとう」
「あ、ああ。またいつかな」
「うん！　またねー！」
　スーちゃんとコニーを回復させに、一度センターに戻った。
　次はハナダシティ、水タイプのジムリーダーだ。

三話　お転婆人魚

「待ってくれ！　見つけた化石はやる！　だから、見逃してくれ！」
「あはは、面白いこと言うのね」
お月見山の、地下二階。
ごつごつとした岩肌、でこぼこの地面、岩からしみ出した水。
自然が生み出したというべき美しき光景に、一つの色を付けくわえる。
すべての調和を無に帰すその色の名前は、狂気。
「化石なんてあなたを倒した後で貰えばいいじゃない。そんなことが交渉材料になるとでも思っているの？」
「いやだ、助けてくれ。どうしてこんな……」
「どうして？　ふふっ」
妖艶に笑う。
洞窟が持つわずかな光量が、床で乱反射した光が、私の顔を下から照らす。
「私が私で、あなたがロケット団だから。それ以上に理由が必要かしら？」
「あああああああ！」
断末魔が一つ。
お月見山という閉塞的な空間にこだました。
そんな悲鳴を聞き流し、私は上を目指した。
光が差している。
出口だ。
「くぅー！　また一つ正義を執行してしまった」
お月見山を抜けた先、眼前には草原が一面に広がっている。
久々の空の下、私はそんなことを一人呟いた。
ニビで見かけたロケット団達は、町できいた話通りお月見山にいた。
そいつらを片っ端からは千切っては投げ、全員戦闘不能にしておいた。

因みに化石は奪ってない。それをしたらただの泥棒と同じだ。
「それにしても、化石の復元……ね……」
あいつらの話の中に、興味深いものがあった。
それは化石から、古代のポケモンを復元するというものだった。
もし、もしもだ。
もし本当に、そんな技術があるのだとしたら。
(それは、死者の蘇生と幾ばくの違いがあるのだろう?)
嫌になる。
早く私に、現実を突きつけてくれればいい。
そうすれば、負うダメージも最小限で済むだろう。
だがしかし、世界は私に可能性ばかりを見せつける。
(期待したって、縋ったって、どうせ裏切られる。願えば願うほど、思えば思うほど、私は深く傷つくだろうに。それなのに何故)
私は、諦めきれないんだろう。
理性が私を引き留めようとする。
今度こそ本当に、壊れてしまうと。
だけど、それでも私は、止まることができない。
壊れかけのブレーキでは、私を制御しきれない。
「コニー」
そんな言葉が零れ落ちた。
(待ってて。すぐに、君を取り返して見せるから)
不可能だと言いながら。
それでも私は願い続ける。
空を仰いだ。
雲一つない青空が、一面に広がっていた。
それは空っぽの私をあざ笑うようで。
私は少しだけ、空しくなった。
＊
「なにこれ、プール?」
私はハナダシティのジムに来ていた。
いや、来たはずだった。

しかし、私の目の前にあるのは、どう見てもバトルフィールドではなくプールだった。
私はジムに行こうとすると別の施設に入ってしまう、そんな呪いでもかかっているのか？
「あなたは挑戦者？」
「はい？」
どうしたものかと、一度外に出て確認しなおそうと思った時だった。
プールサイドの反対側から彼女は現れた。
オレンジ色の髪をサイドテールに結び、競泳着を纏った彼女。
それはまさしく、水泳選手だった。
「すみません、間違えました」
「あ！　ちょっ！」
とてとてーと、建物から出る。
んん？
やっぱりこの建物がジムだと思ったんだけどな。
構造的にニビやトキワにあるのと同じ感じだし。
此は如何に。
そう思っていると、彼女も建物から出てきた。
「ちょっとあんた、ジムに挑戦しに来たんじゃないの？」
「え、そうですけど」
私は眉をひそめる。
やっぱりここがジムであってるのか？
どう考えても水泳場なんだが。
「私がこのハナダシティのジムリーダー。お転婆人魚のカスミよ！」
「うわぁ、お転婆人魚って……」
「声に出して引くな！」
おっと失礼。
というより、ジムリーダー？
「ここはジムであってるの？」
そう、結局大事なのはそこだけだ。

私は小首をかしげて質問する。
カスミはすこし得意げに頷いた。
「そう、これこそがハナダジム。水上が舞台という画期的なバトルフィールドよ！」
「いや、絶対プールが目的でしょ」
飛び込み台とかあったし、塩素の匂いがしたし。
絶対私利私欲に従って生きてるよこの人。
タケシと違って気が合わなさそうだ。
「というより、自分のフィールドで弱者をいたぶるってことでしょ？　ないわー」
「あんたね……」
タケシは正々堂々と戦っていたぞ！
タケシを見習え！
「いいわ、私に挑むつもりだったんでしょ？　バッジはいくつ？　すぐに相手してあげるわ」
「一個、手持ちは二匹。ついでに水を抜いといてくれれば……」
「抜かない！」
ちぇ。
しかし参ったな。
これだとルクシオの足場がない。
どうやって戦わせればいいのやら。
（ん？　逆か？）
この後の試合展開を予想しながら私とカスミは、再びジムに入って行った。
「あなたはポケモンを捕まえて育てるとき、何を考えてる？」
ジムの中を歩きながら、向こう側からカスミが話しかけてくる。
何を考えてか……、難しいな。
そもそも私の主目的はバトルであって育成じゃない。
ならば勝つことを考えて育てているのか？
いや、育っていないポケモンで勝つ手段を模索することも好きだ。
何を考えて、ポケモンを育てるかねぇ。

私がうんうん唸っている一方で、カスミは言葉を続ける。
「私のポリシーはね、水タイプのポケモンで攻めて攻めて、攻めまくることよ！」
「育てるときの考えじゃないッ！」
「うるさいッ！　カモン、マイステディ！」
「あの口を黙らせて！　コニー！」
カスミがヒトデマンを、私はルクシオを繰り出す。
ん？　ヒトデマン？
「ヒトデマン？　なんでスターミーじゃないの？」
「あんたバッジを一つしか持ってないんでしょ？　手加減ってやつよ」
ああ、そういえばタケシもそんなことを言ってたな。
バッジの個数に応じて調整するとかなんとか。
うーん、じゃあこのジム戦はあんまり期待できないかな。
「コニー、放電」
私の意図を正しく理解したコニーが、プールの水に向かって電気を放つ。
純水ならばともかく、塩素という不純物の混じった水ならば電気をよく通す。
そしてヒトデマンはプールにいる。
（回避しようとするのならば、空中に逃げなければいけないけど。どうする？　ジムリーダーさん）
空中に逃げるのならば、そこを狙い打てばいい。
だがもし、逃げないというのならば。
「ヒトちゃん！　ミラータイプ！」
プールに電気が走る。
水面がバチバチと光輝いたが、ヒトデマンは大したダメージを負っていなかった。
「水タイプ使いが電気や草の対策をしていないとでも？　ヒトちゃん！　お返しよ！」
ヒトデマンが１０万ボルトを放つ。

まるで電気タイプが放ったかのように、その攻撃は鋭く重い。
否、まるでではなく、ヒトデマンは今電気タイプになっている。
カスミが先ほど指示したミラータイプ。
これは相手と同じタイプになるという効果がある。
ルクシオのタイプは電気タイプ。
電気の技は電気タイプに余り効かない。
だからこそ、放電をヒトデマンは耐え切った。
ならばなぜ、カスミは電気タイプに向かって１０万ボルトを放ったのか。
簡単だ、こちらを侮っている。
もし私がミラータイプという技を知らなかったら？
放電を受けてコロっとしているヒトデマン。
水タイプらしからぬ威力の電気技。
吸収され、倍返しにされたのかと混乱するだろう。
つまりこれは、盤外戦術だ。
「あまり人を、見くびらないで欲しいわね」
小さくそう呟いた。
反対サイドのカスミには到底聞こえないだろう。
ルクシオに目配せを行う。
これだけわかりやすい状況、わざわざ指示をする必要もない。
「どう？　私のヒトデマンの一撃は」
「そうね。よく考えられていると思うわ。……けれど」
１０万ボルトの煙が晴れる。
黒煙を切り裂いて、ルクシオが走り出す。
その身に、膨大な電気を纏って。
「それじゃあまだ足りない」
「！　ヒトちゃん！」
本物を見せてやれ。
ルクシオが、空中から極光の一撃を振り下ろす。
その一撃は、電気タイプのヒトデマンを、ただの一撃のもと葬り去った。

「まさか、どんな火力しているのよ……」
「はぁ、ジムリーダーっていうのは自分の専門タイプ以外にはからっきしなのね」
タケシもカスミも。
自分の専門科目ならばいい線行っているのに、それを他のタイプに向けようとはしない。
もったいない。
「コニーがただ何もせず１０万ボルトを受けたと思う？　私が面食らって動けずにいると思う？」
カスミはなかなかヒトデマンをボールに戻さない。
やれやれ。
盤外戦術を使おうとしている人が、そう簡単にこっちに主導権を渡しちゃダメでしょうに。
「見くびらないで欲しいわね。コニーには受ける直前に充電を指示してあった」
「そんなっ！　それじゃあヒトちゃんの１０万ボルトは！」
「うん。利用させてもらった」
カスミは倍返しを演出した。
ミラータイプという技を用いることで。
私は、実際に倍返しを行った。
充電という技を駆使することで。
同じ戦略、同じ戦術。
だがしかし、練度は大違いだ。
これが本物だ。
「ふふっ、なかなかやるじゃない。でも、今度はそう簡単にはやられないわよ。　お願い！　スタちゃん！」
カスミがヒトデマンをボールに戻す。
続いて繰り出されたポケモンはスターミー。
「スタちゃん！　サイコキネシス！」
「コニー」
スターミーからこちらに向かって、空間が歪む。

それをかき消せと言わんばかりに、コニーに指示を出す。
コニーが吼える。
所詮念なんて不確かな存在だ。
それを超える気迫と覚悟で臨めば無も同然。
「くっ！　スタちゃんもう一回！」
「コニー」
同じことを繰り返す。
スターミーのサイコキネシスを、コニーが叩き伏せる。
だめだめ、そんなのじゃ。
むしろ、手遅れになるよ？
「くっ、本当は命中不安で使いたくなかったけど仕方ない。ハイドロポンプよ！」
そうして放たれたのは、水タイプでも屈指の威力を持つハイドロポンプ。
けれどその水圧は、ひどく弱弱しいものだった。
そんな貧弱な水流を前に、私は指示を出す。
「切り捨てて」
ルクシオが帯電し、水流に向かて飛び込む。
水流がルクシオを飲み込むより早く、纏う雷が水を分解していく。
そうして水源のスターミーの眼前まで迫り。
ルクシオの一撃がスターミーを切り裂いた。
「そんな、ハイドロポンプの威力はこんなものじゃ……」
戦闘不能になったスターミーを見て、カスミがそう呟いた。
プールに飛び込む形になったルクシオは、犬掻きで遊んでいる。
まあ少しくらい許してあげよう。
たまには息抜きも必要だ。
「あんた、何をしたの？」
「ん？」
ルクシオを保護者の様に見つめていると、カスミがそう問いかけてきた。
「スタちゃんのハイドロポンプは、あんなものじゃない。何かしたで

しょ」
「さぁ？　スターミーの鍛え方が足りなかったんじゃない？」
「ふざけないで！　私はジムリーダーよ？　自分のポケモンの調子くらい分かる！」
うーん、この後タマゴについて聞こうと思ったんだけどなぁ。
タケシさんや。
どうにも私はこの人の事を信用できないよ。
放置していい？
「……コニーが、ただ吠えているだけどと思いましたか？」
「……他に、何をしたっていうのよ」
やっぱり、そういうことなんだろう。
カスミはこの勝負中、殆どの場面で技を指示していた。
唯一不明瞭だった技はミラータイプを使った後の１０万ボルトだけ。
指示を出すことのデメリットすら把握していない。
（前二人と比べれば、決定的に劣る）
決めた。
カスミに頼るのはやめよう。
「コニーがしていたのは吠えるではなく、バークアウト。相手の特殊攻撃を弱める追加効果を持った技」
悪タイプの特殊技。
悪の波動、ナイトバーストなどより威力が劣る分、優秀な追加効果を持った技だ。
サイコキネシスを打ち消すと同時に、徐々にスターミーの火力を奪っていっていた。
それに気付けないから、あんな痴態を晒すことになる。
「というわけで、ジムバッジはよ」
私は手を出す。
カスミは渋々と言った様子でバッジを渡した。
水色に煌めく、ブルーバッジ。
水滴を模した形をしている。

「ん、サンキュね」
「待ちなさい、これも」
カスミはそう言って、技マシンをくれる。
なんだ？　ジムリーダーは挑戦者に技マシンを配るという決まりでもあるのか？
まあくれるというなら貰っておこう。
「ん、またね。退屈しのぎにはなったよ、ハナダのお転婆人魚さん」
背中に射殺すような視線を感じる。
けれどそれじゃあ足りない。
気迫だけじゃあ、私には届かない。
（ま、せいぜい強くなって私を楽しませてよ）
私は次の街へ向けて、旅立ち始めた。

四話　言わせねーよ

「どうすっかなー」
人間には、大小様々な苦悩が付きまとう。
それは死への恐怖であったり、あるいは平凡な毎日であったり、実に種々雑多だ。
しかし、それらには一つだけ共通する点がある。
それは、根源が分からないということだ。
死んだ先に何があるのか分からないから死に苦しみ、何を為すでもない毎日に意味を見いだせず生に悩む。
私が抱えているのも、それと似たような問題だ。
そう。
「このタマゴ、どうすればいいんだよぅ……」
私の両腕に抱えられたのは水玉模様の卵。
ニビシティでタケシから譲り受けたものだ。
だがしかし、歴史上ポケモンが卵から孵ったという例は見かけない。
もしそれを発見できれば、ポケモン博士を名乗ることができるほどの偉業だろう。
前例がない道は、自ら開拓しなければいけない。
だがしかし、私は今、そんなことに割いてる時間なんてないんだ。
できるならパパっとジムバッジを集めてしまいたい。
「ポケモンマニアと名高いマサキを頼ろうか。いやでもなぁ、面倒ごとになる気がしてならないし……」
マニアにとってポケモンのタマゴなんて喉から手が出るほどの代物だろう。
それをポンと目の前に出されたら？
うん、嫌な未来しか予想できない。
「仕方がない、ボックスの預かりシステムを使うか？」
私がそう呟くと、タマゴが揺れ動いた。
これなんだよなぁ。

「はぁ、もっと無機物っぽかったら情が湧くこともなかったのになぁ」
仕方がない、もう少しだけ一緒に連れて歩くか。
そう決めた時だった。
卵がむくむくと大きくなった。
「え？　タマゴって大きくなるもんだっけ？」
私が戸惑っているのを知ってか知らずか、タマゴはさらに大きくなっていく。
中から音が聞こえてくる。
「え、やば。私新生児の扱いとか知らないんだけど……どうしよ!?」
どこに持ち込もうか悩んでいると、タマゴにひびが入り始めた。
え、急に成長し過ぎじゃない？
え？　え？
「ルッリィ！」
殻を破り、中から現れたのは真ん丸のポケモン。
見たことがないポケモンだ。
図鑑に載ってたりするのかな？
筐体を取り出し、確認する。
「アンノウンデータ……未発見ポケモンなんだ」
真ん丸のポケモンは、私の方をじっと見つめている。
そっか、この子にとっての親は私なんだ。
「そうだよね、名前がないと困るもんね」
その特徴を調べる。
鼠のような丸い耳、バランスボールのようなものに繋がれたジグザグのしっぽ。
そして何より、その瑠璃色の体。
「じゃあ、瑠璃色だからあなたの名前はルリちゃ……」
待て。
本当にそれでいいのか？
それは例えば、人間の新生児に対して「ほっぺたが赤いから赤ちゃん！」というようなものではないか？
その子は年をとっても赤ちゃんと呼ばれ続けるのか？

それはあんまりにもあんまりだ。
「じゃあ、そのジグザグなしっぽと合わせてルリリ！　どうかな？」
「ルッリィ！」
母さん。
私にも子供ができました。
＊
「あ、もしもしタケシ？」
『ああ、メアか。ハナダからの連絡と聞いて誰かと思ったぞ。カスミとは会えたか？』
私はセンターに戻り、ニビジムに電話を掛けた。
目的はタケシに報告するためだ。
「カスミねぇ、あれは駄目ね。トレーナーとしては優秀かもしれないけれどジムリーダーを名乗るには経験が足りなすぎるわ」
『そ、そうか』
タケシの顔が引きつった気がする。
前から気になってるんだけどなんでその糸目でそんなに感情豊かなの？
「まあそんな話はどうでもいいんだよ」
『そんな話!?』
「卵孵ったよー」
『孵化したのか!?』
あっはっは。
こいつ感情豊かで面白いな。
『もしやその腕に抱えられているポケモンが？』
「うん。こう、パカーってなってパーンだった」
『すまない、日本語で話してくれ』
失礼な。
擬音語だって立派な日本語だ。
日本独特の感性から生み出されるそれは、むしろ日本語を代表すると言って相違ない。
『しかし不思議だな。俺の手元にいた時は成長の兆しすらなかったと

いうのに』
「嫌われてたんだね」
『結構傷つくからもっとマイルドに表現してくれ』
見よ、この愛くるしい生き物を。
そりゃタケシの手元になんか生まれたくないわな。
「ッ！」
『メア？　どうかしたか？』
「……ううん、なんでもない」
何でもなくなんかない。
右腕の傷跡が、ひどく傷んだ。
果たして私に、このポケモンを抱く権利はあるのだろうか。
私と一緒にいて、この子は幸せになれるのだろうか。
『そうか？　あまり無理するんじゃないぞ』
「お互いね」
『確かに』
タケシにはサカキがロケット団と関わりがあるということを仄めかしている。
実は結構危ない橋を渡らせていたりするが……タケシなら大丈夫だろ。
なんか私の直感がこいつはただ物じゃないって訴えてるし。
『メア、君はタマゴからポケモンが孵ったことを、どれだけ知らせるつもりだい？』
タケシが少し、真剣なトーンで聞いてきた。
ああ、やっぱりタケシはポケモンの事を考えている。
歴史上、ポケモンを孵化したという記録はない。
それを成し遂げたとなれば、それだけで歴史に名を遺すほどの快挙だ。
その名誉欲しさに、私がこの子を蔑ろにする。
そんな未来を危惧しているのだろう。
「大丈夫、誰にも言うつもりはないよ。この子をさらし者にするなんてとんでもない。タケシには、感謝とかお礼とか、いろんな理由が重

なったから話しただけだよ」
『……そうか。聞くまでもなかったな。君はそういうトレーナーだ』
タケシはほっとしたような表情を見せた。
その表情に、私は少しだけ心苦しくなった。
（私がこの事を公にしようとしないのは、この子のため？　それとも、私のため？）
私は国際的な指名手配犯だ。
ここで名乗り出ようものなら、あっという間につかまるだろう。
だからこそ、私は思う。
本当はわが身が一番かわいいからなんじゃないかと。
「さ、そんな感じだから。また近いうちに連絡を入れるよ。またね」
これ以上考えていると、心が飲み込まれそうだった。
そうなる前に通信だけでも切ってしまおう。
そう思い、連絡を切ろうとした時だった。
『ああメア。今ハナダシティにいるんだよな』
「え？　ええ。それが？」
思い出したように、タケシがそう切り出した。
何か問題があるんだろうか。
『実はヤマブキシティでロケット団が活動しているという情報が得られた。どうするかは任せるが、危ないことはしないでくれ』
「へぇ、分かった、とだけ言っておくわ」
『……安全を優先するんだぞ？』
分かった分かった。
あんたの目に私はどう映ってるんだよ。
戦闘狂か何かか？
失礼な、ただの正義の味方だっていうの。
「じゃ、今度こそ切るね。ばいばい」
『ああ、またな』
そうして私は連絡を切った。
私はしばらくその場に立っていた。
柳のように、ただ静かに。

少し経って、私は行動を開始した。
「へぇ、ロケット団が活動している町ね。随分不愉快なことしてくれるじゃない」
ちゃっちゃとジム巡りをするつもりだったが作戦変更だ。
ヤマブキにいるっていうロケット団、全員捻りつぶしてやる。
＊
「ダメダメ！　ここから先は立ち入り禁止なんだ！」
「どうしても……ですか？」
「ルリィ……」
私はハナダを南下し、ヤマブキとのゲートに来ていた。
想定外だったのは警備員がヤマブキ入りを認めてくれなかったことだ。
正攻法でダメなら脱法で入り込むまでよ。
腕にルリリを抱え、二人で上目遣いにねだる。
「う、だ、ダメだ！」
「ひっぐ、おばあちゃんに、おばあちゃんに会いたいだけなのに……どうしてそんな意地悪するんですか」
私は顔を隠し、肩を震わせてそういう。
私の涙はとうに枯れてしまった。
ウソ泣きなんて器用な芸当はできない。
だが、私には頼りになる味方がいる。
「ル、ルリィ」
ルリリは別だ。
このポケモン、嘘泣きという技をつかえた。
というわけでルリリに泣かせ、私はそれっぽく合わせる。
人間は類推しようとする生き物だし、きっと私も泣いているように見えるに違いない。
「わ、分かった！　特別に許してあげるから、ね？　泣き止んで」
「……本当？」
両手で顔を拭ってから顔を上げる。
その際、ルリリから涙を分けてもらうことでさも涙を拭ったかのよ

うな跡を残す。
「本当だとも！　さぁ、早く行きなさい」
「ありがとう！　おじさん！」
ひゃっはー。
この世には唯一不変の真理っていうものがあるんだよ。
『かわいいは正義』、かわいいの前にはすべてが無力なのだ。
後ろでおじさんがおじさんって言われたことにショックを受けているが知ったことじゃない。
というより、なんか喜んでないか？
まあいい、放っておこう。
ゲートをくぐる。
そこに立ち並ぶは天を擦る楼閣。
カントーで最も発展した都市。
「ここが、ヤマブキシティ……」
私はここまでやってきた。

五話　未来視

ヤマブキシティにやってきた私は、先にジムを攻略することにした。
ロケット団と交戦したのち、万一敗れようものなら永久にジムに挑戦する機会がなくなるかもしれない。
そしてそういった憂慮は、大体肝心なところで足を引っ張る。
思い残しがないように生きよう。
「行き止まりなんだけど」
ジムに入った私を待ち受けていたのは、四方を壁に囲まれた空間だった。
また入る建物を間違えたか？
隣に似たような建物あったけどあっちは道場っぽかったし、こっちであってると思うんだよな。
「ということは、あの床がキーになってくるのかな」
私はその床に踏み込んだ。
視界がぐにゃりと歪んだかと思うと、別の部屋に飛ばされていた。
（か、科学の力ってスゲー）
そんな感想を抱きながら、ジムにいるトレーナーを攻略していく。
さすがは大都会ヤマブキ、雇われのトレーナーも豊富だ。
誰も彼もがエスパータイプを使っていたからここはきっとエスパータイプのジムなんだろう。
「カントーのジムはスーちゃんに厳しい」
思い返せばいつだってそうだ。
基本的に地面が付属する岩タイプ使いのタケシ。
氷技を大体使える上にエスパータイプの技も使える水のエキスパートカスミ。
そしてサイキッカーの集まるジム。
耐性面でも攻撃面でも毒タイプに厳しい相手ばかりだ。
「お？」
そんなことを考えながらテレポートを繰り返すと、少し変わった部

屋にたどり着いた。
　ようやく最奥部か。
「ようこそ、ヤマブキジムへ。どうだった？　私のジムは」
「うーん、めんどくさかった」
　正直ギミックとかよりも強いトレーナーを配置してほしい。
　それだけで私は満足だ。
「そう。ところであなたに質問したいことがあるのだけれど、いいかしら？」
「答えるかは分かんないけどね」
　深い意図があったわけではない。
　ただ、それっぽく返しただけだ。
　だから、そんな質問が来るなんて予想してなかったんだ。
「……あなたは、本当にこの世界の人間？」
　背筋が凍り付いた。
　そんな気がした。
　いつの日か私も疑問に思ったことだ。
（どうしてみんな、こんな狂った世界で生きて行けるのか）
　逆説的に言えば、この世界に生きる人間ならば、その異常を受け入れることができるのだろう。
　だが、私はそうならなかった。
　異常を異常と認識できたのは、私自身が異分子だったからなのではないか。
　そんな疑問を抱いたことが確かにあった。
　例えば、本来ならば私はこの世界に存在するはずがない人間だった。
　私がいない世界で、私のいない物語が展開されるはずだった。
　世界のどこかに主人公が居て、その人を中心に物語が進行していく、そんな世界であったのならば？
　マサラの人間が町を離れることができないことも、あの日になるまでの私がマサラ人であった理由も納得できる。
　だがしかし、そんなこと、あるはずがないのだ。

現に私はこの世界に存在している。
唐突に『正史においては、お前は存在しない筈の人間だ』と言われて、受け入れられるだろうか。
答えは否だ。
人はその正史というものを知ることができない。
検証することができない。
だからこそ、そんな思考実験は戯れ事と一蹴される。
「……どうしてそう思ったのか、聞いてもいいかしら？」
「質問をしているのは私なのだけれどね、敢えて答えてあげるわ。私には、未来が視える」
「ッ!?」
ジムリーダーはベルトからボールを外すと、それを空中に浮かせた。
どこかからエスパー技でも使っている。
そう断定するのが妥当だが、続く彼女の言葉がそれを許さない。
「幼い頃、手に持ったスプーンがひとりでに曲がった。それ以来、私自身がエスパー少女。このジムに来る挑戦者も、予め私は知っている」
「それ、ズルくない？」
つまり、挑戦者がどれだけ徹底した対策を練って挑んでも、どういう作戦で来るのかがバレているということだ。
手持ちも、持ち物も、技構成も、ギミックも。
すべてを織り込み済みの状態で試合が展開される。
そんなのチーターや！
「ズル、確かにズルかもしれないわね。まあ、そこはいいのよ。あなたの質問とは関係ないわ。私には未来が視える、なのにあなたに関する未来は一切視えない。だからこそ聞くわ。あなたは、本当にこの世界の人間？」
「……」
私は押し黙った。
否、黙るしかなかった。
今まで自分だけが感じていた違和感。

それを他人から突き付けられたということはつまり、他から見ても私が異物に見えるということだ。
「さぁ、どうかしらね。私はそれに対する答えを有していない。それだけは確かよ」
「……なるほどね」
さてと、それなら私も質問をさせてもらおうか。
「私も聞きたいことがあるわ。この町はロケット団が好き勝手していると聞いたわ。あなたほどの実力者が、どうして何もしないの？」
もし本当に、彼女が未来をみえるというのならば。
この町に起きていることを知ることも容易であろう。
それなのに、何故何もせずに放置しているのか。
「今はまだ、その時ではないということよ」
「どういうこと？」
「言葉通りよ。私が出向いた場合、多くのものが刑罰から逃れることになる。だからその時を待つ。虎視眈々と、盤面をひっくり返す一瞬を」
「……それは未来視によるもの？」
「ええ」
彼女自身が出向くよりも適したトレーナーがいるのか。
それは意外だったな。
私の可能性……はないな。
私の事は視えないと言っていた。
私以外の誰かが、ロケット団を倒す。
そう考えるのが妥当だろう。
「あなたが待っているのは、一体誰の事なの？」
四天王か、あるいは伝説のポケモンか。
一体このヤマブキに何が起きるのか気になり、そう問いかけた。
「分かっているのは容姿と出身だけ。少し先の未来、マサラタウンの少年が成し遂げるわ」
「マサラ……？」
どういうことだ。

マサラから外に出ている人間が、他にもいる？
いや、確かに私と父はマサラを出ているが、それ以外でマサラから旅立つ……？
（いる。その可能性がある人物が）
少し先の未来、少年によるものだと言っていた。
その可能性に当たりそうな人物を、私は二人ほど知っている。
まだ私が七歳だった頃に、そんなことをやらかそうとした二人組の事を。
「ちなみに、容姿はどんなかんじなの？」
「赤い帽子に茶色い髪、赤い服に黒のシャツ、リストバンドにジーパン」
「レッド……」
ポツリと、私は呟いた。
ジムリーダーは少し眉をひそめて、私に問いかける。
「知り合いかしら？」
「……ううん、私が一方的に知っているだけ」
レッドの知っている私は、マサラタウンのメアリーは死んだ。
ここに居るのは、トキワシティのメアだ。
だから、知り合いじゃない。
そもそもこの縁は、私が一方的に切り捨てたんだ。
いまさらどんな顔をして、レッドの前に現れろっていうんだ。
きっと私が、彼の前に現れることは無い。
だけど、今だけは。
「旅に、出てくれたんだね……っ」
枯れたと思っていた涙。
擦り切れたと思っていた心。
けれど、残っていた。
ずっと、心残りだった。
置いて来てしまった弟分の事が。
彼もまた狂気に囚われることになるのか、それとも狂気に押しつぶされることになるのか。

それを考えない日は無かった。
だけど、もうその心配はなさそうだ。
（私が居なくても、立派に育ったんだね）
涙を拭う。
こんなに感情的になるのは、いつ以来だろう。
心を静める方法が分からない。
私はそれを、学ばずに生きてきたから。
「勝負なんて空気じゃなくなったわね。なんなら後日に回してもいいけれど、どうする？」
「ううん。やろう、今から」
心臓をぎゅっと握りしめる。
ああ、ずっと淀んでいた心の正体は、これだったのか。
涙とともに雪がれ、むしろ今は晴れやかな気持ちだ。
「気を付けてね。ちょっと昂り過ぎて、手加減できないかもしれない」
「ふっ、私の防衛戦なのだけれどね。いいわ。バッジの数、手持ちの数は？」
「バッジは二個、手持ちは実質二匹」
「一匹は戦闘向きじゃないということかしら？」
「そんなところ」
戦闘向きじゃないどころか生後ゼロ日だ。
さすがにそれを実戦にポンと投げるような考えなしではない。
それは私の望むところではないし、相手にも失礼だ。
「分かったわ。それなら三十レベルフラットにしましょうか」
「オーケー。やろう」
ボールを構える。
相手も、私も。
「自己紹介もまだだったわね。私はヤマブキジム、リーダーナツメ」
「トキワのメア」
いざ、勝負。
私が繰り出したのはルクシオ。
ナツメはユンゲラーだった。

ナツメが手を振るった。
「ッ、コニー回避！」
先ほどまでルクシオがいたところに、鋭い刃の傷跡があった。
この技は、見たことがある。
ミュウツーが使っていた、サイコカッターだ。
（いつ指示を出した？　あらかじめ決めていた？　私が鋼タイプや悪タイプを繰り出していたら？）
思考が加速する。
世界から色が抜け落ち、不要な情報を切り捨て行く。
わずかに、空間に歪が生まれた。
「コニー！」
今度はそれだけでルクシオは回避する。
ナツメは少し驚いていた。
「あなた、見えているの？」
何か言っているが、聞こえない。
いや、聞こえてはいるんだろうが、脳が処理をしない。
私は深く、深く対戦にのめりこんでいく。
（ミュウツーの時はどうだった。あいつには何ができた？）
思考が幾重にも枝分かれする。
別の思考が別の思考を要求し、綺麗に噛み合っていく。
世界が引き延ばされていく。
（あいつはテレパシーが使えた。つまり、ナツメは念で指示を送っている？）
最初の一回以来、ナツメは腕を振るったり振るわなかったりしている。
おそらく、あれはブラフ。
本命は、テレパシー。
「コニー！　バクア！」
本当なら指示を出したくないが、そうも言ってられない。
技名を簡略化して指示を出す。
バクアはバークアウトの略だ。

誰にでも解ける暗号だが、相手の思考を一瞬でも奪えればそれでいい。
「くっ、ユンゲラー、弾き返して」
私にエスパーの知識なんてない。
けれどもし、テレパシーなんてものがあるのだとすれば、きっと思考を読むか、または送るかのどちらかだろう。
そこに急激に爆音が流れ込むと？
思考を埋め尽くすのは、うるさいという感想だけだろう。
次いで浮かぶのは、どうやって対処するか。
それだけの時間が稼げれば、どうにでもなる。
ナツメがユンゲラーにはじき返すように言うが、ルクシオの攻撃はそれよりも早い。
ユンゲラーの脆弱な体を、あっさりと噛み砕いた。
「やるわね。ユンゲラーが突破されたのなんていつ以来かしら」
ルクシオがこちらのサイドまで戻ってくる。
さあ、次のポケモンを繰り出せ。
「……すごい集中力ね。任せたわよ、フーディン！」
ナツメが繰り出したのは両手にスプーンを持った黄色い老体。
知能指数五千の超能力戦士だった。
ナツメがまた腕を振るう。
ブラフだ。
着地狩りあたりでも狙っているんだろう。
そういえば、フーディンにはもう一つ話があったな。
「コニー、怪電波」
狙った通りの効果が得られなくてもいい。
最悪技の効果だけでも十分だ。
そう考えた私の一撃は、思ったよりも強く響いた。
「フーディン!?」
フーディンがよろめく。
上手いこと行ったようだ。
フーディンは死ぬまで脳細胞が増え続ける。

そのため、脳の重さに筋力が追い付かなくなってしまう。
もともと筋肉を捨てた特殊アタッカーだ。
そうなるのも無理はない。
問題は、体まで超能力で動かすようになってしまったことだ。
超能力が何かは分からないが、波動関数で表される何かだろうと考えた。
確証はなかったが、バークアウトに対する対応から察するに、波が関係していることを類推するのはたやすい。
だから、私は指示した。
もっと複雑な波動を繰り出す技を。
怪電波はその名の通り、不思議な電波だ。
人間にとってのモスキート音のように、フーディンにとって不快なものに聞こえる可能性があると踏んだ。
予想は的中どころか、上回るものだった。
集中力が切れたのか、念能力に干渉されたのか。
体を制御する念を失ったフーディンは、その場に崩れ落ちた。
「噛み砕く」
フーディンもユンゲラーと同じように、その場に倒れ伏すこととなった。
＊
「あなた、本当に強いのね。いつか全力のメンバーでお相手願いたいわ」
「ええ、ぜひ」
ナツメがボールにポケモンを戻し、私に語り掛ける。
私もそれに応じる。
「私に勝った証、ゴールドバッジよ。受け取って」
「ありがとうございます」
渡されたのは、山吹色に輝くゴールドバッジ。
二重の円からなるそれは、やはり波動を表しているように見えた。
「それと、これも」
いつも通り、技マシンを貰う。

ナンバリングは四だった。
（いつも思うんだけどさ、技マシンって使うタイミングないよね）
それをくれた相手に言うのは失礼かと思い、黙っておく。
思いやりの心は大事だ。
「ナツメさん、一つ聞いてもいいですか？」
「どうぞ」
「先ほど、ロケット団を取り押さえるのは今じゃないと言いましたが、それは私が出向いても同じですか？」
私が聞きたいのはこれだ。
最初ナツメの話を聞いた時は薄情者だと思ったが、今は違う。
私が生きているのは今だが、これからの人が生きて行くのは未来なのだ。
ならば未来まで考慮したうえでの最適解、それを選びたい。
私がここでアクションを起こすのは、未来にどういう結果を及ぼすのか。
「……分からないわ。あなたが起こす行動が、未来にどういう結果をもたらすのか。こうして向き合って、未来は映るようになった。けれど、なんというかこれは……。そう、未来が枝分かれし過ぎている」
「普通は違うの？」
「……私が視てきた未来は、枝分かれすることもあったけれども、いつも一つの結果に収束していたわ。けれど、あなたの未来は……無限に広がっていく」
私はそれを黙って聞く。
「なら、その未来の中に、私がロケット団を取り逃す未来は含まれる？」
「ええ」
「レッドが対処した場合は？」
「予期せぬ出来事が起きない限り、確実よ」
「……そっか」
私がここで行動するのは、悪手なのか。
それなら、大人しくしておこう。

それよりも、レッドを支援する方に回った方がいいかもしれない。
「レッドがこの街に来るのはいつか分かる？」
「しばらく時間が掛かるわ。どうやら、後回しにするみたいだから」
「それもそうか」
どうしてレッドが立ち向かうのかは知らないが、カントーを巡らずにロケット団に向かうなど、狂気の沙汰も甚だにしろという感じだ。
敵は最大規模のマフィア。
いくら何でも非力の人間が、たった一人で壊滅させられるような相手じゃない。
それなら私も、地力をつける期間を設けよう。
「ありがとうナツメ。また近いうちに来るよ」
「またね、トキワのメア」
私はヤマブキシティを後にした。

緑の章　朽

チッ、イライラするぜ。
俺には幼馴染がいる。
騒がしく、無鉄砲で、屈託のない、そんなあいつが好きだった。
よく一緒に馬鹿をして、一緒に叱られて、責任を擦り付け合って。
あの頃は、楽しかったな。
だけど、いつからだったか。
あいつは無口になった。
笑わなくなった。
いつも辛そうな顔をするようになった。
いや、いつからかなんかじゃねえな。
理由は俺も分かっている。
メア姉の失踪だ。
メア姉は、俺とレッドの、姉貴分だ。
昔も、当然今でも。
そんなメア姉は、ある日俺たちの前から姿を消した。
後日伝えられたのは、メア姉が国際警察に逆らったという事実だった。
それからというもの、レッドと顔を合わせる機会が減っていった。
あいつの顔から、笑顔が消えて行った。
いつも、悲しそうにしていた。
俺だって、メア姉がいなくなって泣きたいくらい悲しいさ。
けど、ナナミ姉ちゃんがいる俺とは違い、あいつにとっては唯一の姉だったんだ。
俺が受けたショック以上のダメージを、あいつは負ったんだろう。
俺はあいつの傷を、どれだけ理解できてやれている？
俺はあいつの幼馴染としてここに立って居られているか？
俺はあいつに、何をしてやれる？
分からない。分からないことだらけだった。
ある日、おじいちゃんに呼び出されて研究所に向かった。

けれど、待てど暮らせどおじいちゃんは来なかった。
おじいちゃんを探しに行くか考え始めていると、おじいちゃんはついにやってきた。
幼馴染の、あいつを連れて。
元気か？　とは聞く気になれなかった。
久しぶりに見たあいつは、随分やつれていた。
とても元気には見えなかった。
だけど、あいつの瞳に、ちょっとした光が宿っていることに、俺は気付いた。
あいつはただちらっとこっちを見て、何も言わずにうつむいた。
思い出すだけでもイライラするぜ。
あんな奴に負けただなんて。
更に腹が立たしいのが、あいつに全戦全敗していることだ。
おじいちゃんの研究所でも、二十二番道路でも、ハナダシティでも。
俺はあいつに負けた。
目の前のトレーナーを倒す。
俺は弱くねえ。
弱くねえ筈だ。
だというのに、あいつにはただの一度も勝利できない。
くそっ、あとどれだけ、あとどれだけ研鑽を積めばあいつと渡り合える？
あいつのライバルだと、胸を張れる？
……教えてくれよ。
「ここが、クチバシティか」
そうこうしているうちにクチバまでやってきた。
この街でやることは大きく二つ。
一つはジムに挑む事、もう一つはサント・アンヌ号を見てみる事だ。
サント・アンヌ号は年に一度だけカントーに訪れる豪華客船。
折角タイミングがあったんだから、船内を見て回るぐらいしておきたい。
とはいえ、今日はもう日が沈む。

センターで一泊して、それからだな。
「そういえば、クチバの由来は夕焼けの色だったか」
どれくらい綺麗かは知らないがちょうどいい。
この鬱屈とした気分も、少しくらいは和らぐだろう。
町を南下し、クチバ港を目指す。
しばらくすると海岸に着いた。
「……綺麗だな」
陽射しが俺を照らす。
太陽が海に落ちていく様子は、とても幻想的だった。
とても眩しくて、暖かくて。
荒んだ心に、やわらかく降り注いだ。
一日の内の、たった少ししか見れないということに言い知れぬ寂寥感を覚えた。
（……戻るか）
気は紛れたが、心は少し曇ってしまった。
どれだけ眩しい光も、いずれは顔を隠す。
三年前に、経験済みだろう。
気づいてしまったら無視はできない。
だからその事実から目を背ける。
見たくない現実に蓋をして、悲しみを隠す。
この時、俺は忘れていたんだ。
日はいつか沈む。
だけど夜が過ぎれば、また昇る。
そんな、単純なことを。
視線が釘付けになる。
向こう岸のジムから出てきた彼女。
西日が強く、逆光だというのに。
長らくあっていなかったというのに。
その影を見て、俺は確信した。
「メア姉!?」
その人物がこちらを向く。

向こうからは俺の姿が、きちんと映っているはずだ。
俺は顔をメア姉に向けたまま、走り出した。
メア姉は、困ったなあという風に頬を掻いていた。
間違いない。
やっぱりメア姉だ。
まさかクチバシティにいたなんて。
（とにかく、あいつに連絡して……）
そう思ったが、連絡手段なんてなかった。
ポケギアもポケナビもC―ギアも、俺たちは持っていない。
（ピジョンにメールを持たせて送るか？　いや、ダメだな）
野生のポケモンと勘違いして倒される未来が視えた。
瀕死のまま放置されればたまったもんじゃない。
チィッ、あいつが来るまでこの町に留めておくか。
必死に走った。
多分メロスもセリヌンティウスもびっくりの走りをしたと思う。
だってマサラの人間だし。
メア姉は何もせずに、ただ突っ立っていた。
「はぁ、はぁ、メア姉……？」
「……大きくなったね」
懐かしい、声だった。
胸の奥が、熱くなった。
頭の中が真っ白になって、何も考えられなかった。
音が消え、世界が停止した。
メア姉が、俺の頭をわしゃわしゃと撫でた。
昔そうしてくれたように、やさしく、暖かく。
「グリーン、あなたはどうしてクチバにいるの？」
「あ、俺！　今ポケモン図鑑を埋めてるんだ！　おじいちゃんの頼み事で」
「……ポケモン図鑑？」
なんというか、色々懐かしくて、メア姉と話せるのがうれしくて。
俺は最近の出来事をメア姉に話したんだ。

途中で話が長くなることを察したメア姉が、センターに向かおうと言わなければ日が昇るまでジムの前で話していたかもしれない。
俺の長話を、文句の一つも言わずにメア姉は聞いてくれた。
「そう、色々なことがあったのね」
「うん、だけどまだまだだよ。この世界にはまだ、俺が知らないことがいっぱいあるんだ。俺はもっと、いろんなところを見て回りたい」
「……うん。グリーンはそれでいいと思うよ」
「俺はって……」
メア姉は違うの？
そう聞こうとして、口を閉じた。
メア姉の横顔は、どこかとても遠いところを見ていた。
未来を見ているのか、過去を振り返っているのか。
分からないけれど、とても遠いところを見ているようだった。
「……知ってるよね。私はさ、犯罪者なんだよ。この世界を楽しむ余裕なんてない。グリーンはどうする？　私を通報する？」
その時、俺は気付いた。
昔と変わらないメア姉の瞳に、知らない色が混ざっていることに。
悲しみとか、諦観とか、憂いだとか、信念だとか。
俺はメア姉の三年間を、何も知らない。
「……ぁ」
言葉が形にならなかった。
考えれば分かることだった。
安全な場所でのうのうと生きてきた俺と、常に危険と隣り合わせの場所でひっそりと過ごしてきただろうメア姉。
その間には、埋めることのできない海溝が開いていることに。
「ふふっ、変わんないね、グリーンは。気丈に振舞っているけど、人の事を思って共感して、悲しんで。本当に、優しい子だね」
メア姉は俺の頭をなでる。
俺が泣き顔を、隠せるように。
優しく、暖かく。
「心の痛みを、人一倍知っている。人の苦しみを、誰よりも分かってあ

げられる」
だからさ、と。
メア姉は続ける。
「その涙は、他の誰かのために取っておいてあげて？　私なんかに使っちゃ、もったいないよ」
そんなことはないと、否定したかった。
自分を卑下しないでくれと言いたかった。
だけど、そのどれもが、霧のように散っていった。
「……ほら、悲しいときはポケモンを頼りなさい」
「……ポケモン？」
「うん。ここまで来たのなら、持っているんでしょう？」
早く早くと、メア姉が急かす。
訳が分からなかったけど、言われるままにみんなを繰り出した。
マサラから一緒にいるリザード。
一番道路で仲間にしたピジョット。
二番道路から育ててきたラッタ。
二十四番道路で必死に捕まえたユンゲラー。
みんなが、俺を心配した顔をしてくれていた。
「あ……」
声が零れた。
みんなは俺を信頼してくれている。
信じて、慕って、俺について来てくれている。
俺はどうして、こいつらに頼ろうとしなかったんだ？
「ね？　辛いとき、苦しいとき、悲しいとき、寂しいとき。どんな時も彼らは一緒にいてくれる」
もちろん楽しいとき、嬉しいとき、幸せな時、喜ぶとき。
そういう時も彼らは分かち合ってくれると、メア姉は続ける。
「みんなはグリーンの事を分かってくれてるよ」
だから、全部分かち合えばいいんだよ。
そうメア姉が続ける。
（ああ、敵わないなあ）

メア姉には、敵わない。
改めて、そう感じた。
（だけど、いつの日か）
いつか、並んで歩けるようになろう。
俺一人だと、できないかもしれない。
途中で、挫けてしまうかもしれない。
でももう、俺は一人じゃない。
俺には、みんながいる。
＊
翌朝、目が覚めた。
センターの受付に行くと、ジョーイさんから手紙を渡された。
俺が来たら渡してほしいと、頼まれたらしい。
差出人は、メア姉だった。
まだやらなきゃいけないことがあるから、先に行く。
噛み砕いていえば、そんな内容だった。
ちょっとだけ寂しかったけど、でもいいんだ。
「これからは、自分の足で道を進んでいくんだ」
過保護のメア姉が、俺を置いて行った。
俺の成長を受け止め、認めてくれたっていうことだろう。
なら、今度も期待通り成長してみせよう。
＊
サント・アンヌ号。
その船長室の前で、俺とあいつは対峙していた。
いつからか、無口で無表情で不愛想になった、幼馴染のあいつ。
ただの一度の勝利も許されなかったあいつ。
だけど、今度は負けない。
俺は、俺のポケモンを。
俺のポケモンが信じる俺を信じる。
リザードの引っ掻くが、あいつのニドリーノを倒した。
あいつがニドリーノをボールに戻し、両手を上げた。
「勝った……のか？」

俺は、あいつに勝てたのか？
本当の、本当に？
笑わなくなったあいつが、悔しそうに苦笑いを浮かべる。
今度は負けないと、強い意志が瞳に宿っていた。
その表情には、前に見た翳りはなかった。
「は、はは」
敗者のあいつの前で喜ぶのはどうかと思った。
だけど今だけは。
少しくらい、喜んでもいいよな。
こぶしを握り締める。
それをじっと見つめる。
目頭が熱くなる。
口元が緩む。
大きく深呼吸し、レッドと向き直る。
そういえばこいつは、メア姉の事を知らないんじゃないかな。
幼馴染のよしみだ。
教えてやろう。
「レッド、そういえばなんだけどさ――」
＊
ターニングポイントという言葉がある。
人生の進路を変えるほどのイベントを表すそれは、時に人からもたらされることがある。
俺にとってのターニングポイントなんかがまさにそれだ。
メア姉にあって、励ましてもらわなければ、ポケモン達を頼ることを忘れたままであれば。
俺はずっと、レッドに勝てなかったかもしれない。
『――メア姉にあった』
俺が幼馴染に放った一言は、後にあいつを救うことになったらしいが、この時の俺には知る由もない事だった。

六話　氷壊

まだ日が昇る前。
グリーンに置手紙を書き記し、センターのジョーイさんに預け、クチバを発つ準備をする。
「まさかグリーンに会うとはなぁ」
正直予想外ではあった。
予想外であったが、まあ想定の範疇だった。
レッドが旅に出ているんだったらグリーンが出ていてもおかしくないというか。
しかしまあ旅に出た動機は、予想外だったな。
「ポケモン図鑑……ねぇ」
サカキに貰った黒い筐体を取り出す。
……似ている。
グリーンが持っていた物と。
（オーキドとサカキが裏で繋がっている？　いや、サカキはマサラの人間を嫌う発言をしていた。ここのラインはないと思う）
私と初めて会ったとき、サカキは『マサラの人間にしては上出来だ』と言っていた。
裏を返せば、典型的なマサラ人を見下しているということだ。
オーキドはマサラを代表する人間だ。
ここが繋がっている可能性は考えにくい。
（あれか、国際警察と同じ感じか）
サカキは国際警察の情報を掴めていた。
工作員がいて、情報を横流ししているというのが私の推測だった。
同様に、オーキド研究所にもスパイを紛れ込ませている。
そういったところだろう。
（あの子たちに、危険が及ばなければいいけれど）
オーキド博士は、すごく人質にしやすいポジションにいる。
私はオーキドに何の感慨もないが、グリーンが悲しむのは嫌だなとは感じる。

行動を起こしたいとは思うが、私にとってマサラは近寄りたくない場所でもある。
きっと父も、こういった理由でマサラに来なくなったのだろう。
（それにしてもポケモン図鑑、捕まえないと詳細が登録されないって……）
私の持っている図鑑には、そもそも生態系に関する情報は載っていない。
覚えるわざや特性、分類などは表示されるがそれだけだ。
ルリリの時のように、データベースにないポケモンは調べられないし、生態系の詳細も表示されない。
（私の持っているこれは三年前の代物だから当然だけど、新型の図鑑は気にくわないわね）
データを取るためだけにポケモンを捕獲する？
お前らにとってポケモンってなんだ？　研究材料か？
少なくとも、私がオーキドと和解する日は来ないだろう。
＊
「出てきて、ルリルリ」
「ルッリィ！」
つい先日タマゴから孵ったルリリ。
なんと既に二段階進化していた。
最初に進化してマリルになったときは驚いたよね。
マリルに進化前があるとは……。
現在確認されているたねポケモンには、全員進化前があるのだろうか。
また一つ、世界になぞが生まれてしまった。
さて、先ほど二段階進化したと言った。
そう、既にマリルリになっていた。
早くない？
ねえ？　早くない？
いいんだけどね。
というわけでマリルリに乗ってクチバ沖を横断する。

目指すはセキチクシティだ。
マリルリになると同時にニックネームをルリリからルリルリに変更した。
なかなか陽気な名前になった気がする。
ルリリって音はあざとすぎて似合わなかったからね、ナイス判断だと思うよ。
ちらっと隣の豪華客船に目をやる。
……ふぅ。
私には縁も所縁もない場所だ。
理由はどうあれ私はロケット団。
私にこの船は、眩しすぎる。
……マリルリは凄いスピードで海を走る。
ジェットスキーもびっくりだ。
ふはははー、スゴイぞー!! カッコいいぞー!!
テンション上げていこうぜ!
夜までにセキチクに着ければいいと思っていたのに、これなら昼までに到着してしまいそうだ!
さすがマリルリだ! 何ともないぜ!
＊
そんなこんなで、しばらく進んでいた時だった。
急に肌寒くなってきたなと思ったら、突然吹雪きだした。
「ええ!? 何? 寒ッ!!? ルリルリ、アクアリング」
水のベールで外気を遮断し、冷気を遮る。
この水のドームの中は私たちの体温で、ある程度保たれる。
これならまあ、問題ないかな。
「ギャーオ!!」
吹雪が勢いを増す。
その氷の風を引き裂いて、一匹のポケモンが現れた。
「……嘘でしょ?」
アクアリングが凍り付く。
流水の、アクアリングがだ。

流水を凍らせるのは至難の業だ。
そもそも熱というのは、分子と分子がぶつかった際に生じるエネルギーの漏れの事だ。
流水の場合、運動エネルギーがあるため凍らせることが難しい。
それを一瞬で凍り付かせた。
「……コニー」
内側からアクアリングだったモノを突き破る。
私たちがいた場所を除いて、海が凍り付いていた。
「ははっ」
こんなことができるポケモン、カントーには一体しかいない。
「れいとうポケモン……フリーザー」
絶望的な相手だというのに、私はそれに魅入られた。
「ギャーオ！」
「ッ！　コニー！」
ルクシオが私を咥えて戦線離脱する。
私が立っていた場所には、巨大な氷柱が立っていた。
「あらら、何か怒らせるようなことしたっけなー？」
そんな覚えないんだけどなー。
伝説の鳥ポケモンさんは怒髪天のようだ。
まあまあ棒が欲しい。
取り敢えずさっさとお暇しよう。
何を怒ってるのか知らないけど、多分縄張りを荒らしたとかそんなのじゃない？
それなら縄張りから出ちゃえば大丈夫でしょ。
と、思っていたのだが。
「くっ」
フリーザーがその両翼をはためかせると、私たちの前に氷壁が現れた。
別にこれくらいコニーなら壊せるけど、それはやらない。
「はーん、やろうっていうのか。私と」
折角平和的解決を試みてやったのに、お前はそういう態度をとるの

か。
いいよ、やってやろうじゃんか。
「伝説だからって、調子に乗ってんじゃねえ！」
まずはこの天候をどうにかしなければいけない。
視界が悪いだけならともかく、徐々に体温を奪われていくのはまずい。
この戦いだけならともかく、勝った後に遭難なんてシャレにならない。
「コニー、雨乞い」
荒れ狂う吹雪を、雨で塗り替える。
雨でも体温が奪われることに変わりはないが、雪よりましだ。
無理に晴状態にすれば、今度は足場がなくなるし、これが精一杯だ。
それに、短期決戦を仕掛けてしまえば問題ない。
「コニー、雷」
「ギャーオ！」
ルクシオが雷を振り下ろす。
フリーザーはそれを避けようとするが、無駄だ。
なあ伝説の鳥よ、知っているか？
当たるまで攻撃すれば、必中だ。
本来ならば、そんな無理は通らない。
エネルギーが絶対的に足りないからだ。
しかし今、空中には雨雲がある。
雹を多分に含んだ、膨大なエネルギーを持つ雲だ。
エネルギー面の問題が解消されれば、無限に打ち出せる。
無数に打ち付ける雷に、ついに避けることが叶わなくなったフリーザー。
もう一度雷を指示しようとして、気づいた。
「ああ、羽休め……」
羽休めは体力を回復する技だ。
この雨が晴れるまで粘り、雨が止んだ瞬間に仕掛けようということだろう。

「コニー、雷」
それを無視して雷を指示する。
フリーザーがまた羽休めで回復し、もう一度雷を打ち下ろす。
二度三度、そんなやり取りを繰り返した。
おそらく、もうすぐこの雨は上がるだろう。
だがしかし、その前に私の勝ちが決まる。
「ルリルリ、アクアブレイク」
凍り付いた海の床から、フリーザーの真下から、マリルリが飛び出した。
重い重い、一撃を以て。
フリーザーが弾け飛ぶ。
「ウッルァ！」
完璧な角度でボールを投げる。
ジョウト地方で作られているという、ぼんぐりを使った特殊なボール。
相手が重たいほど捕まえやすい、変わったボールの名は、ヘビーボールと言った。
ボールが輝き、フリーザーが飲み込まれる。
グラグラとボールが揺れる。
やがてカチリという音とともに、その捕獲を知らせた。
「ふふん、雉も鳴かずば撃たれまい……ってね」
今回の作戦はいたって簡単だ。
マリルリはずっと、海中に潜んでいた。
実は比熱比の関係から、空気中より海中の方が温かい。
だからマリルリには海中にいるように指示していた。
そう、戦闘中ずっと機会をうかがっていたのだ。
ルクシオに雷でフリーザーを殴らせている間に、水中のマリルリには腹太鼓を指示。
そうして極限までパワーのあがったマリルリに、必殺の一撃を放ってもらった。
その時点ではまだ雨は止んでおらず、水技の威力が上昇する。

これが伝説の鳥ポケモンを一撃で倒した秘密だった。
「はぁ、まったく。なんだってんだよー！」
昼までにセキチクに着けなかったらどうしてくれんだよ。
うがーっと空を見上げると、オスプレイのような飛行機が飛んでいた。
……なんとなく、中に乗っている人が分かる気がする。
「……メアか」
「チッ、何しにきやがったサカキ」
ロープを伝い、降りてきたのはロケット団のサカキだった。
「ふん、伝説の鳥ポケモンフリーザーを追っかけていたのだがな。吹き荒れる雪風の為に近寄れなくてな」
「へー、そりゃ残念だったね」
つまりあれか。
フリーザーがおこだったのは、こいつらがストーカー紛いの行為をしたからか。
そりゃ怒るよ。
「ああ、残念なことにこの周辺まで生体反応を確認できたのだが、唐突に消えてしまってな」
「ふーん。故障とは災難だったわね」
サカキはこう言いたいのだろう。
捕まえたフリーザーを渡せと。
冗談じゃない、お前なんかに渡して堪るか。
「ああ、とんだ災難だった。ところでメアよ、コニーの遺体を、誰が管理しているか知っているか？」
「あ？」
血管がぶちぎれる音を聞いた。
「お前ふざけるなよ、コニーの身に何かしてみろ。ただで済むと思うなよ？」
「フン、ならばどうすればいいか、お前なら分かるだろう？」
「お前……ッ」
サカキの胸倉につかみかかる。

勢いそのままに、氷上にたたきつける。
マウントを取り、吐き捨てる。
「ふざけるなッ！　どこまで人の尊厳を踏みにじれば気が済む！　コニーは、道具じゃない！」
「……もう一度だけ言う。どうすればいいか分かるな？」
白い息が零れる。
私は、無力だ。
いまだに理不尽に抗う術を見つけられずにいる。
「……フリーザー。捕獲しておきました」
「ご苦労だった」
サカキの横にボールを置き、その場を立ち去る。
悔しい。
何もできない自分が。
「ああ、そうだ。メアよ」
「……何？」
サカキに声を掛けられ向き直る。
私はこいつに、今は逆らえない。
「お前が必死に助けようとしているコニーという奴は、お前がそうまでするほどの価値がある人間だったのか？」
「何を……」
「どうしてお前はそこまであいつに肩入れする？　たかが数ヶ月ともに過ごしただけだろう？　しかもあいつはロケット団だぞ？　お前が嫌いな」
だからこそ、と。
サカキは言う。
「アイツに、それほどの価値があるのか？」
「……当り前よ」
「フッ、そうか。引き続き任務の方を頼むぞ」
この心もとない流氷の上で、去っていく飛行機を見ながらひとり思う。
（コニーさえいなければ……）

一人ならミュウツーを倒せた。
一人ならロケット団から逃げ出せていた。
一人ならこの理不尽に嘆くこともなかった。
一人なら、一人なら……。
（コニーは、私にとっての何なの？）
ずっと、支えだと思っていた。
だがしかし、今となっては私を縛り付ける鎖でしかない。
その足枷のせいで私は囚われ続けることになっている。
（……切り捨てるべき……？）
私は、何をしたいんだろう。
私は一人、寒空を仰いだ。

七話　Ｓｅｅ　Ｙｏｕ

「ごめんなさい。ここから先には行かせられない」
眼前の少年を、私は拒絶した。
自分の利得の為に、彼を傷つけた。
お面の向こうに見える少年の顔が、動揺に歪んだ。
「まさか、そんな……？」
状況が飲み込めていない少年を前に、私はボールを構える。
トレーナー同士、目と目があったらバトルは避けられない。
どうしようもなく楽しかった高揚感は、今は感じられなかった。
ただ空しく、ただ悲しく、ただ空虚だった。
「メア姉、なの？」
「……」
私がそれに答えることはなかった。
＊
私はジムバッジを七つ集めた。
毒使いのキョウを毒タイプのスーちゃんで圧倒し、炎使いのカツラをマリルリで封殺し、草使いのエリカを電気タイプのルクシオで撃破した。
七色の天の証を、魃の如く倒して得た。
ようやく、ようやくだ。
やっと私は、私を受け入れられる。
「……来たか、メアよ」
「はいはい、やってきましたよっと」
私は今、トキワジムの最奥に来ていた。
そこにはサカキがいて、私を待ち構えていた。
無造作にバッジの入った袋を投げつける。
サカキは中身を確認して満足そうに笑った。
「行くぞ」
腰を上げたサカキが、扉に手をかけそういう。
私は問う。

どこへ行くのかと。
サカキは嗤い、こう答えた。
「先へだ」
開けられた扉から日光が差し込みサカキを照らし、その影を私に落とした。
その後、私はサカキとともにヤマブキまでやってきた。
前に来たときはなかなか立ち入れなかったというのに、サカキと一緒というだけであっさり入り込めてしまった。
これが顔パスというやつか。
町の中をしばらく歩き、そこでようやく立ち止まった。
この建物がお目当てのものだということだろうか。
その建造物の全容を確認し、私は声を零した。
「シルフ、カンパニー」
それは世界最大手の企業。
モンスターボールをはじめとする商品を全世界に展開し、並ぶもの泣き富を築き上げる新進気鋭の大会社。
そこが、ロケット団の本拠地……だと？
「来い。コーニッシュが待っている」
サカキの言葉で、意識が引き戻された。
そうだ、まずはコーニッシュの無事が先だ。
先ほど同様に顔パスで入っていくサカキに黙ってついて行く。
（あっちもこっちも、ロケット団だらけ……）
ロケット団が乗っ取ったというより、もともとロケット団のものだった。
そう言われた方がしっくりくるほど異様な光景だった。
まるでゴキブリだな。
そんな感想を抱きながら私は後をついて行く。
階段を上り、ワープパネルを駆使し、カードキーを使用して先へ先へと進む。
もはや自分がどっちの方向に進んでいるのかもわからない。
角を曲がる度に目印になる跡をつけ、脱出だけはできるようにしな

がら追いかける。
やがて一つの部屋の前で、サカキが足を止めた。
「ここだ」
私はおぼつかない足取りで、その扉に手を掛けた。
息を飲むというのは、きっとこういう時のためにあるんだろう。
一呼吸おいて刮目し、私は扉を開けた。
ひんやりとした冷気が、私の足を攫って行った。
足を踏み入れれば、吐息が凍りつき、白い煙を巻き上げた。
「……コーニッシュ」
そこに在ったのは、見たことのない機械と、その中央に佇むコーニッシュだった。
死化粧を施された彼女は、以前と何も変わらないように見えた。
ともすれば、動き出すのではないか。
そんな錯覚すら私に抱かせた。
「エンバーミングと言ってな、要するに死体を綺麗に保管するための技術だ」
サカキがそういう。
「随分と気前がいいじゃん。どういった風の吹き回し？」
善意？　そんなはずがない。
私が知るサカキという男はもっと独善的で、恣意的で、傍若無人だった。
まかり間違っても気遣いなんてできる男ではない。
奇妙な違和感を抱き問いかける。
しかしその問い掛けは、サカキが答えることなく打ち切られた。
サカキのケータイが鳴り響く。
マナーのなってない野郎だ。
出ればいいという意味を込め、小さくうなずく。
「私だ。……侵入者だと？」
その言葉に、私はピンとくる。
ナツメが予知した未来が、ここまで来たのだと。
何度となく会いたいと願ったあの子。

レッドが来たのだと。
「分かった、こちらで対処しよう。持ち場に戻れ」
サカキが通信を切る。
私に向き直り、当然のように口にする。
「メア、命令だ。侵入者がこちらに来ている。ここに入り込ませるな」
「……それを私が聞くとでも？」
「ああ、お前は喜んで聞き入れる。きちんと状況を認識してみろ」
言われてこの部屋を確認する。
なんだ？
特に違和感はない気がするが……。
（違うッ、私は既に、経験している）
部屋に入ったときの冷気。
死体を保管するためだと思ったけれど、それ自体がカムフラージュだとすれば？
そこに気付くと同時に、コーニッシュの影を凝視する。
私の視線に気付いた影が、不気味に笑った。
「そのポケモンはポケモンタワーで捕獲したものだ。私の指示一つでコーニッシュを永遠に葬ることができる」
「サカキィィィ！」
私はサカキに詰め寄った。
襟を掴み上げ、声を荒げる。
「お前ッ！　どれだけ人の尊厳を愚弄すれば気が済む！」
「人の尊厳を愚弄する……だと？　それはお前も同じだろう」
サカキの言葉に、思考が止まりかける。
一瞬ののち意味を理解し、歯噛みする。
「死は生きとし生けるすべての命に与えられる、天からの贈り物だ。それを奪おうとするお前は尊厳を愚弄していないと言えるのか？」
「黙れ！　そんな解釈なんざ必要としていない！」
「正当性の名のもとに横暴を働くお前。力の下に支配を企てる私。何が違う？」
「黙れ黙れ黙れ！」

私は間違っていないんだ。
おかしいのは、世界の方。
今は謗られようと、罵られようと。
いつか私が正しかったと語られるんだ。
「正義を振り翳せばすべてが許されると思ったか？　断言しよう。世界は俺たちに、そんな優しさを見せない」
「だったら……だったらッ！　私がしてきたことは何だったんだよ！　全部無駄だったっていうのかよ！」
コーニッシュを助ける。
そのために、その為だけに生きてきたというのに。
それを望むこと自体が、間違いだったというのか？
そんなの、認められるわけが……ない。
「無駄にしたくなければ、さっさと侵入者を退治して来い。それですべてが片付く」
……結局、私がしてきたことは、サカキと同じだったのか？
あれだけ毛嫌いしていた奴と、私の本質は何も変わらなかったのか？
善意のつもりで行ったすべては、偽善でしかなかったのか？
パンクしそうになる思考を止めて、私は部屋を後にした。
私は、どうすればよかったんだ。
コーニッシュのためと思ったことは、コーニッシュを愚弄するものだった。
どうすれば、どうすれば。
問いかけても問いかけても、答えなんて出てこなかった。
＊
ゾロアのお面を取り出し、顔を隠す。
フード付きのローブを被り、かの少年がやってくる時を待ち伏せる。
一体どれほど時間が経っただろうか。
数分だったような気も、数十分だった気もする。
（私に、出来る事……）

何をなすべきなんだ。
分からない、解らない。
コーニッシュを掬うためにはあの子を止めなければいけない。
コーニッシュを救うためにはサカキを止めなければいけない。
どうすれば、どうすれば。
そんな思考を切り裂くように、扉が開かれた。
向こうから現れたのは、昔と変わらないあの子。
赤い帽子に茶色い髪、赤い服に黒のシャツ、リストバンドにジーパンの少年は。
マサラ出身の少年は。
私の弟分で、ナツメの予言に現れる英雄は。
名をレッドと言った。
「ごめんなさい。ここから先には行かせられない」
眼前の少年を、私は拒絶した。
自分の利得の為に、彼を傷つけた。
お面の向こうに見える少年の顔が、動揺に歪んだ。
「まさか、そんな……？」
状況が飲み込めていない少年を前に、私はボールを構える。
トレーナー同士、目と目があったらバトルは避けられない。
どうしようもなく楽しかった高揚感は、今は感じられなかった。
ただ空しく、ただ悲しく、ただ空虚だった。
「メア姉、なの？」
「……」
私がそれに答えることはなかった。

赤の章　墓

荒唐無稽な予想を切り捨てる。
（……あるわけない。メア姉が、ロケット団の手助けをしているなんて）
目の前に立つ女性を前にして、なぜメア姉だと思ったのか疑問を抱く。
仮面をしていて、全身を隠すローブを身にまとっていて、似ていると判断できるポイントなんて声くらいだ。
第一、俺の知るメア姉はもっと優しいオーラを持っていた。
持っていた……はずだ。
目の前にいるのは、似て非なる存在に違いない。
（そう、メア姉は正義の味方なんだ）
今も鮮明に思い返される、俺の犯した罪。
鮮血の赤が視界を奪い、血生臭い鉄の匂いが嗅覚をくすぐる。
誰かのためならば自分を犠牲にすることも厭わない。
そんなメア姉が、ロケット団なんかに手を貸すはずがなかった。
＊
最初にロケット団に出会ったのは、オツキミ山でのことだった。
珍しいポケモンだというピッピを、集団で追い詰めていた。
ピッピの苦しそうな顔を見ると居ても立っても居られず、彼らに戦いを挑んだ。
決死の特攻の末、辛くも勝利を掴んだ。
ピッピの幸せそうな顔を見て、心から良かったと思った。
次の遭遇は、ハナダシティだった。
一人の民家の男性が、家中を荒らされた挙句、大切な技マシンまで奪われたと嘆いていた。
気が付けば戦いを挑んでいて、無我夢中で技マシンを取り返していた。
噂には聞いていた。
だけど俺はこの時ようやく、ロケット団という組織が如何に道を外

れたものかを知った。
身をもって体験した。
彼らは悪であり、敵であった。
とは言っても、ちっぽけな俺に何ができるというんだろうか。
この時の俺は、そう考えていた。
考えを改める決定打となったのは、シオンタウンでの出来事だった。
そこで俺は、残酷な光景を目の当たりにした。
母親を殺されたカラカラ。
魂だけになっても子供を思い続けるガラガラ。
その悲劇を生み出したのがロケット団だった。
ガラガラの持つ骨は、高く売れるらしい。
その為だけに、奴らの金もうけのためだけに。
カラカラの親子は引き裂かれた。
目の前が真っ赤になった。
ポケモンタワーを駆け上がった。
カラカラの無事を知ったお母さんガラガラの魂は、天に帰っていった。
けれど俺の怒りは収まらなあった。
最上階にいたロケット団を、片っ端から叩き伏せて行った。
最後の一人を捻り潰す。
恐怖の色を目に浮かべ、俺を見上げる団員。
それでも俺の怒りは静まることを知らなかった。
怒りに身を任せてとどめを刺そうとして、その手を引き留められた。
「やめろレッド。それ以上したら死んじまう」
「……グリーン」
そこにいたのは幼馴染でありライバルであるグリーンだった。
その手を振り払おうとするが、グリーンは断固としてその手を離さない。
「放せよ」

「放さねえよ」
「放せ！」
「放せばお前はこいつを殺すだろ」
……それでも。
このカラカラの無念は、どこに晴らせばいいっていうんだよ……。
報復の報復を恐れて、黙って受け止めるしかないっていうのかよ。
そんなの、俺は認めない。
「レッド」
グリーンが、俺を見つめてくる。
小さく首を振って、それからこう言った。
「それ以上すると、お前はメア姉の笑顔を一生失うことになる。どんな顔してメア姉に会うつもりだ？」
「……ぁ」
頭にかかっていた靄が、すっと引いて行った。
何かが胸の奥に、すとんと落ちて行った。
小さな声が、ふっと零れ落ちた
「こいつらが道を踏み外しているからって、お前まで間違える必要はねえ。正々堂々と、胸張れる生き方をすればいいんだ」
後から知った話だが、グリーンはラッタを失ったばかりだったらしい。
あいつのラッタを見たのはほんの数回だったが、グリーンの事をよく慕っていたことを今も覚えている。
ラッタが死んだ理由は、ロケット団との抗争が原因だったと聞いた。
あいつは自らの力量不足を嘆き、この塔でずっと悔やみ続けてきたらしい。
怒りに囚われた俺。悲しみに囚われたあいつ。
自力で立ち直ったあいつの方が、よっぽど立派だった。
それから、胸を張って生きるというのはどういうことかを考えた。
十一歳の俺には難しすぎて、結局答えなんて見つからなかった。
だけど一つだけ、確かに言えることを見つけた。

「カラカラのように悲しむポケモンがいる事実を、放っておくことなんてできない」
俺はロケット団と戦うことを覚悟した。
誰からも理解されずとも、誰からの助けも得られずとも。
たとえたった一人の闘争になったとしても、自分の信じる道を真っすぐ生きる。
俺はその決意を決めた。
その時俺は、メア姉がどうして指名手配されるような行動をとることになったかを、なんとなく理解した。
メア姉はきっと、曲げられない自分の道というのを見つけていたんだろう。
たとえ自分が世界の敵になってでも貫くと決めた、メア姉の正義があったんだろう。
そしてそれはきっと、誰かのためなんだろう。
俺の知るメアリーという姉は、そんな人だった。
……だというのに。
目の前のロケット団員に、メア姉の姿が重なる。
そんなはずがないというのに。
理性を本能が否定する。
たまらず聞いた、メア姉なのかという質問は、否定も肯定もされなかった。
否定してくれれば、どれだけ楽だっただろうか。
あるいは、否定された場合も疑い続けたんだろうか。
彼女がボールを構える。
俺もボールを構えた。
外界が遮断されていくこの感覚は、格上の相手の時にだけ感じるプレッシャーのようなものだった。
チリチリとした感覚が、肌を焼いて行く。
「お願い、ルリルリ」
「任せたぞ！　ピカチュウ！」
彼女が繰り出したポケモンは、見たことがないポケモンだった。

腰に手を伸ばし、図鑑を取り出す。
ちらっと画面に視線を送る。
そこに書いてあったのは、マリルリという種族名。
（ニックネーム……？　ロケット団が？）
俺の思考は、さらに混乱することになった。
目の前の人物が、余計にメア姉の気がしてくる。
（とにかく、相手は水タイプのはず！　それならピカチュウが有利！）
「ピカチュウ！　エレキボール！」
「ルリルリ」
彼女は名前だけを声に出した。
だというのにマリルリはきちんと行動した。
ようするに、エレキボールを叩き落したのだ。
「くっ、ピカチュウ避けろ！」
マリルリがピカチュウ向けて突撃してくる。
躱すように指示を出したが、わずかに掠めた。
そう、掠めただけである。
だというのに、ピカチュウの体力は大きく削れていた。
（水タイプじゃないのか!?）
初見だとタイプが分からないポケモンというのは、一定数いる。
タマタマが草エスパータイプで、ゴルダックが水単タイプなのはどう考えてもおかしい。
そういった風なポケモンなのかもしれない。
捕獲すれば詳細が図鑑に登録されるが、見つけただけでは学術名しか分からない。
まずタイプを見極めようとしていたら、目の前の女性が語り掛けてきた。
「水は電気に弱いです、電気は地面に弱いです。そんなしきたり、捨て去ってしまいなさい。そんな非常識、必要ないわ」
そこにあったのは、怒るでも、嘆くでも、悲しむのでもなかった。
ただただ、諭すような声だった。
やめろ。

メア姉の声で、そんな言葉を口にするな。
「ピカチュウ！　アイアンテール！」
ピカチュウに指示を出す。
対象は目の前の彼女の、ゾロアのお面だ。
「その面拝ませてもらうぞ！」
メア姉の声を持つお前は、一体誰なんだ。
メア姉じゃないという確信を得るために、無駄な一手を打ってでも仮面を割る。
そのつもりだったというのに。
「アクアジェット」
彼女のその一言で、マリルリが加速した。
一フレームの内にピカチュウまで肉薄すると、その水流で飲み込んだ。
その一撃は、もともと減っていたピカチュウの体力を完全に削り切った。
「そんな……、ピカチュウ、戻れ！」
ピカチュウをボールに戻し、考える。
時間はない。
思考を加速させろ。
（今の攻撃、やっぱり水タイプのはずだ。だとしたら、何故エレキボールが効かなかったんだ？）
水は電気をよく通す。
それはグレンジムでも言っていた。
理屈や志ではどうしようもない事実。
疑うことのない常識……。
（間違っているのは、常識の方か？）
そんな仮説が、頭に浮かんだ。
「行け！　ガラガラ！」
それなら敢えて、自ら生と死の境界線に一歩踏み出す。
そうして死中に活を見出す。
この相手は間違いなく格上だ。

この戦いの中で成長しなければ、勝利なんて掴めない。
「ほねブーメラン！」
ガラガラの骨でできた棍棒を投げて攻撃する。
マリルリはそれを跳躍して回避。
先ほど同様に突撃してくる。
「ガラガラ、迎え撃て！」
ガラガラは棍棒を一本しか持っていない。
そしてその一本は、既に放り投げてしまっている。
迎え撃つための武器は残されていない。
ただし、それがただのガラガラであればの話だが。
鈍い音が響き渡り、ガラガラとマリルリが衝突する。
ガラガラは見事、マリルリを受け止めていた。
それを可能にしたのは、母親の形見だった。
「わりぃな、俺のガラガラは二刀流なんだ！」
そして、先に投げたブーメランが返ってくる。
後ろのブーメランを対処しようとすれば正面のガラガラが隙をつき、ガラガラに意識を割いたままでは迫りくるブーメランを回避できない。
一人挟み撃ちってやつだ。
「ルリルリ、ものまね」
彼女が淡々とそういうと、ガラガラの骨そっくりのブーメランがマリルリから放たれた。
それはマリルリとガラガラのブーメランを結ぶ直線上を綺麗に裂いて行き、相殺した。
俺達の考えた必殺技だというのに、目の前の相手は脅威でも何でもないと言った様子で冷静に切り返したんだ。
「ああ！　ガラガラ、頑張れ！」
そんな俺の応援も空しく、ガラガラは力負けした。
部屋の隅まで吹き飛ばされたガラガラに駆け寄る。
（……なんなんだよ、この強さ。反則じゃねえか）
この相手に打ち勝つイメージが全く湧かない。

こんなこと、初めてだった。
（いや、一度だけあったっけな。この人には敵わないと思ったことが）
昔の記憶が、フラッシュバックする。
やはり、この疑念を放っておくことはできない。
「ガラガラ、いったん戻れ！　任せたぞ、ストライク！」
ガラガラを戻し、ストライクを繰り出す。
呼吸を合わせ、その一瞬を狙いすます。
（……来る！）
今までの流れで、マリルリが肉弾戦を得意とするポケモンだということは分かっていた。
こちらが仕掛けなければ、痺れを切らしたマリルリの方から突っ込んでくる。
その予想は正しかった。
そして予想ができているのだから、当然対処もできる。
「見斬りだっ！」
マリルリを紙一重で完全に躱しきる。
そのまま背後を取り、今度はこちらから仕掛ける。
「真空波ッ！」
マリルリの突進に合わせて、推進力を与えてやる。
バランスを崩したマリルリは、先ほどのガラガラのように吹き飛んでいった。
「今だ！　仮面を切り裂け！」
今度は邪魔をするポケモンはいない。
ストライクの素早さを活かして肉薄し、仮面だけを切り捨てる。
鋭い鎌で切り裂かれたそれは、音を立てて地面に落ちた。
「……そんな」
フードの下に隠れた顔は、照明に照らされて。
自分の憶測が正しいことを証明していた。
「メア姉、なんで」
目の前のロケット団に加担する女性は、やはり姉だった。

八話　Ｙｏｕ　Ｓａｙ

「……こんな形で再会することになるとは、思ってなかったよ」
どんな顔をすればいいのか分からなかった。
目の前のレッドは、トラウマをえぐられた子供のような悲痛を浮かべている。
私は、どんな顔をしているんだろうか。
右手をそっと顔に当てる。
酷く冷たい感触が肌を伝う。
私は表情は、既に死んでいた。
「失望した？　絶望した？　見下げ果てた？」
「違っ、だって、メア姉はそんな人じゃ……」
「私の、何を知っているというの？」
私ですら私を知らないのに。
何故私はここに在るのか。
何故私はここで戦うのか。
私は、どうしたいのか。
「私はレッドの三年間を知らない。その間にあなたは、旅に出るほどの成長を果たした。どうして私が変わらないと思ったの？」
地獄だった。
敵地に放り込まれて三年間、気を休めることもできなかった。
気丈に振舞っても、すり減った精神は確実に心身に影響を与えていた。
だからこそマサラタウンのメアリーは死んだ。
ここに居るのはトキワのメアという亡霊だ。
「もう戻れないんだよ、あの頃には」
マリルリをボールに戻す。
気迫と覚悟で臨んだところで、傷の痛みを忘れる事しかできない。
体力は確実に削られて行っていた。
お疲れ、ルリルリ。
「出番だよ、スーちゃん」

禍々しさを持った、異次元の存在。
コードネームＵＢ：ＳＴＩＮＧＥＲ。
学術名アーゴヨン。
私達の始まりのポケモンを繰り出した。
耳をつんざくような鳴き声を一つ。
ヘドロウェーブを放ち、ストライクを飲み込んでいった。
「ストライク！」
そして特性ビーストブーストが発動する。
もはやアーゴヨンのスピードに、誰も追いつけない。
「くっ、ガラガラ！」
「無駄」
マリルリとの攻防で傷ついたガラガラなんて、障害にもなりゃしない。
迸る龍の波動でその体力を削り切る。
「もうやめよう、レッド。あなたじゃ私には敵わない。ここは大人しく退いて」
自分でも驚くくらい、か細い声が出た。
でももう、これ以上人を傷つけたくなかった。
「……確かに、もう戻れないのかもしれない」
レッドがそんなことを口にした。
「メア姉に何があったのかを俺は知らない。どうしてロケット団なんかに手を貸しているのかも、俺は知らない」
だけど、と。
その拳を握り締め。
歯を力強く噛み締め。
レッドは胸を張って立ち向かうことを選んだ。
「そんな辛そうな顔しているメア姉を放っておくことなんて、俺にはできねえ！　行くぞ、ウインディ！」
どこまでもまっすぐなレッド。
本当に、立派に成長してくれたと思う。
彼の巣立った様子に、心を動かされる。

（ふざけるなッ！）
どこから歯車は狂った？
何故レッドはここまで純真に育った？
どうして私はこんなに醜悪になった？
（私だって、レッドみたいな生き方をしたかった！）
自分の信じる正義を貫きたかった。
自分の意思で、運命を選択したかった。
それがどうだ。
信じた正義は崩れ去り、運命の荒波には流されるばかり。
世界からは犯罪者の烙印を押し付けられ、その身を悪の組織に堕としている。
（どうして私ばっかり、こんな役回りを強いられるのよ！）
誰に聞いたって、悪に立ち向かう正義のレッドと、それに立ちふさがる悪のメアという構図だ。
そんな風に生きる事なんて、ただの一度も願っていない。
世界はどうしようもなく理不尽で不条理で。
いつも私の敵だった。
「知ったような口を……叩くなァ!!!」
私の感情の揺れに、アーゴヨンが呼応する。
会心の一撃を、ウインディに叩き込む。
「うおおおぉぉぉ、ウインディ……ッ！」
波動という高濃度のエネルギーと、ウインディがぶつかり合う。
耐えきれるはずがない。
その一撃を耐え切り、ウインディが攻撃に移行した。
「起死回生ッ！」
体力が少なくなればなるほど、威力が上がる技。
あえて波動に突っ込むことで死に踏み込み、そこから生をつかみ取る必殺の一撃を繰り出した……か。
……私の完敗、だよ。
それが、フラットルールでの話ならね。
「スーちゃん、とどめ針」

この攻防で分かった。
ウインディの持ち物は気合の鉢巻き。
瀕死に至る一撃を、ときたま耐えることがあるアイテム。
その偶然を引き当てたレッドの運は、相当なものだと思う。
だけど、レベルが足りない。
「……そうだよ。結局力がなければ何もできないんだ。どんな綺麗事や御題目を並べても、それが真実」
だから私は力を求めた。
故に私は力を身に付けた。
つまり私は、正しかったんだ。
「ウインディ……」
ウインディのもとに歩み寄るレッド。
悲しさや苦しさが、こちらまで伝わってくるようだった。
「ごめん、ごめんね」
小さくそう残し、私はコーニッシュのもとへと足を向けた。
レッドの顔を見るのも、顔を見られるのもつらかった。
もう私なんて忘れて生きてくれ。
それがレッドのためであり私のためであるんだ。
(……じゃあね)
心の中で別れを告げて、部屋を後にした。
＊
「侵入者はどうした」
「私がここに居る意味、分かんないかな?」
コーニッシュのいる部屋は、少し幻想的だった。
機械から零れる淡い青色の光が、強まったり弱まったりと脈動している。
それはまるで、生きているようだった。
「そうか。こちらも準備が終わったところだ。始めるとしようか」
「……お願い」
誰に後ろ指さされようとも。
私はこの道を行くことを決めた。

私は、間違ってなんかいない。
正しくあるために、力を得たんだ。
力のある私が、間違ってるはずないんだ。
サカキが機械を操作する。
脈動していた光が、徐々に強まっていく。
光子が部屋を満たしていく。
視界を埋め尽くすほどの光に、私たちは飲み込まれていった。
やがて、光は収まり、徐々に世界に色が戻ってきた。
はたしてそこにいたのは、たしかにコーニッシュだった。
「……コーニッシュ、なの？」
「先輩……」
コーニッシュが私の方に、駆け寄ろうとしてくる。
筋肉が衰えているのか、その場に倒れ込んだ。
「コーニッシュ！」
崩れ落ちた彼女のもとに、私から駆け寄った。
彼女は見慣れた顔で微笑んだ。
「先輩、私。ずっと待ってましたよ」
やわらかく笑う。
その顔を見ていると、不思議と自分が許されたような気になっていった。
だからこそ、私は聞かなければいけなかった。
「コーニッシュ。大事なことがあるの。答えてくれる？」
「はい。先輩の質問なら、なんなりと」
心臓が早鐘を打つ。
心音が耳を支配する。
「……あなた、誰？」
私の質問に、コーニッシュがわずかに硬直した。
その際、わずかに瞳孔が縮小したことを、私は見逃さなかった。
疑念は、確信に変わった。
「先輩？　何を言ってるんですか。私は私、コーニッシュですよ？」
よく見てくださいと、コーニッシュは言う。

確かにそこに在るのはコーニッシュだった。
私が、見間違えるはずもなかった。
「ふぅ、聞き方が、正確じゃなかったね。……私のコーニッシュを、お前どこにやった？」
核心をついた質問に、彼女は隠すこともなく笑った。
楽しそうに、愉しそうに。
「あはははは。さすが先輩ですね。気づくの早すぎません？」
「コーニッシュは、私にコニーと呼ばせようとするんだよ、偽物野郎」
「あはは、なるほどー？　ふふっ、でも偽物野郎とはひどいですね、私は女性ですよ？」
レディらしくないですねと、彼女は嗤う。
そんな先輩も素敵ですけれどと、彼女は嗤う。
「それにしても気づくの早いと思うんですけど、もしかして最初から疑っていました？」
「……当然でしょう」
本当は、疑うよりも信じることを優先したかった。
でも、それはできなかった。
「化石を復元する装置があると聞いた。死者の蘇生と化石の復元、そこにどれだけの違いがあるのかを考えた」
この日を、ずっと夢に見てきた。
だけど、叶えた現実が残酷だった場合の事も、いつも考えていた。
「復元された化石が元の記憶を有しているのなら、自分の死を覚えているということになる。そんなトラウマを抱えた状況で生きて行けるはずがないと思った。仕組みがあると思った。考えられる理由の一つに、そもそも別の意識が入り込んでいる可能性を考えた」
私は淡々と告げる。
信じていたというのに。
「だからこそ、その可能性も考えていた。さぁ、答えを聞かせて。あなたは誰？」
「はぁ、さすが先輩ですね。でも、私はコーニッシュだとしか答えることができませんよ？　先輩」

彼女が、コーニッシュを名乗る彼女が続ける。
「正確に言えば、数ある平行世界の内、コーニッシュが生存している世界の私のクローン……ってところですかね」
「コーニッシュが……生存している世界？」
彼女は肯定し、先を続ける。
「こっちの先輩が生きているっていうことは、私は先輩を助けに行ったんですよね？　それに感動して、心でも掴まれちゃいましたか？」
コーニッシュの体をした何かが、不気味に嗤う。
「あはは、演技だとも知らずに、滑稽なものですねぇ？　並行世界すらまたにかけた、大掛かりな罠だとも知らず」
サカキ様の手のひらで泳がされる気分は、いかがでしたか？
そう、彼女が嗤った。
「コーニッシュ……？　どういうこと、なの？」
「あれ、まだわかりませんか？　先輩はもっと察しがいい人だと思っていたんですけど」
コーニッシュは少し首を傾げ、すぐに得心したように手を打った。
「ああ、理屈で理解していても、心が否定したがっているんですね。なら、懇切丁寧に教えてあげますよ」
その先を聞いてはいけない。
そんな予感があった。
だけど、知らなければいけないという直感があった。
私は、動かなかった。
「まずこの蘇生装置、三千年前のカロスで作られた兵器を元に作られているんですよ。この装置を使う際に放たれる光子の揺らぎ、それを受けた生物は老化を限りなくゼロに出来ると言われています。ええ、サカキ様の狙いは、不老の肉体を得る事でした」
「サカキ様はまず、カントーのポケモンを支配することを考えました。装置を稼働させるには多くの生体エネルギーが必要ですからね。しかしそれは、一人の少年によって潰されました。そう、マサラタウンのレッドによって」
「サカキ様はその後ロケット団を解散し、修行に励みました。その時、

出会ったのです。世界を股にかける存在、ウルトラビーストに。並行世界に移動したサカキ様は、もう一度カントーの支配を試みました。今度は団を強化して、より確実に実行しようとしました」
「それを妨害したのは、やはりマサラタウンのレッドでした。どれだけ丁寧に事を運んでも、あと一歩というところでいつも計画は挫かれました。まるで確定した結末だとでもいう様に、世界はいつもロケット団の壊滅に収束しました」
話を理解するのに精いっぱいだった。
不老？　並行世界？　既にロケット団は壊滅させられていた？
内容を理解しても、意味を理解しても、納得はできなかった。
「何度リトライしたか分からない世界線で、サカキ様は特異点に到達しました。それが先輩、あなたです」
「突如現れた宿敵の姉。サカキ様は世界漂流を続けるうえで確立したロードポイントを設定し、この時間軸を固定しました。そうして一周目の先輩を見届けました。先輩は、ついぞマサラを旅立つことはなかったらしいですよ？」
「そうして次は、ベベノムをマサラに放つことにしました。こちらの動きを察知した国際警察が動くので、うまく先輩と遭遇する地点を作るのが大変だったと聞きましたね。まあ、どうにかして先輩に、マサラを旅立つだけの力を与えました。するとまた、特異点が現れました。まあ、これも先輩だったわけですが」
「先輩ということも知らずに干渉したサカキ様は、どういうわけか先輩を手下に加えました。そしてその後、ロードポイントを更新したらしいです。どうしてそんなことをしたのか聞きましたがサカキ様は答えてくれませんでした」
ロードポイント……？
つまりなんだ、サカキは望んだ未来を掴むまで、何度もこの世界をやり直しているというのか？
なんだよ、それ。
私が望まない未来を歩まされてる一方で、こいつは過去を何度でも繰り返せるっていうのかよ。

「そうしてニューアイランドに先輩を隔離したものの、先輩はミュウツーを連れて逃走。手下にするどころか、レッドと一緒にサカキ様を倒しに来たらしいですよ。あはは、笑えますよね」
「仕方がないので、サカキ様は世界をやり直し、私を送り込みました。その世界で私は先輩を監視し、脱走計画を全て頓挫させました。その結果先輩は、自らの命を絶ってしまいました。やっすい命ですよね、そう思いませんか？」
「先輩を殺した私は、その世界線でロケット団として育てられました。すべての真実を私に伝えたのち、サカキ様はまた世界をやり直したそうです。そうしてこの世界の私を殺し、先輩の手によってこの世界線に呼び戻された」
「先輩には感謝してますよ。またサカキ様に会わせてくれて、本当にありがとうございました」
　そこから先の事は、先輩の方が詳しいですよねと、彼女は言う。
　そうだ、コーニッシュに情をもって、コーニッシュに囚われて、コーニッシュを失って、コーニッシュを人質に取られて。
　じゃあなんだ？
「私の見てきたコーニッシュは、私を操り人形にするための道具だったっていうの？」
「あはは、ようやく気付きました？　いえ、ようやく納得したというべきですかね、先輩？」
「私に愛称で呼ばせようとしたのは？」
「好感度稼ぎでしょうね」
　何かが、崩れ去っていった。
　どこだ、私は今、どこにいる？
　分からない、分からない。
「聞かせて。この世界のコーニッシュは、私の知るコーニッシュは、誰の味方だったの？」
　一縷の希望に縋る。
　蜘蛛の糸のように、細く繊細なそれに手を伸ばす。
「ふふ、まだ信じちゃってるんですか？　先輩は可愛いですね。決

まっているじゃないですか。私の心はサカキ様のものですよ、最初から……ね」
「コーニッシュッ!!」
手元のコーニッシュを蹴り飛ばした。
怒りが収まらなかった。
「信じて、信じていたのに！　私を騙したな……ッ、私を裏切ったなァ!?」
「アッハハハ。もしかして私だけは自分の味方とでも思っていましたか？　滑稽で滑稽で、私、笑い死にそうです」
「ふざけるなぁ！　何のために私はッ！」
「何のために……？　私のせいにしないでくださいよ。先輩がしたくてしただけでしょう？」
誰も助けてくれなんて言ってない。
誰も蘇らせろとは言っていない。
この世界のコーニッシュを知らない筈の彼女が、確信をもってそう告げる。
それは最初からコーニッシュが敵だったことを確信させるのに、十分すぎる発言だった。
「先輩は、先輩の為にレッドさんを倒したんですよ。滑稽ですよね。二つ前の世界ではロケット団を潰した英雄が、一つ前の世界ではあっさりと死に、この世界では正義を挫く悪になる。これ以上の喜劇がありますか？」
ああ、最初から私は、一人だったんだ。
マサラを捨て、レッドとの縁を切ったとき、すべてを失ったんだ。
この世界ではよりを戻そうともせず、完全に断ち切った。
「バイバイ、コーニッシュ」
「先輩……？　何を？」
ボールからアーゴヨンを繰り出す。
もう、お前必要ないや。
私の前から、消え失せろ。
「イヤだ、死にたくない……死にたくない！　サカキ様！　助けてく

ださい！」
まともに体も動かせないコーニッシュが、必死にサカキの方に向けて這いずり回る。
「コーニッシュよ。命令だ」
「ハイ、何でも聞きます。だから、だから助けてください！」
「用済みだ。ここで死ね」
「……え？」
そうしてアーゴヨンの針が、彼女の喉を貫いた。
楽には殺してやらない。
せいぜい死ぬまで、逃れられない恐怖にもだえ苦しむがいい。
それが私をもてあそんだことに対する報いだ。
「そん、な。サカキ、さま。どうして」
私の方が大切だと言ってくれたのに、と。
彼女は必死に語り掛ける。
「ああ、お前の方が大事だった。私の口から説明しても、こいつは聞き入れなかったからな。説得できる人物が必要だったのだ」
その為だけに、私はお前を呼び出したのだとサカキは嗤う。
「ご苦労だったコーニッシュ。今度こそ、安らかに眠るがいい」
「……あ、いや……」
コーニッシュの瞳から、ハイライトが抜け落ちた。
私の心から、何かが零れ落ちた。
かろうじて人間性を繋ぎ止めていたそれは、儚くも崩れ去った。

九話　真贋心眼

人を、殺した。
この手で。
そんな正義が、あっていいのか。
いや、分かっている。
私がやっていることは、きっと正義なんかじゃないんだ。
「あ……あぁ」
その場に崩れ落ちる。
ルクシオの入ったボールが零れ落ち、中からルクシオが現れる。
コーニッシュのもとまで駆け寄ると、進化の光を身にまとった。
やがて光がおさまると、中から現れたのはレントラーだった。
（私といた時は、一向に進化する兆しも見せなかったのに）
こいつも、私の敵だったんだ。
どいつもこいつも、私に歩み寄るだけ歩み寄って切り捨てていく。
もううんざりだ。
レントラーは私のもとまで来ると、ボールの開閉スイッチを壊した。
その瞳に私を映し、興味を失ったように立ち去った。
コーニッシュを連れて。
「ふむ、これでチェックメイトだ、メアよ。もう一度、今度は本当の意味で問おう。私の部下になれ」
「……誰が、あんたなんかの」
「分かっているのだろう？　お前は、本質的には私と同じだということを」
否定も肯定もせず、押し黙る。
「誰かのために何かを成せど、見返りを与えられるわけではなく、嫌われる一方だ。そんな世界のどこに希望がある？　いやない」
思考に靄がかかる。
善悪を判断する能力にロックが掛かる。
サカキの言葉に身を委ねれば、どれだけ楽になるだろうか。

「この世界は私たちの敵だ。お前がどれだけ身を粉にしても、最後に世界はお前を裏切る」
甘ったるく、とても苦い。
けれどその話は、私の心をつかんで離さない。
「選べ。世界に捨てられるか、世界を捨てるか」
「……私は」
分かっているんだろう？
自分はもう、どうしようもなく堕ちている。
ならばサカキは、私の一番の理解者だろ。
その手を取ればいい。
それだけで、それだけでいい。
「私は！　自分の信じる道を行く！」
伸ばしかけた手を、もう一方の手で叩き落とす。
たとえ世界のすべてが敵になっても、私だけは私を信じる。
誰かに私を委ねるなんて、絶対に許さない。
「スーちゃん！」
「愚かな。分かっているのだろう？　サイドンの特性は頑丈。お前の攻撃を一度耐え、返しの一撃で倒せる」
「そんな常識、知ったことじゃない！」
覆せ、これまでの前提を。
貫け、これからの信念を。
型破りで頑丈を貫けるならば、何か抜け道があるかもしれない。
それを引き寄せろッ！
「駆け抜けろ！　極限の一瞬を！」
私の信念にアーゴヨンは、必死に応えようとした。
レッドの時よりも強力かもしれない一撃が、龍の形を成してサイドンに襲い掛かる。
けれど、それだけだった。
そんな奇跡、私に引き寄せられるわけがなかった。
私は、主人公なんかじゃないんだから当然だ。
サイドンの返しの一撃で、アーゴヨンが倒れる。

マリルリのボールは、レントラーが壊していった。
レントラーは私を見限って、去っていった。
もはや私を守るものは、何もなかった。
「……最後のチャンスだ」
「お断りだね」
「……残念だ」
サカキが私に忠告する。
ただ生きるのではなく、良く生きる。
何と難しいことだろうか。
サイドンのドリルが私に向かってくる。
世界が引き延ばされていく。
死が歩み寄ってくる。
もはや死に対する恐怖はなかった。
（ああ、なんだ。私はとっくに、死んでたんじゃないか）
吸い込まれるように向かってくるサイドンを見つめていると、視界を白が埋め尽くした。
硬い金属を、ドリルが削る音がした。
「な、んで。あんたがここに？」
白い体。
紫のしっぽ。
尖った耳に、鋭い目つき。
念能力で生み出したスプーンを私に突き出したそいつの名前は……。
「ミュウツー……？」
＊
サイドンが倒れ伏す。
肩口から脇へと残る傷跡は、ミュウツーの得意技のサイコカッターだろう。
こいつは、私を助けた……のか？
『久しいな、サカキよ』
「ミュウツーか。お前は、地下に閉じ込めておいたはずだが」

『二度同じ轍を踏むわけがないだろう。今回はきちんと対策をしておいた』
私のアームカバーが、淡く光る。
マーキング、ということか？
『私を倒したこいつが追い詰められるようなことがあるとすれば、それはお前に他ならないと思っていたぞ、サカキよ』
「ふん、お前ほどの力があるのならば小手先に頼らずとも、力に訴えればいいというのに」
『それは既に試した。もっとも、力では解決しないと学んだだけだがな』
ミュウツーは膝を突いて私と対等な高さに視線を合わせた。
そして、私に問いかけてきた。
『メアと言ったな。お前も学んだだろう。たとえ力を持っていても、一人きりでは勝てないということを』
力を求めた。
それは間違っていなかった。
何を間違った。
仲間を切り捨てたことだ。
『私はサカキを倒したい。お前はロケット団を倒したい。どうだ、共闘しないか？』
ミュウツーの声は、サカキよりも心地よかった。
だからこそ、私は恐れた。
「もう、嫌なんだよ……。誰かに裏切られるのも、誰かを見捨てるのも」
一人にしてくれ。
「ふ、残念だったなミュウツーよ。メアがトレーナーであることを放棄したならば、お前は正式に私のポケモンとなる」
『メアよ、本当にそれでいいのか？　お前はそれで、後悔しないのか？』
「後悔って、何かをしても、何もしなくても、どっちにしろ苛まれるじゃないか」

『……なら、行動してみせろ！　もがき続けろ！　そうしてダメだったら、その時悔いればいい！』
頭を、強く揺すられた気がした。
『今諦めれば、確実に後悔する！　だが足掻き続ければ、違う未来が待っているかもしれない!!』
「私は……」
心臓が跳ね上がる。
『お前の信念は、そんな脆いものなのか！』
慟哭を、あげた。
空に向かって、吠えた。
「……やってやる。何度だって、何度だって立ちはだかってみせる！」
踊る阿呆に見る阿呆。
同じ阿呆なら踊らにゃ損損。
やらずに後悔するくらいなら、やって後悔してみせる。
『よく言った。餞別だ』
私の手元に、もう一つボールが送られる。
それは私がかつて捕獲した、フリーザーだった。
「うん。来い、フリーザー！」
＊
戦いは激化した。
シングルバトルならば、ミュウツーが優勢だっただろう。
だがこの戦いは、ルール無用のバトルだ。
サイドンを除くサカキの手持ち五匹対、ミュウツーフリーザーの戦いになっている。
加えてフリーザーは岩タイプの攻撃が苦手だ。
フリーザーが致命打を受けないように気を使いながら、立ち回る。
サカキ相手に、無謀な戦いだった。
（ミュウツー、聞こえる？）
（メアか、何だ？）
私の脳裏によぎったのは、ナツメとユンゲラーのコンビ。
テレパシーでの意思疎通、ミュウツーならばできるんじゃないかと

考えた。
そしてそれは正しかった。
（隙を見つけ次第、自己再生を挟んで）
（……？　まだ体力は十分だが？）
（スーちゃんを回復させる）
かつてはミュウツーを仕留めるために使った戦略。
『横取り』による、スーちゃんの疑似的な高速再生技。
（なるほど、分かった）
狙い通り、隙を見てミュウツーは自己再生を試みてくれて、それをスーちゃんがすかさず横取りした。
あとはスーちゃんにこっそり悪だくみを積んでもらって、隙を見て一掃する。
それで行けるはずだ。
しばらくして、上手く試合を運べていると思ったそのときだった。
サカキが嗤った。
「アーゴヨンによる奇襲を狙っているな？　そんなこと、お見通しだ。貫け、サイホーン」
「！　スーちゃん！」
「ふはは、残念だったな」
「……本当に、残念だったわね」
熱波が襲い掛かる。
サカキのポケモン達を、飲み込んでいく。
「い、一体何が」
サカキが動揺したとき、サイホーンが貫いていたアーゴヨンが煙になって溶けた。
「身代わり!?」
かつては届かなかった。
だが今度は、前回とは違う。
「無暗に力を付けさせたこと、向こうで後悔することね！　スーちゃん、熱風！」
敵全体攻撃の熱波が、サカキの手持ちに襲い掛かる。

悪だくみを三回積んだ攻撃を耐えるべくもなく、一斉に淘汰した。
「……また、か」
「つれないわねサカキ、どこに行くつもり？」
負けを自覚したサカキが、逃走しようとした。
そんなこと、許すと思ったか？
「メアよ、次は私が勝つぞ」
そう言って、サカキの存在が希薄になっていった。
だから私は、呟いた。
「次なんて、あったらね」
フリーザーに、指示を出す。
足手まといでしかなかったフリーザーを、どうして庇っていたか。
ただ一瞬、この一瞬のためだ。
「絶対零度」
通常、殆ど当たらない一撃必殺技。
当たれば死を回避することのできない技。
それをサカキにぶち込んだ。
「そんな攻撃、当たるわけ……なっ!?」
ただの絶対零度ならそうだろうよ。
お前はフリーザーの強さを見誤った。
「戦いの最中、お前に心の目を使っていたんだよ。故に、絶対零度が外れることはない」
「ふざ、ふざけるなぁ！」
「恨み言は、向こうで聞いてあげるよ」
私もあんたも、どうせ地獄行きだろうからね。
サカキの悲鳴が、時空にこだました。
サカキの遺体は、現代に残っている。
ロードは失敗したということだろう。
「く、くはは」
やった。
私はついに、成し遂げたんだ。
「やった、やったやった！　ついに私は、サカキを倒したんだ！　よう

やく、クリアしたんだ！」
「残念だが、ゲームオーバーだ」
勝利の余韻に浸ろうとした私に、何者かが水を差した。
音を立てて扉が開かれる。
振り返るとそこに、見覚えのある顔があった。
「ああ、誰かと思えば、国際警察のハンサムさんじゃないですか？　今日も元気に税金を潰していますか？」
「ごく潰しにならないためにも、君を捕らえないといけないな」

十話　或いはバッドエンドと呼ぶべき終焉

「ああ、誰かと思えば、国際警察のハンサムさんじゃないですか？　今日も元気に税金を潰していますか？」
「ごく潰しにならないためにも、君を捕らえないといけないな」
　私の目の前にいたのは、国際警察のハンサム。
　かつてアーゴヨンを、上からの命令だと言って殺そうとした奴だ。
「私を倒すつもりですか？　あなた一人で？　はっ、笑わせますね。それとも、抱腹絶倒でもさせるつもりですか？」
「私だけでは無理だろうな。だが、今回は強力な助っ人がいる」
　ハンサムの後ろから別の影が現れる。
「……レッド」
「メア姉……」
　まだ、立ち上がるのね。
　本当に、主人公みたいな存在だよ。
　この上なく、私を腹立たせる。
「レッド君、今回もいつものように頼むよ」
「……お断りします」
　レッドはハンサムの言葉を切り捨てて、私に歩み寄ってきた。
「待て、レッド君退くんだ！　彼女は」
「うるさい！」
　ハンサムの制止を振り払い、自らの意思で私と向き合った。
「俺、確かにメア姉の事、何にも知らなかった。この三年間の話だけじゃない。それより前の事も」
　その目に炎を宿し、私を見据える。
「メア姉が何を考えていたかも、どうしてマサラを出て行ったのかも、それからどうしていたのかも知らないんだ。だから、教えてよ」
「レッド、言ったでしょう？　私たちは、もうあの頃には、戻れないのよ」
「それなら、やり直せばいい！」
　レッドがそう叫ぶ。

「間違ったなら、やり直せばいい！」
「何を分かったようなことを。この世界にはね、取り返しがつかないことだってあるのよ」
ちらりとハンサムの方に視線を送る。
渋い顔をしているが、きっと内心汗だくだろうな。
「例えば私がここでつかまれば、きっと死刑になるわ。死んだあと、私はどうやってやり直せばいいの？」
「それは……」
「レッドはそれでも、私を突き出す？」
「……無理だよ」
レッドは小さくうなだれた。
まだ私の事を思う心は残っているらしい。
「そう、私ももう、立ち止まることはできないの。だからレッド、私の事はもう忘れなさい」
「それこそ無理だよ」
「……お姉ちゃんの、最初で最後のわがままだから」
「……嫌だ」
意外だった。
こういえば、きっと折れると思っていた。
私の想像以上に、レッドは成長していたらしい。
「そんなことしたら、俺は絶対後悔する！　そんなの、いやだ！」
「……ありがとうね。でも、ダメだよ。いい子にしててね」
ミュウツーにアイコンタクトを送る。
いいのかという問いに、小さく首肯する。
「ばいばい、レッド」
「そんな、メア姉、どうして！」
「あなたまで国際警察に手配される必要は無いわ」
結局全部、私のわがままだ。
レッドにそれを背負わせるつもりはない。
だから、ここでお別れだ。
「嫌だ！　あの日俺は誓ったんだ！　いつか、メア姉の役に立つって

！」
ミュウツーの念能力に、必死に抵抗する。
消えかけていた実体が、再び現れる。
「ずっと思っていた、『いつか』って『いつ』だって！　ずっと後悔していた、あの日メア姉を一人にしたことを！」
ミュウツーの念能力を、ついに打ち破る。
空間を引き裂いて、レッドが駆け寄る。
「だから、今度こそ、俺を頼ってくれよ。お願いだからさ……」
「レッド……」
……マサラ人パネェ。
何当然のようにミュウツーの念能力破ってるの？
私にもそれ出来るの？
『人間というのは、つくづく分からない生き物だな』
ミュウツーがそう語りかける。
「まだ逆襲とか考えてる？」
『……どうだろうな。私は人間について知らなすぎる。相手を知ってからでも、遅くはないかもしれん』
「相手を知ってから……ね」
『お前もそうなんじゃないか？」
……確かに私は、相手の事をよく知らない。
国際警察も、ロケット団も、気に入らないからという理由で潰そうとした。
相手の事を、知ろうともしなかった。
「ミュウツー、ありがとうね」
『……もう、いいのか？』
「うん、何とかしてみせるよ」
ミュウツーにお礼と別れを告げる。
ミュウツーはテレポートを使い、立ち去って行った。
（さて、出番だよ、スーちゃん）
私はトレーナーだ。
口であれこれ弁明するよりも、実際に見てもらった方がいいだろ

う。
その上でハンサムさんを説得する。
アーゴヨンは危険なポケモンじゃないです、と。
まずは会話による、意思疎通を図ろう。
「出てきて、スーちゃ……ッ！」
「メア姉！」
そんな考えをしていた時だった。
私の影から、黒い何かが飛び出した。
それは私を打ち抜いて、私はビルの外へと放り投げられた。
急いでアーゴヨンを出そうとするが、先の衝撃で手から離してしまっていた。
体を、重力が支配する。
（ゲンガーと、シャドーパンチ……）
コーニッシュの影に忍び込んでいたゲンガーだ。
ああ、クソ。
コーニッシュを抱えた時に私の影に移りこんでいたのか。
そして、私が油断する一瞬をずっと狙っていたのか。
地球に体が引き寄せられる。
徐々にそのスピードを増していく。
ああ、これは死んだな。
そんなことを、冷静に思った。
窓からレッドが顔をのぞかせる。
どんどん遠ざかっていくその顔は、悲痛に歪んでいた。
死の間際だからか。
いやにその顔が鮮明に見えた。
ははっ、どうしようもなく惨めで呆気なくてみっともなくて。
実に私らしい最期だな。
フッと笑い、私は生きることを諦めた。
＊
もう一度世界をやり直せる。
そう言われたとしても、私は断るだろう。

私は常に、これしかないという選択を選んできた。
何度繰り返しても、何度やり直しても、私は同じ道を選ぶ。
そんな自信がある。
後悔という言葉の意味を、辞書で調べたことがあった。
後になって失敗だったと悔やむこと。
そうやって記述されていたはずだ。
私の選択に、失敗はあったか？
今までの出来事が、走馬灯のように蘇る。
そうして確信する。
私の選択は、すべて正しかったと。
もちろん、結果論だけで言えば失敗したこともある。
だがそれは、結果を知っているからこそ言えることで、その地点では失敗とは呼べないだろう。
そう、私はただの一つの後悔も、持ち合わせていない筈だ。
（そう、後悔なんて……）
歯を強く噛み締める。
内出血を起こしたのか、口内を鉄の味が占める。
私は血を吐くように唸った。
「ふざけるなッ！　私が負けるなんてこと、あってたまるかッ！」
空を斬り、隣の建物に手を伸ばす。
窓の桟に指を引っかけた。
私を飲み込もうとする大地の力に押し負ける。
多少の勢いを殺すという行為の為に、右手の指を代償にした。
「ふざけるな、フザケルナァ！」
その下の階の、窓ガラスに右手を突っ込む。
ガラス片が肌を切り裂くのを気にも留めず。
理不尽に負けて堪るかと抗う。
「私は、私は負けるわけにはいかないんだよ！」
ゴキン、と。
右の肩が外れる嫌な音がした。
再び重力に体が引き寄せられる。

不要な痛覚を遮断する。
「もう二度と負けないって決めたんだ。権力にも、世界にもッ」
左手で窓に掴みかかる。
自らの生に縋りつく。
「こんなところで、終わってたまるかァッ!!」
再び弾かれた左手。
地面まで、もう少ししか猶予がない。
壁に両足を突きつけると、私は蹴りつけて飛び跳ねた。
「ぐあっ！」
コンクリートの地面を、二転三転と跳ね回る。
くるくる、くるくると。
ガラス片に切り裂かれた右腕から、破片の突き刺さった右腕から、血飛沫が放物線を描く。
（生きてる……）
私は、まだ負けちゃいない。
「ゴキブリのような生命力だな、マサラタウンのメアリーよ」
かろうじて動く首から上を回し、声の主を探す。
私に声を掛けてきたのは、やはり国際警察だった。
車いすに乗った状態で、私を見下ろしていた。
「うぁ……が」
「随分と苦しそうだな」
体が動かなかった。
高層ビルから放り出されたのだ。
生きているほうが奇跡なくらいだった。
「お前のせいで私の人生はめちゃくちゃになったよ。両足の腱を切られ、まともに歩くこともかなわず、出世の道を断たれたよ」
「がぁッ！」
車いすの車輪で、私を轢く。
思い出した。
こいつ、ハンサムの上司だった男だ。
「命乞いか？　無様だな。あの時【ＵＢ・ＳＴＩＮＧＥＲ】を渡してお

けば苦しむこともなかったというのに、愚かなことよなあ」
「……っ！」
誰が命乞いなんてするものか。
誰にも私を奪わせたりしない。
「来い、バタフリー」
国際警察がバタフリーを繰り出す。
鱗粉が呼吸器官に入り込みむせ込む。
どこかの臓器が傷ついているのか、その咳には血が含まれていた。
「糸を吐くだ」
バタフリーの口から、粘着質な糸が放たれる。
それは私に絡みつき、雁字搦めにした。
「お前を突き出して、私はもう一度出世コースに戻るんだ！」
……やはり私は、間違ってなんかいなかった。
狂っているのは世界の方だ。
間違っているのは、この正義を語る組織だ。
善意も好意もない。
世のため人のためと謳いながら、こいつらは自分の事しか考えていない。
「……ぬ」
「んー？　なんだって？」
弱弱しい声を出す。
国際警察が耳を傾ける。
私は皮肉たっぷりに、嫌味ったらしく言った。
「……負け犬。乙」
「貴様ぁ！」
見る見るうちに、顔を真っ赤に染め上げる。
そのうち耳から蒸気を出してくれそうだ。
「手を緩めてやれば調子に乗りおって！　貴様の生死は問われていないんだ、ここで殺す事もできるんだ！」
国際警察が右手を上げる。
その手を振り下ろすと同時に、バタフリーに指示を出す。

「バタフリー、エアスラッシュ！」
風の刃が、私の喉を引き裂いた。
＊
……子供のころから、この世界が嫌いだった。
勝つための手段は用意されておらず。
負けを受け入れなければ先に進められないシステム。
自分を守るためには、他人を売り渡す必要があり。
そうしたやつらが我が物顔で正義を語る。
そういった世界で擦り切れていったやつらの事を、人々は悪と呼んだ。
それは例えばロケット団であり、私であった。
勝ち続ければ、いつかは正義と認められるのかもしれない。
けれど、それは不可能だ。
勝つということは、敵を作る。
世界を敵にするから、味方は増えない。
そうしてそれは、人をより孤独にしていく。
そうして勝ち続けて、最後まで勝ち続けて。
そこに何が残るというんだ。
誰も彼もが私の敵で。
誰も私の味方をしない。
そんな世界を、私は望んだんじゃない。
レッドは、正義の理想形だろう。
国際警察という世界を味方につけ。
表向きの悪であるロケット団を叩く。
ああなんという英雄譚だろう。
きっと人々は、こういう人の事を主人公というんだろう。
私は、主人公にはなれなかった。
世界は私を嫌った。
私は世界を嫌った。
そんな私が認められるわけがなかった。
死の恐怖も、生の喜びもない。

あるのはただ、この世界に対する憎悪だけ。
（さようなら。クソッタレな世界）
そうして私の意識は、血と共に抜け落ちた。
＊
ビルから落ちる姉を見た。
儚げに笑う姉を見た。
急いでシルフカンパニーを降りた。
邪魔をする壁をぶち破り、最短ルートで引き返した。
エントランスを駆け抜け、外へ出た。
目当てのメア姉は、すぐに見つかった。
何故かバタフリーの糸に巻き付けられていた。
「メア姉！」
声を出し、走り出す。
あたりには血が撒き散らかされていた。
まだ生きている。
そんな直感があった。
しかしその予感は、次の瞬間切り捨てられた。
良く分からない男がバタフリーに指示を出す。
風刃がメア姉の喉を食いちぎった。
「……え？」
思わず足を止めた。
正確に言えば、地に足をついているという感覚がなくなった。
震える足を叱咤して、どうにか一歩ずつ歩み寄る。
「メア、姉？」
膝を突き、メア姉を抱き寄せる。
メア姉の形をした何かは、苦悶の表情を浮かべていた。
今もなお血は抜け落ちていき、ありえないぐらい軽かった。
「ま、待ってくれ、レッド君。はぁ、はぁ……って、ぶ、部長!?」
「……ハンサムか」
後ろからハンサムの声が聞こえる。
ようやくシルフから出てきたところということだろう。

それより、大事なことがあった。
俺は、問いただした。
「部長って、どういうことですか？」
「そこにおられる方は、私の上司である」
「国際、警察の方、ですか？」
「そうだ」
皮膚に鳥肌が現れた。
体温が急速に奪われた。
「これが、国際警察のやり方ですか？」
誰もその問いに答えない。
ああ、よく分かった。
メア姉が、ずっと何と戦ってきたのか。
何に抗っていたのか。
ボールに手を掛ける。
メア姉が持っていた、毒々しいドラゴン。
禍々しいその龍を繰り出す。
「【ＵＢ：ＳＴＩＮＧＥＲ】!?　ハンサム、どういうことだ！」
「レッド君、落ち着くんだ！」
「落ち着く……？　ハハッ、俺は至って冷静ですよ」
冷静に冷徹に冷然に。
ただメア姉の遺志を引き継ぐだけだ。
メア姉を抱え込む。
バタフリーの糸を切り裂き、抱き寄せる。
「ヘドロ、ウェーブ」
俺とメア姉を避けるように、毒の波が駆け抜けた。
瞳から赤い液体が、零れ落ちて行った。

「メア姉、俺、何も分かってなかったよ。でも、全部分かった」
そうしてまた一人、修羅の道を行くものが現れた。
＊
彼女は敗北者だった。

彼女は世界に一人で挑み、そして敗れた。
だからこそ彼女は、主人公になれなかったと自嘲した。
誰からも理解されることはなく――
誰にも受け入れられることもない。
やがて人々の記憶からも忘れ去られ――
いつしか記録からも消し去られる。
敗北者は正義ではない。
彼女がどれだけ掲げても。
彼女がどれだけ叫んでも。
正義を振り翳しても、誰からも受け入れられない。
彼女と関わりのある数名だけに、ほんのわずかな影響だけを与え、
この世界から立ち去った。
それでも、彼女が齎したわずかな変化は。
ほんの小さな世界線の揺らぎは。
蝶の羽ばたきとなり、その波紋は少しずつ大きくなり。
ほんの少しだけ、世界の在り方を変えた。
それでも彼女は敗北者だった。

四章　日侵月捕

一話「呪われてやがる」

「ごほっ、がはッ」
私は血を吐いた。
そうなるのが自然だったから。
自然だったから私は、きわめて健康な肉体から血反吐を吐いた。
その血反吐を受け止めた右手を見つめ、どこも痛くない体に違和感を覚え、状況を把握しようと試みる。
私は喉を切り裂かれた。
切り裂かれたはずだった。
私は知っている。
自分の喉を食いちぎる風刃を。
妙に生暖かい液体が零れ落ちて行く様を。
芯から冷え込むように、体温を失っていく感覚を。
地面に打ち付けられ、ズタボロになって、自分が尽き果てる様子を。
それらはまさか、幻だったとでもいうのか。
周囲の景色が、記憶にあるものと噛み合わない。
赤と黒で整えられた、お城のような内装。
ところどころに飾られた、虹色で書かれたRの文字。
そのフォントは、酷く見覚えのあるものだった。
『ふむ、目が覚めたか』
混濁する意識で必死に思考を続けて、混乱が混乱を呼ぶ状況。
そんな中、すべての思考を投げ捨てて、それでも確認しなければいけないことができた。
そこにいるあいつは。
「ああ……、呪われてやがる」
手で顔を覆った。
吐き捨てた血反吐が、べったりと顔を汚す。
悪魔のようにどす黒く、地獄のような熱量が、私を更に突き落とす。

『待ちわびたぞ、トキワシティのメアよ』
殺したはずだ。
確かに殺したはずなんだ。
この手で、私は成し遂げたはずなんだ。
それでもなお、無駄だったっていうのか。
私は結局、運命の波に弄ばれるだけで、抗えないというのか。
『それともこう言った方がいいかな？』
絶望を感じたことは何度もある。
だが、心が折れる音を聞くのは初めてだ。
きっとこれを、本当の絶望というのだろう。
耳を塞ぐことも、自衛すらも億劫で。
何もする気が起きなくて。
ただ茫然と、その宣告を受け入れた。
『私が生み出した、虚数空間の可能性よ』
私にその絶望を突きつけた男は。
嫌に頭に響く声で告げるその男は。
私が確かに殺した男は。
間違いなく、間違いようもなく。
「サカキ……」
ロケット団のボス。
トキワシティのジムリーダー、サカキであった。
足元から地面が抜け落ちる。
支えを失った身体が、地球に吸い寄せられる。
否、本当は大地は失せてなどいない。
ただ地面の感触を伝える足が、まるで自分のものでなくなったかのように力無く、自らの重みすら支えられなくなっただけだ。
『大した期待はしていなかったが、存外上手くいくものだな。本当に可能性というのは恐ろしいものだ』
頭を地にすりつけて、両手で押さえつけた。
自分の殻に閉じこもりたかった。
誰からも干渉されず、誰にも干渉しない。

そんな世界に没入したかった。
『しかし、私を殺した存在だというのにこの様か。それならわざわざ、突きつける絶望を用意せずとも良かったかもしれんな』
涙を流したかった。
好きなだけ叫んで、叫んで、叫んで吐き捨てたかった。
だがどれも上手く形に出来ず、表現できず。
ただ嗚咽が醜く響くだけだった。
『だがまぁ、報酬として真実を教えてやろう』
私の世界を、あいつが踏みにじる。
誰にも譲れない、最後の防衛ライン。
あいつがそこに、一歩踏み出してくる。
『お前が生きてきた世界は、私が生み出した可能性の世界だ』
窓ガラスが割れるように、私の心の壁が崩れ去る。
そこから黒く、暗い何かがしみ込んでくる。
『私を倒し得るほどの手駒の存在する世界。その手駒がお前だ』
血が抜け落ちたわけでもないのに、体がどんどん冷えて行った。
私は知っている。
これが恐怖という物なんだろう。
『最初からお前は、私の道具になるためだけの存在だったのだ』
今更になって耳を塞ぐ。
けれどどこか頭に響く声を前に、その行いは無意味に等しかった。
『お前の見てきた世界など、本当は存在しない。すべてはありえない可能性の話だ』
『マサラタウンの者達は外に出ることを忌避する。それは呪いだ。その呪いを、ただの少女が破れるとでも思ったか？　自らの意思で旅発ったとでも思ったか？』
『疑問に思わなかったか？　右腕に傷を負った日より前の自分を理解できないことを。旅立たなければいけないという焦燥感に駆られたことを』
『そんな無数のありえないを抱えたバグ因子がお前で』
一呼吸おいて、たっぷりの含みを持たせて、サカキはこういった。

『私はお前の生みの親だ』
「あ、あぁ……」
視界が闇に飲まれるのを自覚した。
＊
「ここは……」
私が意識を取り戻したとき、私は知らないベッドに寝かされていた。
自分が気を失っていたことと、告げられた事実を思い出し、私は何もする気にはならなかった。
同じ姿勢で寝続けるのも億劫で、寝返りをうった。
すると足元からジャラジャラという音が鳴り響いた。
なんとなくわかったが、気になってしまったので確認してみる。
重い体を起こし、足元を覗く。
そこにはやはり、鎖が繋がれていた。
「逃亡対策、かねぇ」
ご苦労なこった。
こちとらもう、逃げる気力すらないというのに。
「ハッ」
そんな思考すら馬鹿らしくなり、自らを嘲笑する。
何も、何もなかった。
無駄だった。
サカキは、私がサカキを倒すことを待っていたんだ。
私が倒せるようになるまで、ずっと泳がせていたんだ。
「だったら、私は、何のために……！」
私が掲げた正義は何だったというのだ。
私が倒すべき悪など、最初から存在しなかったというのか。
何のために私は、悪の名を背負ったというんだ。
「あぁ……」
生きとし生けるものすべてに与えられる、唯一平等な、天からの贈り物。
死というそれすら、私には許されない。

私の中には、今までの記憶がすべて残っていた。
私が辿ったという、すべての並行世界を含めたものだ。
サカキを完全に仕留めた、一つ前の世界線。
サカキをあと一歩まで追いつめた、三つ前の世界線。
それ以外の全ての世界で私は死んだ。
死ぬ直前まで行った。
だが死ぬほんの少し前に、記憶を封印されて同じような過去を繰り返させられてきた。
「うっぐ」
逆流した胃酸を吐き出した。
十や二十では済まない自分の死に様を思い出させられて、気分の悪くならない筈がない。
喉元を食いちぎられた記憶。
ミュウツーに刺し殺された記憶。
世界に絶望し、首を吊った記憶。
それらすべてが、私の意識を奪おうとしてくる。
(気持ち悪い)
胃酸だけでも流そうと思い、水を求めて立ち上がる。
鎖に繋がれていても、この部屋ぐらいなら自由に動けるようで、どうにか洗面所までたどり着いた。
鏡には、私が映っていた。
「は、ははっ」
無様だな。
満足に笑うことも、好きに泣くこともできない。
満ち足りた死を迎えることも、充足した生を享受することも許されない。
嫌が応にも、自分が道具であることを思い知らされる。
「クソッ!」
右手で鏡に映る自分を殴りつける。
ジンジンとした痛みが鈍く伝わる。
もう一度拳を引き、殴りつける。

何度も何度も、決して飽くことないこの虚しさをを、少しでも満たすために。
「どうすればよかったんだよ！　常にこれしかないっていう選択肢を取り続けた。私だけじゃない、あの私もあの私も、あの私だって、常に最善を歩んできた！」
そのすべてがバッドエンドを築き上げるための壮大な、あるいはちんけな物語だったというのか。
フザケルナ、フザケルナ。
「たったそれだけの為に。サカキの道具になるためだけに。私は永劫に苦しみ続けたというのか」
また胃酸を吐いた。
吐いて、ようやくうがいをしに来たことを思い出した。
胃酸は喉を焼く。
そうなる前に、少しでも希釈してしまおう。
手で水を掬い、口をゆすぐ。
十分にゆすいだ後に手を洗い、顔を洗う。
それでも私の心は、一向に晴れなかった。
「なんだ、目覚めていたのか」
「サカキ」
警戒しようとして、腰のボールに手をかけようとして、私は気付いた。
この世界の私は、ポケモンを持っていない。
アーゴヨンも、マリルリも、向こうの世界にいるままだ。
「せっかく起きたところ悪いが、もう一度眠れ」
そう言うとサカキは、見たことのないボールから見たことのないポケモンを繰り出した。
白い、少女のような、クラゲのようなそれが私を飲み込む。
チクリとした痛みが首筋に刺さった。
自らの意識が遠のいていくのが分かる。
「ふむ、もう少し抗うかと思ったが」
サカキがそんなことを言う。

（抗う……？　どうして？）
抗ったって、すべて無駄なことだ。
その点、ここは心地がいい。
何も考えずとも、どうすればいいかこのポケモンが教えてくれる。
（もう、疲れたんだ）
だから、少しくらい。
（休んでも、いいよね）
私は私を、この白いポケモンに委ねた。

二話　色即是空

我思う、故に我在り。
これは誰の言葉だったか。
カロス地方の偉人のものだった気がするが……。
とにかく、そんな言葉がある。
この考えの根底には、すべてを疑えという物がある。
もし仮に私たちがゲームの中の住人だとして、それを見極めるすべはあるだろうか。
答えは否だ。
そういった『存在の疑わしいモノ』を、一切合切排していく。
この世界が五秒前に作られたと言われて、それを否定できるだろうか。
この世界は実は、水槽に浮かんだ脳が見ている仮想世界だと言われて、それを否定できるだろうか。
夢で見た蝶の自分が本物で、ここに居る自分が夢だと言われて、それを否定できるだろうか。
結局、私が捉えている世界は夢幻かもしれないということだ。
それでも。
それでも一つだけ。
確かに存在しているものがある。
それが、『そんなことを考えている私』だ。
仮に世界が虚空のもだったとしても。
もしも現実が架空だっとしても。
『それを疑っている私自身は確かに存在している』ということだ。
（そして存在する限り、永遠に苦しみがまとわりつく）
肉体を魂の牢獄と表したものがいた。
生命活動こそが苦しみの根源だと言ったものがいた。
生きていることは苦しい。
だから人々は妄信できる何かを求めた。
たとえばそれは神であった。

もしくはそれは涅槃であった。
あるいはそれは予定説であった。
はたまたそれは極楽浄土であった。
現状を打破する方法を模索するより、誰かの救いを求める方が楽だ。
だけど、救いの手を差し伸べてくれる者なんていない。
だからみんな、空想の存在を盲目的に信仰する。
疑うことは苦しいことだ。
苦しいことだから、多少の嫌なことに蓋をして、都合のいい事だけ信じる。
それを間違っているとは言わない。
私は信念を貫くことが、如何に大変なことか知っているから。
いつか描いた理想を、多くの人は泣く泣く捨ててしまうんだろう。
醜く腐敗した世界に絶望し、綺麗なものを求めるんだろう。
(そしてそれは、すごく楽なことだ)
白いポケモンに寄生され行く中、そんなことを思った。
思考放棄。
考えることを止める。
そうすれば苦しむこともない。
そこに私は介在しないのだから。
今までの鬱屈とした心内が、嘘のように軽くなる。
波に飲まれるのは恐ろしい。
かといって、波に抗うのは苦しい。
波に乗ることは疲れる。
だけど、自分自身が、波になってしまえば……。
＊
「ふむ、堕ちたか」
サカキは目の前の少女を見て呟いた。
彼女の目にハイライトは入っておらず、脱力した様子で棒立ちしている。
どこにも焦点が合っていないような、何も見ていないような。

そんな終焉を連想させる瞳をしていた。
「メアよ、これからアローラチャンピオンと国際警察がコンビで乗り込んでくる」
国際警察という単語を聞いた一瞬だけ、メアの右手の指がピクリと反応した。
それはもはや、脊髄反射のようなものであった。
「命令だ。何人たりともここを通すな」
そう言ってサカキは、ボールをメアに手渡した。
最近出来た、ウルトラビーストのためだけに作られたウルトラボールだ。
黒地に青のネットを張り、四本の黄色く鋭い爪を飾ったようなデザイン。
中には当然、ウルトラビーストが捕えられていた。
名前はウツロイド。
彼女に寄生している生物と、同じ寄生生命体だ。
頷くでもなく、首を振るでもなく。
彼女はただ踵を返して従った。
＊
ポニ島を襲った黒い雲について、エーテル財団が会見を開いたのが少し前の事。
原因はネクロズマというウルトラビーストだった。
その事を会長であるルザミーネさんが説明をし、その場は一時騒然とした。
けれども続く『勇気あるトレーナーのおかげで危機は既に去っている』という言葉に、明らかに緊張の糸が切れたことが分かった。
勇気あるトレーナーって言われると、ちょっと恥ずかしいな。
なんてことを思っていたのも、当然少し前の事。
カプ・コケコに認められ島巡りをして、チャンピオンになったけど、未だにそんな実感はない。
必死に、無我夢中に、駆け抜けただけだった。
その事を褒められても照れくさいだけである。

そんな感想を抱いたことも忘れるほど衝撃な出来事が起きた。
突如現れたウルトラホール。
現れた謎の黒服集団。
そして最後にルザミーネさんが放った言葉。
『まさかウルトラホールはあなた達が!?』
ルザミーネさんが危ない。
そんな予感が頭をよぎり、俺はすぐにエーテルパラダイスに向かった。
リザードンライドを呼び出し、空を駆ける。
そうしていると俺と同じように空を走るものが、後方から追いかけてきた。
「サン君!」
「リラさん!」
そこにいたのは国際警察のリラさんだった。
リラさんとはかつてウルトラビーストを捕獲するために共闘したことがある。
「リラさんもニュースを見て?」
「いや、私の場合は上からの指示だ。エーテルパラダイスにウルトラホールが開いた。至急対処に向かえという物だ」
風切り音がうるさく、俺もリラさんも大声で叫ぶ。
それでも聞こえる音はわずかなものだ。
「俺も手伝います!」
「助かる! 急ごう!」
俺達は振り落とされないように必死にしがみ付き、全速力でエーテルパラダイスに向かった。
そこで俺たちが見たのは、変わり果てたエーテルパラダイスだった。
悪魔のように黒く、地獄のように赤く。
虹色のRを掲げた巨大な城。
「リラさん、これもウルトラホールの影響だと思いますか?」
「どうだろうか。だが警戒するに越したことはないよ」

「ですね」
俺達は慎重に建物に忍び込んだ。
やっていることは盗人のそれと似たようなものだが、こちらには人命救助の大義名分がある。
故に正義はこちらにある。
「内側の見た目も変わっているんですね」
俺の囁きにリラさんが小さくうなずく。
それよりと、リラさんが付け加える。
「おかしい。これだけ大きなことを仕出かしておきながら、見張りの一人もいない？」
「……確かに変ですね」
物陰から部屋の様子を探るが、人影どころか人気もない。
アローラで最も有名な建物を乗っ取っておきながら、なぜこうも軽薄な警備なのか。
「何か意図があるかもしれませんね」
「そうだね、警戒しながら進もう」
まっすぐ進めばルザミーネさんの部屋に繋がっているはずだ。
取り敢えずまっすぐ進もうとリラさんに言えば、リラさんも納得してくれた。
そして俺たちは知ることになる。
どうして警備がいなかったか。
否。
警備が不要な理由を。
＊
そこにいたのは、一人の少女。
この建物に相応しくない、一人の少女である。
足首から赤い鎖が伸びていて、部屋の端にあるベッドの足に繋がれている。
「リラさん」
「静かに」
俺がリラさんに声を掛けようとすると、それをリラさんが制した。

確かに気が緩んでいたかもしれない。
ここは既に敵の腹の中なのだ。
「誰？」
しかし手遅れだった。
少女は既に、こちらの存在に気付いてしまった。
じんわりと汗が、手の内に広がっていく。
リラさんにアイコンタクトを送り、俺が先に向かうことにした。
リラさんは後方で待機。
岡目八目というやつだ。
「はじめまして。俺はサン。君は？」
「私……私は……メア？　メアリー？」
「……えっと？」
俺は状況が飲み込めなかった。
彼女は場違いなほどに純粋であった。
（迷子？　そんなことあり得るのか……？）
どうにも彼女がこの事件を引いているとは思えない。
深くかかわっているとも思えない。
だがしかし、それならば何故こんな場所にいるのか。
（もしかして、彼女もＦａｌｌなのか？）
俺やリラさんのようなウルトラホールを通った人間の事を、国際警察ではＦａｌｌと呼ぶ。
そしてＦａｌｌは、別の世界からやって来る場合もある。
リラさんも記憶喪失だと言っていた。
この子が名前に対して曖昧な答えしか返さないのは、記憶が混濁しているからなのではないか。
どうする、一刻も早くルザミーネさんの救出に向かいたい。
だけど無関係な人をこんなところに置いて行くのも危険だ。
どうする。
「オーケー。すぐに君を迎えに来るから、ちょっとの間だけ隠れていてくれ」
「隠れる……？」

「うん、その先の部屋で用事を済ませたらすぐに戻ってくるから、待ってて？」
彼女が不安にならないように、笑顔で対話する。
前に笑い方がぎこちないと言われたが、無表情よりはいいだろ。多分。
「この先の部屋に用があるの……？」
「え？　ああ、うん」
だから、ね？
そう、俺が声を掛けようとした時だった。
「ダメ、ダメだよ。ここから先に、誰も通しちゃいけない。あは、あはは」
「えっと？　メアリーちゃん？」
突然口を三日月のように歪めて、彼女が嗤った。
「サン君！」
俺は飛び出したリラさんに弾き飛ばされた。
目を見開き、視線を送った先では、リラさんが――
――毒液を浴びる様子が映っていた。

三話　勝利は一通りじゃない

「リラさん！」
「うぁぐ……」
俺は慌ててリラさんに駆け寄る。
リラさんの足は焼けただれていて、まともに歩ける様子ではなかった。
「あは、アハハ」
「お前ッ！」
俺はコレを仕出かした彼女を睨みつけた。
睨みつけて、見てしまった。
彼女の背後にとりつく、その白いポケモンを。
「ウツロイド……!?」
クラゲのような、少女のようなそのポケモンは、ウルトラスペースに住む異界の生命体だった。
ウツロイドは寄生ポケモンに分類され、様々な逸話が残っている。
曰く、寄生された人が暴れ出した。
曰く、超刺激的な覚醒作用のある強力な神経毒を持つ。
曰く、ウツロイド達を守るように宿主の意識を誘導する。
とにかく、ウツロイドに寄生されるというのは非常に危険なことなのだ。
そして目の前の少女は、寄生されている。
「うぅ……サン君」
「あれ？　意外と元気なんだね。そうだ、お姉さんもこっちにおいでよ。ここは心地がいいから」
そう言って彼女はボールからウツロイドを繰り出した。
二体目の、ウツロイドである。
ここでリラさんが敵に回るのはキツイ！
「させるかッ！　行け！　ガオガエン！」
ウツロイドはそのクラゲのような見た目とは相反し、毒岩タイプのポケモンだ。

おそらく石英と神経毒を持つことからなのだろうが、初見殺しもいいところだ。
だが俺は、既に知識を持っている。
「地団駄だ！」
故に選んだ地面技だった。
ウツロイドを踏みつけるために、ガオガエンが飛び上がる。
まずは一体、確実に処理する！
「ウツロイド」
そんな俺の考えは。
脆く崩れ去る。
「サイドチェンジ」
目の前の少女が天に手を掲げそう呟く。
次の瞬間には、ウツロイドとガオガエンの位置が逆転していた。
本来味方と位置を入れ替える技。
それをさも当然のように、縦方向に、敵味方問わず入れ替えた。
突然現れた地面に足を取られたガオガエン。
ひれ伏せと言わんばかりに天から見下ろすウツロイド。
「堕ちろ、パワージェム」
「ガオガエン!!」
彼女がその手を振り下ろす。
宝石のような光が、ガオガエンを貫く。
ガオガエンが苦手な岩タイプの技を食らい、そのＨＰを大きく削られる。
「くっ、戻れ！」
地面を踏み抜き、身動きの取れないガオガエン。
彼をその場に置いていても恰好の的になるだけだ。
それを回避するために、一度ボールに戻して仕切りなおす。
いや、仕切り直そうとする。
「ステルスロック」
そんな考えも、あっさり破られる。
炎タイプのガオガエンは、ステルスロックが苦手だ。

ボールから繰り出したとたんに、わずかに残った体力が削り取られる。
事実上、瀕死になったのと同じことだった。
「……強い」
今まで出会った誰よりも、間違いなく。
チャンピオンと言われ、増長していた。
最強と言われ、浮かれていた。
所詮井の中の蛙でしかないというのに、大海を知った気でいた。
「邪魔、しないで」
彼女がそう口にする。
そこには抑えきれない怒りの色が見えた。
怒っているのだ。
目的を邪魔しようとする、俺の存在を。
その激しい殺気に、俺は確信する。
（迷子なんかじゃねえ、確実に、この出来事に関わってる！）
そしてそれは非常にまずい。
アローラ最強である自分を、いとも簡単にいなす存在。
そんな人物が、敵に回っている。
それはつまり、歯向かえるものが存在しないことを表す。
「くっ、来い、ジャラランガァ！」
修行を極めしツワモノ。
弱い訳がないポケモン。
「行くぞ！」
「ウツロイド!!」
ゼンリョクのＺワザで一気に流れを呼び込む。
その力の本流に気付いたのか、対処しようとしているようだが間に合うわけがねぇ。
一撃必壊。
故にゼンリョク。
故にＺワザ。
「喰らえよッ！　ブレイジングソウルビート!!」

鋼の鱗を鱗で弾き、衝撃波を生み出す。
その衝撃波がさらに鱗を揺らし、さらなる衝撃を生み出す。
鼠算式に増していくエネルギーが、ウツロイドに襲い掛かる。
音速の一撃が、敵を捕らえる。
地面が崩れ、コンクリート片が巻き上がる。
土煙を巻き起こす。
その煙幕の向こうから、極大の閃光がジャラランガを貫いた。
「……え？」
一撃。
たった一撃のもと、ジャラランガが落とされた。
あり得ない。
ブレイジングソウルビートには、能力が上昇する効果がある。
不可能だ。
特防の上がったジャラランガを一撃で倒す技を、ウツロイドは覚えない。
土台無理なのだ。
そもそもウツロイドがブレイジングソウルビートを受け切ることが。
土煙が晴れる。
そこにいるのは、ボロボロになりながらも耐えるウツロイドと、鏡のような反射板。
「気合の襷に、ミラーコート……！」
背筋が凍り付いた、そんな気がした。
ミラーコートは受けた特殊技を倍返しで返す技だ。
強力な一方、大きな隙も作りやすい危険な技だ。
それを実戦で、息を吐くように使ったとでもいうのか。
あり得ないと否定する。
だが現状は、それ以外の可能性を否定した。
認めるしかない。
このままでは俺に勝ち目がないことを。
「戻れ、ジャラランガ」

それでも、俺はまだ負けていない。
まだ戦える。
「勝負はここからだ」
一つのボールを取り出す。
俺の思いに呼応して、僅かに熱を帯びる。
微かに胎動する。
「行くぜ、ソルガレオ！」
相手があと何体持っているのか分からない。
もしフルパーティならば、勝利は絶望的であろう。
ただし、まっとうに勝負を挑んだ場合、であるが。
「リラさん、これを」
「これは？」
「俺のマシェードです。痛みを緩和するぐらいならできると思います。それで先に向かってください」
リラさんに駆け寄り、小声で作戦会議をする。
少女は何を考えているのか、あるいは何も考えていないのか。
その間妨害しに来ることはなかった。
「サン君は……？」
「あー……、参ったなぁ」
俺は帽子の上から頭を掻いた。
昔からやってみたかったんだよな。
ここは俺に任せて、先に行けってやつ？
でも、どうにも俺にはかっこよすぎて似合わねえや。
「俺が足止めをします」
「いや、彼女を倒してから一緒に……」
「認めましょう。彼女は、確実に俺達よりも強いです。二人で挑んでも、勝てるかどうか」
だから、と。
俺は続ける。
「俺が彼女を連れてウルトラホールに向かいます。その隙に、先に進んでください」

「だがしかし」
「いい加減にしてください。あなたに与えられた使命は何ですか」
リラさんがハッとする。
リラさんが優先すべきは、より多くの人の安全。
そのために、ウルトラホールの対処をすること。
だから俺は、リラさんに託すことにした。
「……」
「そんな顔しないでください。それが正しいんです。だれも憎みませんよ」
「……サン君、すまない」
「こちらこそ、すみません。それでは、行きます」
ソルガレオのたてがみを掴み、背中に飛び移る。
真正面から彼女と向き合うが、彼女は一切臆する気配を見せない。
神話の生き物でさえ、彼女にとっては強敵足りえないのだ。
「ねー、話し合い終わったー？」
「えぇ、お待たせしました。今から行きます、よっと！」
俺は風になった。
リラさんを後押しするための、一陣の風に。
彼女の後ろでウルトラホールが開く。
ソルガレオに頼んで開いてもらったものだ。
彼女が振り返り、驚くがもう遅い。
「行っけぇ！」
「なっ、くそッ！　放せ！」
ソルガレオの牙が、彼女を確かに加える。
じたばたと手足を動かすが、ソルガレオの前では無意味だ。
彼女に寄生しているウツロイドと、ソルガレオの真っ向勝負。
となれば、ソルガレオの方が力強い。
徐々に、徐々に、ウルトラホールに押し込んでいく。
こちらの目的は、彼女を戦線から引き剥がす事。
そう考えると、少しは余裕が出てきた。
「ヘイ彼女、君かわいいね……！　ちょっとお茶しようぜ！」

「茶化すなぁ！」
「お、上手いこと言うねぇ……！」
「邪魔を、するな!!　私の前に、立ちふさがるなァ！」
まったく、悲しいぜ。
アローラのチャンピオンが神話のポケモンを駆使して、同い年くらいの女の子一人押さえつけるのがやっとだなんて。
それでも、俺は俺のすべきことをする。
だからリラさん。
（あとは任せましたよ）
最後にちらりと、リラさんに視線を送る。
その頬を伝う雫に気付かない振りをして、俺はまた向き直った。
「うおぉぉぉ！」
ウルトラホールが、俺たちを完全に飲み込んだ。

四話　赤報隊

やったと。
そんな確信があった。
ウルトラホールをこじ開けられるのは、ソルガレオとルナアーラだけだ。
神話に匹敵するほどの実力をもって初めて可能になる技なのだ。
彼女がいくら強くても、他にウルトラビーストを携えていても。
この空間に閉じ込めている限りリラさんの邪魔をすることはできない。
急いでホールを閉じる。
折角捕まえたのに、逃げられましたじゃ話にならない。
彼女の油断が引き起こしたこの好機を、決して逃してはいけない。
「……？」
おかしい。
ホールが、閉じない？
そんなはずはない。
そう思い、振り返る。
そこにはやはり、閉じない穴。
「邪魔を、スルナァァァ!!」
「なっ」
一度は抑え込んだはずの彼女が、再び押し返してくる。
ソルガレオのパワーを超える力で押し込んでくる。
（そんな馬鹿な!?）
先ほどそんなことをするのはバカだと言ったはずの愚行を、俺自身が。
身をもって実行してしまうことになった。
すなわち、俺と彼女は再びホールの外側に飛び出したのだった。
＊
サンは知らなかったが、彼女はマサラ人の血を引いている。
逆境に陥れば、背水の陣に立たせれば、限界以上の力を引き出す。

それは例えば、レッドがミュウツーのテレポートに抗い、無効化した物と同じだ。
「かぁーふぅー、はぁ」
それでもやはり、リミッターを外した活動は負荷がかかるのか。
彼女は肩で呼吸をしていた。
「サン君!?」
「う、ってぇ。すみませんリラさん、しくじりました」
謝る一方で、サンは思考を加速させる。
論点は、何故ホールが閉じなかったかだ。
(くそ、ホールさえ閉じてりゃこっちのものだったっていうのに。なんでだ、なんで……)
それを引き起こす原因となりえそうなものを、一つ一つ検討していく。
ソルガレオの体調が悪かった?
それはない。彼は手持ちのコンディションはきちんと把握している。
彼女の手持ちに、ホールに干渉できるほどのポケモンがいる?
否、他に可能なのはルナアーラだけである。
加えて、それが可能ならばあそこまで怒り狂う必要がない。
ならば何故、ホールは閉じなかったのか。
「く、はは」
彼女は嗤う。
楽しそうに、愉しそうに。
「赤い鎖……ねぇ。サカキも粋な事してくれるじゃん」
「赤い鎖……!?」
「知ってるのかリラさん!?」
「ああ」
リラが小さく首肯した。
そして言葉を紡いでいく。
「とはいえ、私もハンサムさんから聞いた話に過ぎないが……昔、シンオウ地方で大きな事件が起きたらしい」

「シンオウ地方？」
「ああ、その地方には二匹の伝説のポケモンがいた。一体は時間をつかさどるポケモン、ディアルガ」
「あの、リラさん……。話が見えてこないんですが――ッ！」
先ほどの作戦タイムは傍観していた彼女だが、今度は攻撃してきた。
サンには彼女が分からなかった。
何がしたいのか、なぜここに居るのか。
まったくもって不明瞭であった。
「今、ハンサムって言った？」
もともと暗かった瞳に、今度は闇を携えて。
彼女はそう問いかける。
底冷えするような、凍てつくような声で。
「答えてよ、あなた達、ハンサムとどういう関係なの？」
「……私の部下だ」
「国際、警察……？」
彼女が小首をかしげて問いかける。
そこには一切の愛嬌も、可愛らしさも存在しない。
ただただ、圧倒するような空気だけがそこにあった。
「そうだ」
リラがそう答えると、彼女は地面に顔を向けた。
サンは彼女の肩が、小刻みに揺れていることに気付いた。
泣いているのかと思い、手を伸ばしかけ。
そして彼は凍り付いた。
「……アハァ」
＊
催眠術や金縛りなんてちゃちなもんじゃない。
もっと、もっと別の何か。
恐ろしいものの片鱗。
それを俺は彼女から感じ取っていた。
「そういえば、サカキが言ってたよね。チャンピオンと、国際警察が来

るって。てことは、あんたがチャンピオン？」
「あっがっ」
その二つの眼が、俺を捉えた。
その不安、その悪寒、その恐怖。
それらから俺は逃げ出そうとする。
足がすくむ。膝が笑う。
まるで自分のものでないかのように、言うことを聞かなかった。
「……あなたは、つまらなさそうだね」
彼女の興味が俺から外れる。
助かったと思った。
死ぬかと思った。
いまだに手が震える。
彼女に、恐怖を抱いている。
「あ……」
そして気付いた。
俺から注目が外れたということは、彼女は今何を見ているのか。
当然、リラさんだ。
「やめっ」
手を伸ばす、いや、伸ばそうとする。
けれど地面についた手のひらは、まるで縫い付けられたこのように動かない。
やめろ、やめてくれ。
「助け」
声すら自由に出せない。
それでも、リラさんを助けて欲しかった。
誰でもいい。
俺に出来る事なら、何だってする。
だから、だからっ。
誰か、助けてッ!!
「ねぇ」
彼女がリラさんに声を掛ける。

リラさんの足は、いまだ焼けただれたままだ。
俺が時間を稼げなかったから。
俺の、せいだ。
「前から気になっていたんだよね」
彼女がリラさんに馬乗りする。
そうして顔を近づけて、こういった。
「どうして国際警察が正義なの？」
＊
「……どうして、とは？」
私の質問に、紫髪の国際警察が質問で返す。
質問に質問で返すなと習わないのかな、最近の若者は。
まあ私の方が若いんだけどね。
さて、思考から靄のようなものが抜けて行ったと思ったらこの状況だ。
何がどうなったし。
そんな思考をしようとすると、それを遮るように白いポケモンが私を操ろうとする。
「チィ、邪魔なんだよ」
それを超自我で抑制する。
黙ってろ。
「ねぇ、危険だからという理由でポケモンを殺すあなた達。ポケモンからすれば、あなた達の方がよっぽど危険よね？　だというのに、あなた達がポケモンを殺す事は正義で、あなた達に抗うことは悪になる。そこに一体、どれだけの違いがあるの？」
「あなたは……一体何を」
「教えてよ……。私たちが何をしたっていうのさ。どうして私たちに、一方的に悪の名を背負わせたのさ」
涙が鼻筋を伝っていく。
重力で引き離された雫が、目下の国際警察の目じりに落ちた。
「私は、どうすればよかったっていうの……？」
絞り出すように、そう呟いた。

目の前の彼女は、何も口にしない。
「……だんまり、なのね。いいわ、もともとあなた達に期待なんてしていないもの」
引いていた殺意が、沸き上がってくる。
押さえつけていたウツロイドが、喜びながら私に囁く。
殺せ、と。
「じゃあね、負け犬」
両の手で、彼女の首を絞める。
絞殺には、およそ五分が必要だと言われる。
もっとも意識が残っているのは最初の数分くらいだが、確実な死を前に恐怖するがいい。
今ある生に感謝して、今生きる道に後悔し、今からくる恵みを賜るがいい。
私から散々奪われたそれを、私がお前に恵んでやる。
「あっガッ」
私の下で、彼女が悶える。
押さえつける量の腕を、必死に引き剥がそうとする。
爪が食い込み、私の肌を引き裂いて行く。
それでも私は、手を緩めない。
頭に声が響く。
目の前の邪魔者を排除しろと反響する。
うるさいな。
少しくらい黙ってみていろ。
その時だった。
このポケモンに寄生され、鋭敏化された私の知覚が、空間の揺らぎを感知した。
見れば空間に穴が開いている。
さきほどソルガレオが開いたものと、類似のものだ。
そしてそこから、一人の青年が飛び出した。
赤を連想させる、その青年。
記憶にある容姿より、いくらか大人びた彼。

だが、見間違うはずもなかった。
「ここか!? アーゴヨン!」
ホールを飛び出し、現れたのは。
紛れもない、私の弟。
「レッド……?」
「……ただいま、メア姉」

五話　メテオドライブ

ウツロイドには、特殊な神経毒がある。
その毒には人を凶暴化させたり、理性を弱めたりする効果があるのだが、本題はそこではない。
それに侵されたものは、ウツロイドを守ることを優先するという物だ。
宿主は、命を懸けてウツロイドを守り抜く。
仇為すものを、許さない。
レッドはメアの助けになりたい。
そのために、邪魔なウツロイドを除去したい。
ウツロイドにとってレッドは敵である。
つまりどうなるか。
「あ……」
メアの焦点がぼける。
その瞳は、丸で何も映していない。
「かはっこほっ」
メアの絞首から逃れたリラがせき込む。
自由に酸素を取り込む。
「かぁはぁー、サン君、聞いて。赤い鎖には、伝説のポケモンが関わっているの」
「伝説のポケモン……？」
「そう、一体は先ほども言った通りディアルガ。もう一体は空間をつかさどるポケモンパルキア」
その言葉に、サンが反応する。
「空間!?」
「先ほどウルトラホールが閉まらなかったのはきっと、赤い鎖のせい！」
彼女の足首に繋がれた鎖を見る。
決して神聖なもののようには見えないが、十分にあり得る話だ。
「ごめんな、クワガノン。頼む、ハサミギロチンだ！」

クワガノンは虫電気タイプ。
空中にちりばめられたステルスロックは未だ有効で、その体力を大きく削っていく。
それでもお構いなしといった様子で、赤い鎖にとびかかる。
そしてその大きなハサミで、断ち切った。
「あああぁぁぁぁぁぁ！」
少女の悲鳴が響き渡った。
＊
「お前、何をした!?」
レッドは焦っていた。
数年の時を超え、アーゴヨンを鍛え、様々な資料を漁り、姉の存命の可能性を見出し、世界線まで超えてきた。
だというのに姉は変な生物を頭からかぶり、人を絞め殺そうとしている。
まあ相手が国際警察だったから止めなかったわけだが。
問題はその後だ。
変な顔した子供が、姉に繋がれた赤い鎖を断ち切った瞬間苦しみだしたのだ。
疑うなというのが無理な話である。
「俺は、鎖を切っただけで……」
「鎖を切っただけで人が苦しむものか！」
「いや、それは」
そうこうしている間も、姉は苦しみ続けている。
「くそっ、何がどうなってるんだよ。来い、マリルリ！」
レッドが繰り出したポケモンは、かつてメアが孵したマリルリ。
メアのポケモンは、レッドがきちんと育てていた。
「水浸し、続いて渦潮だ！」
水浸しは相手を強制的に水タイプにする技。
渦潮は、渦巻く海流を呼び寄せる技だ。
水タイプになったウツロイドは、為す術無く剥がれかける。
先ほどブレイジングソウルビートを受けたウツロイドは残ったわ

ずかな体力すら削られた。
「ダメ！」
それをメアが抑えた。
渦から抜け出し、必死にウツロイドを庇う。
瀕死になった方のウツロイドをボールに戻す。
「あ、ちょ、メア姉！」
「寄るな！」
その言葉が、レッドの心を引き裂いた。
姉に会うために、何年も何年も、待ち続けたのだ。
だというのに、彼は拒絶された。
「おいお前」
「な、なんですか」
「そのでかいライオンで、あの白クラゲを倒せるか？」
何度繰り返しても、姉を傷つけるだけだと判断したレッドは、仕方なく他人の力を借りることにした。
ちょうど近くにはソルガレオを待機させたサンがいる。
サンに目を付けたことも、ある種当然であった。
「多分、できます。でも、あの人から引き剥がしてからでないと……」
「上等。タイミング、間違えるなよ？」
そう言うと、レッドはマリルリに指示を出した。
「滅びの歌」
＊
滅びの歌。
聞いたポケモンはしばらくすれば瀕死になる。
これの対処法は、大きく分けて三つの手段が存在する。
一つ、歌わせない。
これには先制で倒す、補助技の挑発、攻撃技の地獄突きなどが当たる。
そもそも歌われなければどうということはないという考えだ。
二つ、聞かない。
これには特性の防音がある。

音を遮断してしまえば滅ぶこともないという考えだ。
そして、三つ目。
「戻れ、マリルリ！　行け！　ストライク！」
交代する、である。
ポケモンの状態異常には、ボールに戻すことで解除されるものがある。
例えば混乱状態、心の目状態、呪い状態などだ。
その中には当然、滅びの歌状態も含まれる。
「さぁさぁ、一度引っ込めないと瀕死になっちゃうよ？　メア姉」
「……なんでこんなことするの」
「……ごめん」
レッドがメアに捨てられたと感じたように、メアもまた、レッドに捨てられたと感じた。
辛いとか苦しいとか。
そういう感情があふれて、抑えきれなかった。
「ウツロイド、一度戻って」
滅びの歌の対処方法、その一その二はもう取れない。
既に手遅れだ。
ウツロイドはその歌を聞いてしまっている。
ウツロイドがメアに、自分を助けろと指示を出す。
メアはウツロイドを守らなければいけない。
メアが腰に付けたボールを取り出す。
そしてリターンレーザーをウツロイドに向けて放つ。
その一瞬を、レッドは虎視眈々と待っていた。
「ストライク、追い討ち！」
「しまっ」
普段のメアならば、絶対におかさないミス。
滅びの歌には制限時間があると言えど、それなりに猶予のある技だ。
正常な思考を持っていたならば、先にストライクを倒してから交換しただろう。

だが、そうはならなかった。
今、メアは自らの思考より、ウツロイドの思考を優先している。
それが判断を鈍らせた。
例えば水槽に入れられ、徐々に水を入れられるとする。
タイムリミットは三十分。それまでに水槽から出られなければ死ぬ。
そんなゲームに参加させられたとして、三十分間フルに思考できるか。
本来俯瞰していなければいけないトレーナーが、ポケモン視点で勝敗を考えた。
深く読まなければいけない場面で、読み切れなかった。
「だめ……」
引き剥がされたウツロイドに、メアは手を伸ばす。
ウツロイドもまた、宿主を求め触手を伸ばした。
あと少し、あと少しというところで。
それは阻まれた。
「メテオドライブ!!」
大きく飛び上がっていたソルガレオ。
強力なパワーを解放し、ライジングフェーズとなったソルガレオ。
太陽と錯視するほどの熱量を放出し、流星のようにウツロイドに喰らいつく。
メアは思わず手で目を覆った。
その光が眩過ぎたのだ。
目を閉じても瞼を貫通する光量。
それを防ぐために、腕で目を隠した。
爆音が耳をつんざく。
聴覚が麻痺したかもしれない。
三半規管が揺すられて、平衡感覚が鈍る。
土煙が巻き上がる。
慌てて息を止めるも、既に一部が呼吸器官に入ってしまった。
むせ込み、吐き出す。

「うっ……」
メテオドライブの光にあてられた瞳は、正しく景色を捉えない。
視界が白に埋まり、輪郭がぼける。
ゆっくりと、ゆっくりと瞳が暗順応していく。
虹彩が縮み、瞳孔が開く。
そこには白い寄生生命体を踏み潰す、太陽を喰らいし獣の姿があった。
それを見たメアは、糸の切れた操り人形のように、崩れ落ちた。
「メア姉！」
＊
「あの、レッドさん……ですよね？」
「一応ね、君らの知ってる俺とは別人だろうけど」
サンはレッドに声を掛けた。
サンは一度、バトルツリーでレッドと戦っている。
だからこそ、違和感を覚えていた。
サンの記憶にあるレッドとは手持ちも違うし、見たところメガストーンも有していないようだ。
近寄りがたい雰囲気は同じであるが、その原因がどこか違う気がする。
サンの知っているレッドは眩しすぎて近寄りがたく、ここに居るレッドは暗すぎて近寄りがたい。
それに似たような感覚を、サンは抱いていた。
「別人……？」
「そ、俺は言っちゃえば並行世界の俺。君ら視点だけどね」
サンはいまいちレッドの言ってることが分からなかったが、少なくとも敵でないと判断した。
たとえ違う世界のレッドだったとしても、正義の味方であることに違いはないと考えたからだ。
それほどまでに、ロケット団の単独撃破というのは伝説的だったのだ。
「あの、アローラの危機なんです。一緒に戦ってくれませんか？」

言いながら、サンは気づく。
この建物にあるＲの文字。
これはロケット団のものと同じだと。
「きっと、ロケット団がまた悪さしているんです。レッドさんの力が必要なんです」
サンはツリーでレッドに勝利している。
だからこそ、レッドの強さをサンは知っている。
だからサンはレッドに協力してほしかった。
それに対し、レッドはただ単に。
「……興味ないから」
そう答えた。

六話　三十六計逃げるに如かず

「……興味ないから」
　そう告げられた。
　リビングレジェンドから。
「な、なんで」
　世界の危機だというのに。
　ロケット団が暗躍しているというのに。
「そのままの意味だよ。君らがロケット団を倒そうと、ロケット団が野望を成し遂げようと、俺には関係ない」
「そんな……、放っておいたら多くの人が苦しむんですよ!?」
「勘違いするな。もともと俺はこの世界の住人じゃない。どうしてもというなら、この世界の俺に頼るんだな」
　そう言って、レッドは立ち去ろうとした。
　先ほどまで立ちふさがっていた少女を抱えて。
　引き留めなければいけないと感じた俺は、地雷を踏み抜くことになった。
「あなたに正義の心はないんですか!?」
「正義？」
「この世に悪が蔓延っている。多くの人が苦しんでいる！　どうしてそれを、見て見ぬ振りできるんですかッ！」
「黙れよ」
　レッドさんの視線が突き刺さる。
　赤く燃える瞳が、酷く冷たかった。
「お前が何を信念に持とうが知ったことじゃない。俺も昔は、お前みたいに考えていたこともあったしな」
「だ、だったら」
「だがそれを俺に押し付けるな」
　ぴしゃりと、レッドさんが言葉を断ち切る。
　断ち切った後に、言の葉を紡いでいく。
「違うんだよ、俺が守りたいものと、お前らが守りたいものは。お前ら

は森ばかり見て、木を見ようとはしない。山火事が起きたなら、火の手が広がる前に進行方向の木を切り倒す。そんなことを平気でやってのける」
ああそうだ、と。
間違っちゃいないさ、と。
レッドさんは続ける。
「それがより多くを助けることに繋がるからな。その為なら少数の命が切り捨てられようと構わないんだろ？」
俺は違う、と。
レッドさんは力強く宣言する。
「俺が守りたいのは山じゃねえ。この目に映る大切な人、大切な仲間。そいつらさえ守り抜ければ、あとは何もいらねえ」
だから、と。
レッドさんが話を締める。
「それを周囲が悪だというのなら、俺は喜んでそれを背負ってやるよ」
俺は、俺は何も言い返せなかった。
レッドさんの例え話が、脳内でリフレインする。
（俺が倒してきたスカル団。彼らにあった繋がりを、俺は断ち切った。断ち切ってしまった）
結果として俺は、アローラの島民に感謝されることをした。
多くの人にありがとうと言われた。
一方で、解散になったスカル団の事なんて目も向けていなかった。
彼らを繋いでいた、スカル団という絆。
それを俺は切り捨てておいて、みんなの役に立ったと思っていたのか？
いや、でも。
スカル団が迷惑をかけていたのは事実なんだ。
やっぱり悪いのはあいつらで。
でもそもそも、スカル団というのは島巡りという制度のせいでできたものだ。
となると、島巡りを作ったこの風習が悪いんじゃないか。

どっちだ。
どっちが悪いんだよ。
分からなくなっちまった。
何が正しくて、何が悪なんだ。
「……まぁ、そういうわけだ。やりたきゃ勝手にやってろ。俺は俺の勝手にする」
そう言ってレッドさんが立ち去ろうとする。
引き留めなきゃ。
そう思ったが、俺でない人物がそうしたせいで、俺は何もせずに済んだ。
「それは許さん。そいつは私の道具だ、置いていって貰おう」
「……サカキか」
部屋の向こうから、男が現れる。
オールバック風の黒髪に黒いスーツ。
顔は彫りが深く、目つきは鋭い。
そして胸元に付けられた虹色のRの文字。
「それにしても驚いたぞ。まさかお前までこの世界に来るとはな」
「俺は当然だと思うけどね。想像力が足りないんじゃないか？」
「ふは、ふはは、そうだな。さて、そんな私の想像を超えたお前に提案だ。私の部下になる気はないか？」
「断る」
サカキの提案を、速攻で切り捨てるレッド。
サカキは少しだけ興味深そうに声を零した。
「ほぅ。何故だ？　聞いていた限り、お前は正義も悪も関係ないようだが？」
「頭お花畑か。メア姉を苦しめる事しかできない奴の下になんざ誰が付くかっての」
そう言うとサカキは納得した。
次いで目を閉じ、鼻で笑う。
「そうか、ならば仕方ない。力づくで制御下に置かしてもらおう。行け、ウツロイド」

「誰が……ストライク、かまいたち！」
風が巻き起こる。
砕けたコンクリート片を巻き込み、質量を持った嵐となる。
「ウツロイド、パワージェムだ」
「迎え撃て」
かまいたちは溜を有する技。
その分威力は大きいが、何分相性が悪い。
パワージェムと相打ちになり、巻き込んでいたコンクリート片が弾け散る。
土煙が、ウツロイドを包み込む。
「ストライク」
レッドが指示を出す。
ストライクが頷く。
心を以て心に伝える。
「爆ぜろッ！」
次の瞬間、土煙が爆発した。
「むっ！」
一瞬サカキの思考が止まる。
爆発で生じた光エネルギーが、レッド達を視界から隠す。
その瞬間に、レッドはアーゴヨンの力でウルトラホールに飛び込んだ。
「リラさん！」
その隙に便乗し、サンとリラも逃亡を図った。
彼らも同様に、ソルガレオの力で退散した。
「……逃げられたか」
爆発で損耗したウツロイドを見て、サカキは呟いた。
「まぁいい。その間にルザミーネを支配下に置いてしまえば、それですべてが片付く」
メアが現れたことにより、彼らが一度引いたことにより。
歴史は正史から、ほんの少しだけ悪い方に傾いた。
＊

「レッドさん、今のは？」
「なんだお前ら、ついてきたのか」
ウルトラホール内で、サンとレッドが会話していた。
「粉塵爆発って言ってな、空気中に一定以上の粉物がある場所で着火すると爆発が起きるんだ。それを利用しただけだ」
「でも、レッドさんが使っていたのはストライクですよね？」
「さぁ、ストライクが火を起こせないと誰が決めた？」
レッドはサンを味方だと思っていない。
故に、仕組みは教えても仕掛けはばらさない。
「目覚めるパワー、ですか？」
「……」
それを見破ったのはリラであった。
レッドからすればリラは、サン以上に信用できない人物だ。
理由は一つ。
姉を苦しめた国際警察だから、である。
「目覚めるパワーを、ストライクに……？」
「さぁな。さっきも言ったはずだ。お前たちの常識を、俺に押し付けるな」
メアに『常識に囚われるな』とシルフで言われて以来、レッドは根底から学びなおした。
それが水浸しや渦潮を使うマリルリや、目覚めるパワーを持ったストライクである。
マリルリの特性は力持ち。
特殊技を使うより、物理技で殴る方がＤＰＳは高い。
それでも、ＤＰＳだけが勝敗を左右するわけではない。
幅広い戦術を有するということは、より多くの戦況に柔軟に対応できるということだ。
レッドはそういう、相手に応じて戦えるパーティにしたのだった。
「で、お前らは逃げ出してきてよかったわけ？」
「いや、早くしないとルザミーネさんが……、でも、戦力が足りない。ここは一度立て直す場面だ」

「……色々考えてんのな」
レッドはこれまで、サンに少しだけ自分を重ねていた。
自分と言っても、もう数年も前の自分だ。
ハンサムに出会い、ロケット団と戦い、自分を正義だと錯覚して。
目の前の少年は、きっと昔の俺と同じなんだろう、と。
そんなことをレッドは考えていた。
だがしかし、レッドは周りを見れていなかった。
気づける場面はあった。
国際警察が絶対的な正義ではないと。
それでも、レッドは小さな違和感は無視して、最後まで気づかないという愚行を犯した。
だがサンは、周りをよく見ている。
むやみに走るだけだったレッドとは、少し違う。
「俺も、それだけ周りを見れていれば……」
その先の言葉は、続かなかった。
今になって悔やんでも、仕方のない事だったから。
(だから、そう。この罪は、永遠に背負い続けよう)
それが姉に対する誠意だと。
レッドは思っていた。

七話　正義を翳せ！

ひたすら、走り続けてきた。
あたり一帯、闇に覆われた暗い道。
足元だけが照らされて、前にも後ろにも道は続いていない。
それでも私は、先に進むために駆け抜けてきた。
それで、良かった。
それだけで、良かったんだ。
だけど、それももう疲れた。
ここではっきりさせておこう。
（私が進むのは、逃げるため？　追いかけるため？）
理想を追いかけているのならばそれでいい。
その手に掴むまで、歩みを止めなければいい。
だけど、現実から目をそらすために。
嫌なものから逃避するために。
その為だけに走っているならば、ここで足を止めてしまおう。
（さて、私の答えは、どっちだろうね？）
目の前に立つ私がそう嗤う。
私にそう問いかける。
私は……私の選択は……。
＊
「……メア姉、起きた？」
「レッド……？」
起き上がろうとして、全身に激痛が走った。
不意の痛みに、思わず呻き声が出てしまった。
「しばらく安静にしててよ。俺が付いているからさ」
私の右手に、手を重ねてレッドがそういう。
ごつごつとした、温かい手だった。
「ねぇ、レッド？」
「何？　メア姉」
レッドの手のぬくもりが、心をわずかに安らげた。

だが同時に、不安も残る。
だから、私は問いかけた。
「レッドは、私の味方？」
「何言ってるのさ」
……悲しくなる権利なんて、私にはなかった。
そもそも私から、レッドを見捨てたんだ。
何を自惚れていたのやら。
自分が恥ずかしい。
そんな私に、レッドはこう続けた。
「当たり前だよ、そんなこと。これから先もずっと、俺は絶対にメア姉の味方だよ」
だから、安心して。
レッドのその優しい声に、私の中の濁ったものが流されていくようで。
私は再び眠りに落ちて行った。
＊
喧騒で、目が覚めた。
痛む体を誤魔化して、声のする方へ歩み寄る。
「お願いします！　レッドさん、力を貸してください！」
「だから言っただろ、この件に関わるつもりはねぇ。というかこっちの俺が参加するなら要らねえだろ」
「戦力は多い方がいいですって！」
声は入口の方からしていた。
そして私は、目をぱしぱしとして再視認した。
（レッドが、二人いるような……？）
落ち着け。
私の鑑定眼は特一級だ。
本物と偽物の区別くらい付くだろう。
部屋の中にいるのが本物で、外にいるのが偽物だ。
（いや、似すぎじゃね？）
瓜二つや、生き写しなんて言葉すら生ぬるい。

まったく同じ人物だと言われても納得してしまう人が大多数だろう。
「レッド、どうなってんの？」
「あ、メア姉ごめん。起こしちゃった？」
「ううん、それはいいんだけどさ。いつの間に影分身覚えたの？　それ私も欲しい」
「あー、そういえば。おい俺、こっちのメア姉ってどうなってる？」
「……」
偽物のレッドは、極端に無口だった。
目でも、口でも語らない。
レッドの質問にも、沈黙で返した。
「はぁ、会話が通じねぇのな」
「あーいいよ、なんとなく把握したから」
起きてしばらくして、色々思い出してきた。
私はサカキを殺したと思ったらサカキに復活させられていた。
つまりこっちは、あいつが生きている可能性の世界。
そしてコニーの言っていた言葉。
『何度リトライしたか分からない世界線で、サカキ様は特異点に到達しました。それが先輩、あなたです』
つまり私はあの世界線にしか存在しない。
こっちの可能性の世界には、私は存在しない。してはいけないのだ。
私が存在しているのは、サカキが繋ぎ止めているからだろう。
けれどレッドは違う。
こちらの世界にも、私の世界にもレッドとして存在している。
私のいう本物のレッドは私の世界のレッドで、偽物のレッドはこっちの世界のレッド。
「で、何の話してたの？」
「……俺達には関係ないことだよ。さ、お前らは帰れ」
そう言ってレッドがしっしと戸を閉めようとする。
扉の向こうの面々は、大体絶望したような顔をしている。

ちょっと面白い。
「そっか、じゃあレッド、準備して」
「準備？　どっかいくの？」
「うん。ちょっとね」
私はアームカバーを付けながら、そう言った。
見慣れた右腕の傷が目に入る。
醜く歪んだこの腕が、酷く私らしかった。
「もう一度、生みの親をこの手にかけて来るよ」
手を握って、開いて。
アームカバーの感覚になじませながら続ける。
「私を弄んだこと、後悔させてやる」

夢の中にいるときから、ずっと声が響いていた。
邪魔者を殺せ、と。
私の声じゃない。
きっとこれは、私に寄生していた白クラゲのもの。
だけどそれは今や、私の意思になっている。
私の思考に張り付いている。
「……メア姉？　もう苦しまなくていいんだよ？」
「苦しむ？　違うよ。苦しむのは私じゃない。サカキの方だ。絶対に、絶対に許さない」
「一緒に戦ってくれるんですか!?」
「誰だお前は」
扉を押し開けて変な奴が押し掛けてきたから蹴り飛ばした。
いや本当に誰だよ。
「サン君！」
「……国際警察」
眉間に力が入った。
視線に力がこもる。
「失せろ」
私はそう吐き出した。

「あなた、自分を助けてくれた人に恩義はないんですか！」
「助けてくれた……？」
話が噛み合ってない気がする。
何の話をしているのか考える。
「ああ、あの白いクラゲの事？　それが、私を助けた？」
笑わせる。
「あの程度で救われるような生き方してないんだよ、こっちは。自惚れるな」
マイナスをゼロに戻したのなら、助けたと言えるだろう。
だがあの程度、私の苦悩からすれば微少量に過ぎない。
その程度で助けたなんて、軽々しく言うな。
「加えて、誰が助けろと言った。誰が救えと言った。お前らが勝手にしただけでしょ。お前らが自分のためにやっただけでしょ。それに感謝しろなんて、お門違いってやつだよ」
忘れるなと、少年の胸倉を掴みとり宣告する。
「私はお前らが正義だなんて、絶対に認めない」
その少年を、入り口の向こう側。
国際警察と偽レッドのいるところに放り投げる。
国際警察が、それを受け止める。
そいつが私をしばらく見つめた後、意を決したように口を開いた。
「あなたは、どうして国際警察が正義なのかと言っていましたね」
「……さて、どうだったかな」
白クラゲが私にとりついている間の事は、きちんと思い出せない。
記憶に残っていても、細部がぼけていてなんとなくしか思い出せない。
だけどその話の事は覚えている。
それを切り出したのは、私の意思だったからだ。
「あなたの苦悩と、国際警察に対する敵意は、関係があるのですか？」
私は、目を閉じた。
鼻から大きく息を吸い、口から吐き出した。
そうしないと、感情が暴れ出してしまいそうだったから。

ふつふつと湧き上がる感情を、呼吸と共に押し出した。
「いえ、言いなおします。その二つの間には、繋がりがあるのですね？」
歯を食いしばる。頭に血が上っていく。
ギリギリとなる音が、乱れる呼吸が、うるさかった。
「教えてください。一体あなたに、何があったんですか」
ここに居るこいつは、私の世界の奴とは関係ない。
頭で理解できていても、感情が納得できない。
それでも、必死に抑え込んだ。
「いいよ、教えてあげる。あんたたちが、私たちに何をしたか」
＊
私はこれまでの事を話した。
罪のないポケモンを殺そうとしているところに、遭遇してしまったこと。
そのポケモンを助けた結果、悪を押し付けられたこと。
その悪を理由に、殺されたこと。
誰も口を開かなかった。
だから私が問いかけた。
「それで、そんなあなた達が、どうして正義を名乗れるの？」
零して、吐き出して、一周回って冷めてしまった。
話が通じないことなんて、最初から知っていたことだというのに。
（分かっていた。絶対的正義なんて存在しないこと……最初から分かっていた）
正義の裏にあるのはまた別の正義で。
あるいは正義も悪もなく、ただ譲れない信念だけがそこにあって。
相容れない意見を握りつぶす大義名分として使われるのが正義という言葉で。
（私がしてきたことも結局はエゴの押し付けで、だからこそ受け入れられなかったんだろう）
この世界に、正義なんて存在しない。
それが私の出した答えだった。

誰も音を立てない。
身じろぎ一つすることさえ憚られた。
これまでの人生観を覆すような。
今までの倫理観を上塗りするような。
築き上げた世界を再構築するような。
そんな事実を打ち付けられて、誰も何もできなかった。
……そんな沈黙を破ったのは、少年であった。
アローラ地方のチャンピオンだった。
涙ぐみ、嗚咽を漏らし。
それでも彼は言葉を絞り出した。
「あぁっ、くそッ！　ごめん、ごめんよォ……」
少年が、その場に泣き崩れる。
何だコイツ。
「俺は、俺はァ！　あなたの心に届く言葉を、持ってない……ッ!!」
徐々に歩み寄ってくるそいつが怖くて、恐ろしくて。
私は少しずつ退いた。
「ちくしょう……ッ！　俺が持っている言葉なんて……、キレイ事でしかない！　偽善で欺瞞で、共感を同情と勘違いしている！」
また私は、一歩退いた。
そして気付いた。
（どうして私は、こうもこの少年を恐れているんだ？）
ピタリと足を止めた。
浮かんだ考えを、否定する。
（私という人物が知られるのを、恐れている……？）
そんなはずはない。
だって私は、私の正義を受け入れて欲しかったはずなのだから。
「くっそおおお！　俺が泣いてどうすんだよ……！　俺より、俺なんかより苦しんでる人がいる前でッ、何俺は泣いてんだよ……！」
誰も、認めてくれなかった。
私の行いを。
国際警察も、サカキも、コーニッシュも。

みんなが私を否定した。
私の在り方を、否定した。
「あなたは、正しかった！」
ただそれだけの一言が、どうしてこれほど胸に響いたのか。
「でも、ここはあなたがいた世界とは違う。もう一度だけ、チャンスをください！」
認めて欲しかった。
相手は、認めてくれた。
「俺が初めて国際警察にあったとき、リラさんとハンサムさんはこう言ったんです。『保護もしくは殲滅すること』」
そこまでは、私の知っているものと同じだ。
同じ……、同じ？
「保護……？」
「はい。『私もハンサムさんも、殲滅は望むところではない。ＵＢであれ、一つの命。保護し、救いたい』そう言っていたんです」
「……嘘」
「嘘じゃないです！」
アローラチャンピオンが、力強く言い切る。
「あなたの世界の国際警察は確かに過剰だった！　信じられなくなるのも分かります！　だけど、だけれどもッ！　この世界では、確かに保護されている存在なんです！」
サン、と言っただろうか。
その少年が、言葉を絞り出す。
「お願いします。一度だけ、一度だけでいいんです。俺たちを、信じてください」
そう言って、頭を下げるサン。
なんで、なんで。
どうしてそこまで。
この歪んだ世界を愛すことができるの？
分からない。
私には彼が分からなかった。

だけどその在り方は、少しだけ羨ましくもあり。
今の私は、酷く醜く思えた。
狼狽える私に、レッドが声を掛ける。
私の肩に手をのせて。
穏やかな口調で。
一人語りのように、追憶するように。
思考のまとまらない私に、彼は話し出した。
「やっぱり、俺なんかよりよっぽど考えてるよ」
「……」
私は何も言えなかった。
彼のように、世界を愛すことができたなら。
そんな妄想ばかりがあふれ出し。
でもやっぱり、そんなもしもを享受するだけの寛容さもなくて。
私は、押し黙るしかなかった。
「で、メア姉、どうするの？」
こっちの世界の国際警察を信じるのか、それともやっぱり信じられないのか。
そう聞いているんだろう。
夢で見た私の問いかけが、頭の中でこだまする。
私の、私の答えは――。
「レッド……。私が……、私がさ。国際警察を、信じてみたいって言ったら、変かな？」
「全然。メア姉が信じるっていうのならば、それもまた始まりの一歩だよ」
後押しこそすれ、決して笑ったりしないよ。
そうレッドが言う。
「そっか、そっかぁ……」
天を仰いだ。
涙が、零れ落ちてしまいそうだったから。
「それなら、そうだというのなら」
大きく一息ついて、感情の波を制する。

少しずつ、少しずつ、波紋を弱めていく。
胸をなでおろし、前を向く。
「あの世界は狂っていた」
世界は綺麗なものだけで作り上げられているわけじゃない。
見たくない現実。知りたくない真実。
そういったものがありふれていて、いつかはそこに気付いてしまう。
それでもなお、世界を好きになれるだけの器量。
私に足りないのはそれだ。
「それでも好きになるために、受け入れるために」
私は口角を上げた。
上等だ、やってやろうじゃないか。
「この世界を醜く歪ませる一切を、消し去ってやる」
それが私の選択だ。

八話　同族嫌悪

私たちはエーテルパラダイスに再び来ていた。
そこにはこちらの世界のグリーンと、サンの知り合いだというグラジオとかいうやつがいた。
私、向こうレッド、こっちレッド、こっちグリーン、サン、リラ、グラジオ。
総勢七名のチームだ。
たった七名だが、各々が実力者だ。
負ける気がしない。
私はレッドからルリルリとスーちゃんを受け取った。
聞いたところ、この二匹をパーティに入れていたおかげでレッドの手持ちは四匹らしい。
正直ごめん。
「相変わらず警備は無し、気味が悪いですね」
「そうですね、油断せずに行きましょう」
リラとサンがそう会話する。
そして、一斉に忍び込んだ。
忍び込んだ、瞬間だった。
「テレポートトラップ!?」
誰が挙げた声だったか。
地面が発光していく。
「メア姉！」
「レッド！」
テレポートトラップは、手を繋いでいれば同じ場所に転移する。
私が視認した限りでは、サンとリラ、こっち世界のレッドグリーンが手を繋いでいた。
あいつ、名前なんて言ったっけ。
あいつだけ誰とも接触してなかった。
まぁどうにかなるでしょ。
最悪ダメでも、その前に私たちが助けに行けばいい――。

「来たか、待ちわびたぞ。メア、レッドよ」
「自分から招き入れてくれるとは、随分気が利くじゃない」
私は目の前の男に言う。
「ねぇ、サカキ？」
さあ、今一度やり合おうよ。
何度でも、殺してあげるからさ。
＊
「まぁ待て、折角だ。賭けをしようじゃないか」
「あんたの話なんか聞くと思った？」
「ほう、これを見てもそう言えるかな？」
そうサカキが言えば、空中に映像が投影された。
あれだ、ホログラフィってやつだな。
そしてそこには、トラップで切り離されたみんなが映し出されていた。
「……ロケット団……なの？」
飛ばされた先では、様々な恰好をした人々がいた。
赤いやつ、青いやつ、白いやつ、首が回り出しそうな奴。
彼らがロケット団なのかと言われると、どうにも納得できない。
「そうだ、ロケット団だ。ただし、ただのロケット団ではない。レインボーロケット団だ」
「うわ、ネーミングセンス無い」
「メア姉、それは言っちゃダメだよ」
いや、だってねぇ……。
というかそもそもロケット団ていうワード自体がダサい。
どんな言葉を付けてもダサくなるよ。
「ふ、せいぜい今のうちに笑っているがいい。見よ、これがレインボーロケット団だ」
そう言うと、色々と強そうなポケモンが出てくる。
デカいサンドやら、シャチみたいなやつ。
ドラゴンのようなポケモン達。
確かに、どれも強力そうだ。

「賭けは、彼らが勝てるかどうかだ。当然私は、レインボーロケット団の勝利に賭けるがな」
「ベットするものは？」
「そうだな、私は彼らの命、君らには君らの命を賭けてもらおう」
レインボーロケット団が勝てば、君らには部下になってもらう。
その代わり、彼らの命は保障しようと言っているのだ。
そもそも、賭けとして成立していない。
サカキはサカキたちが勝つと信じて、疑っていない。
画面を食い入るように見る。
サンとリラが、デカいサンドとデカいシャチの相手を。
レッドとグリーンが、ドラゴン達やデカいカラス、強そうなオドシシを相手している。
もう一人のあいつはウツロイドの相手をしている。
私は肩を震わせた。
まったくもって。
「あはははは。あんたの目、節穴なの？」
バカらしい賭けだ。
「なんだと？」
「聞こえなかった？　それなら言ってあげるよ、何度でも。あんたの目は節穴なのかってね」
徐々に戦況が傾いていく。
こちらの有利に。
デカいサンドとデカいシャチ。
真珠のようなドラゴンと、ダイヤのようなドラゴン。
白き龍と、黒き龍。
カラスとオドシシが。
お互いを攻撃し始める。
「どうやら我が生みの親は、熱帯魚すら飼えなさそうだ」
生物には相性という物がある。
共生できる生命と、排他すべき生命の組み合わせが存在する。
サカキの配置は、どうしようもなく噛み合わせが悪かった。

なんだっけ、グラッツェだったっけ。
お前は……がんばれ。
他の人が駆けつけるまで耐え凌ぐんだ。
「賭けは不成立ね。この勝負は、私たちの勝ちよ」
「私たち……か。少し目を離した間に随分と変わったな、メアよ」
「さぁね？」
言いながら確かにそうだと思った。
だけど今は、そんなこと関係ない。
「そんな事よりさ、私の中で、うるさい声が反響するんだよ。お前を殺せって」
脈拍が上がる。
呼気が荒ぐ。
目の前の敵を殺せと、神経がざわめく。
「やろうよ、殺し合いってやつをさ」
＊
「行け！　サイホーン！」
「ルリルリ、お願い」
「来い、ガラガラ！」
三者が三様のポケモンを繰り出す。
「あら？　一体でいいのかしら？」
「構わん、ハンデだ」
「それじゃ、遠慮なく」
マリルリに指示を出す。
その際、左腕に少し痺れがあった。
白クラゲの毒が、まだ尾を引いている。
「サイホーン、地震だ！」
「マリルリを守れガラガラ！　地団駄！」
ガラガラがマリルリとサイホーンの間に入り、地団駄を踏む。
地震によって引き起こされた衝撃を打ち消すように衝撃を生み出す。
「ナイスレッド。マリルリ、アクアジェット」

準備を終えたマリルリが、超高速で吹き飛んだ。
水流と共に、サイホーンを押し流していく。
ただの一撃のもと、サイホーンは倒れ伏した。
「この威力、腹太鼓か」
「ご名答。意地張らずに、出しなよ。二体同時にさ」
「ふん、後悔するがいい。行け、ニドキング、ニドクイン！」
サカキが繰り出したのは技のデパートと知られるニド夫妻。
非常に広い技範囲。
特性を駆使した超火力。
確かに強力なポケモン達だ。
「ニドキング、ニドクイン、ヘドロウェーブだ！」
ただ、強力なだけだ。
「ルリルリ、押し返して」
教えてあげるよ。
強力なポケモンのみに頼った愚かなバトルが、如何に脆いかを。
ルリルリの波乗りが、ニド夫妻二匹のヘドロウェーブを押し返していく。
「バカなッ!?」
そう思うならそれで結構。
それがお前の限界だ。
何故押し返せたのか。
簡単なことだ。
サカキに二体繰り出せと言っている間に、マリルリは光の壁を放っていた。
相手のニド夫妻の火力は半減。
対してこちらは波乗りを放った直後に、続けて『真似っ子』を使わせた。
真似っ子は最後に出された技を繰り出す。
この場合、マリルリが使った波乗り自体だ。
相手の波は半減し、こちらの波は倍加して打ち出す。
故に私の火力が上回った。

「むおおお！」
毒の混じった水流がニド夫妻を飲み込む。
当然一発ノックアウトだ。
「く、だが波乗りは全体攻撃。今のでガラガラは瀕死だろう。行け！
ドサイドン！」
「あはは、ガラガラが戦闘不能？　バカ言っちゃいけないよ」
サカキがドサイドンを繰り出した後、空から茶色が飛来する。
白い頭蓋骨を被ったそれは。
太い骨を手にしたそれは。
サカキが瀕死だと言った、レッドのガラガラだった。
「気合パンチ！」
位置エネルギーを運動エネルギーに存分に変換し、膨大な運動量を持った一撃をドサイドンに見舞う。
身にまとうプロテクターを、一切合切砕きながらその一撃が決まる。
屈指の物理耐久を誇るドサイドンすら、耐えるに及ばなかった。
「ありえん！」
「これがあり得るんだよね。ルリルリが波乗りを放つ前に、ガラガラを天井に向けて『投げつける』しておいた。そして今、そのエネルギーを十全に蓄えた一撃を叩き込んだ」
私は手早くネタを明かした。
左腕だけだった痺れが、全身に回り始めている。
一刻も早く、この勝負を終わらせないとヤバいかもしれない。
「サカキ、あんたの負けだよ。ぶすぶすと燻るくらいなら、いっそ華々しく散った方がいい。そう思うでしょ？」
「ふざけるなッ！　私が負けるなんてこと、あってたまるかッ！」
私の右腕が、ピクリと反応した。
サカキが放った言葉は、私が死の間際に放った言葉と同じ。
一言一句、違いはない。
（あぁ、そうか。だから私はあんたを――）
ずっと、気にくわなかった。

こいつの前だけは、口が悪かった。
何故かは分からなかったが、今ようやくわかった。
（――同族嫌悪していたんだ）
生みの親だとか、正義に絶望したとか、そんなレベルじゃない。
もっと、もっと根本的な部分で、私たちは似通っていたのだ。
それこそ、本当の親子のように。

「……え？」
嫌な予感が脳裏をよぎった。
サカキはただ、私の生みの親だと言った。
私はてっきり、サカキが道具にするためだけに作ったと。
そういう意味でとらえていた。
だけど、もし言葉通りなのだとしたら……？
「いや、そんなはずは……」
自分の考えを、必死に振り払った。
だけど、思い当たることばかりだった。
サカキは最初に会ったとき、『マサラの人間にしては上等だ』と言った。
サカキはどこでマサラの人間を知ったというのか。
私の父は、マサラの人間ではなかった。
父は、母の死後マサラを発った。
最初に会った時からそうだった。
いくら変わり種とはいえ、サカキは私に甘かった。
図鑑を与え、安全な環境に移した。
国際警察の目の入らない場所に護送した。
それだけじゃない。
私に力を付けさせた。
自分を殺しに来る相手だと分かっていながら、私を鍛えた。
あれも、これも。
『向こうのサカキ』の言動の一つ一つには、どこか優しさがあった。

震える声で、私は問いかけた。
「私の中に、あんたの血が流れているの……？」

九話　大罪人メアリー

「私の中に、あんたの血が流れているの……？」
　認めたくない。
　受け入れたくない。
　だから、否定してくれ。
　そんな思いを、サカキは踏みにじる。
「同じ血か、そうだな。遺伝子的にはお前の父親と、私は同じだ。その点で考えるのならば、お前の中には私の血が流れている」
「ウソだ……、嘘だウソだ！」
　だったらなんだ。
　私は、自分の手で親を殺したというのか？
　比喩でも何でもなく。
　本当の意味で？
「だったらなんで、最初からそう名乗り出なかったのさ！　最初に父親だと言えば、あの時の私はコロっと堕ちただろうに！　なんでそんな遠回りなことしたのさ！」
「知ったことか。言った通り、私とお前の父親は構造が同じなだけの別人だ。思考回路までは読み取れん」
　だがしかし、と。
　サカキが続ける。
「差し詰め、名乗る資格がないとでも思っていたのだろう」
「なん……で」
「考えてもみろ。幼い子供を置いて旅に出て、ジムリーダーになったとはいえ、身に付けた力を行き場の無いマフィアの統率に使う。世間からは悪だと謗られ、どうして父親だと名乗れるのだ」
「それは……、いや、待って」
　聞き捨てならないことを言った。
　聞き逃せない。
　聞き零さない。
「行き場の無いマフィアの統率。世間から悪と謗られるって……」

「なんだ、気づいていなかったのか。お前の世界の私は、カントーを守るために尽力していたよ。生み出されたミュウツーを隔離し、多くの団員をアジトやポケモンタワーに配置することで街への被害を減らし、暴れたフリーザーが双子島を壊す前に捕獲に乗り出した。お前たちはずっと守られていたんだよ」
まったく、バカな男だと。
本当に私なのかと疑いたくなるものだと。
目の前のサカキが嘲る。
「嘘……だよ」
「事実だ」
そんなはずない。
だったら、私が悪だとみなしたあいつは。
「誰からも受け入れられない……、正義だったの……？」
かつてサカキは言った。
『これから先、力及ばず敗れる度にそういうつもりか。ベストを尽くさなかった自分に言い訳をして、他人のせいにして、そうやって生きて行くつもりか？』
『「仕方がなかった」か？　そういって今を妥協するつもりかッ』
私はコレを、サカキの過去だと推測した。
サカキは既に失敗したんだと、勝手に思い込んでいた。
だがもし、だがもしも。
あのとき、サカキがまだ、自らの正義を貫き続けていたのだとしたら……。
「私は、大罪を犯した……ッ」
まるで目の前が真っ白になったような。
そんな錯覚を覚えた。
「どうした、まだ終わっていないぞ！」
「メア姉！」
「……え？」
欠如した思考の回路。
プツリと途切れ、ショートした脳が。

手遅れになってから認識する。
「ルリルリ!?」
そのきれいな青い体を、真っ赤に染めたルリルリが私の足元に転がった。
一目でわかる、瀕死状態だ。
ひとまずボールに戻して状況を把握する。
……何が起きた？
全て予想通りだった。
サカキが地面タイプのエキスパートと知って以来、ありとあらゆる地面タイプを研究した。
覚える技、特性、変則的なコンボ。
ありとあらゆる可能性を考慮して。
数えきれないほどのエアバトルをこなして。
サカキという人物像を掌握し。
ゲームをコントロールした。
だというのに、何があった？
「……え？」
私の双眸が、その姿を映す。
ああ。
この汚れ切った瞳に映るそれが、夢幻ならよかったのに。
白い体。
紫のしっぽ。
尖った耳に、鋭い目つき。
念能力で生み出したスプーンを払い、返り血を落とすそのポケモンは。
「ミュウツー……？」
かつて敵対し、またかつて共闘したあいつ。
あいつが今度はまた、敵になるというのか。
「そうだ、ミュウツーだ。考えていなかったのか？　私の使うポケモンが、全て地面タイプだと思ったか？」
私はそれに返さず体を泳がせた。

私の残りアーゴヨンだけなんだけど。
どうしろと……。
「メア姉！」
そんなことを考えているうちに、レッドが私を抱えて飛び退いた。
何するのと言い返すよりも早く、その理由を把握する。
「……サイコカッター？」
一体いつの間に。
いやそれよりも、何故レッドは気付いた？
まさか、私が見落としただけ？
私が？
「メア姉、後は俺がやるから休んでて」
「でも」
「メア姉、気づいてないみたいだけど、顔が真っ青だよ」
言われて手を顔に当てた。
冷たい。
冬の冷気にあてられたようだった。
「大丈夫、ミュウツー一体なら俺一人でもどうにかできる」
「だけど……」
「大丈夫、大丈夫だから」
そう言ってレッドは、私から顔をそらした。
いや、サカキと向き合ったというべきか。
私とレッドを見比べて、サカキがこういう。
「……やはりな。メア、お前にはトキワの血が流れている」
「トキワ？」
「そう、トキワの森の加護を受けたものは自らの気の高ぶりでポケモンの能力を引き出すことができる」
もっともその加護を受けることができるものなど十年に一人程度だがな、と。
サカキがそう付け加える。
「私にはなかった力だが、先祖返りというやつだろう」
「……何が言いたいの？」

「お前のバトルセンスは、心理状態に大きく左右される不安定なものだということだ」
現に、先ほどまで冴え渡っていた読みさえ無くしているだろう、と。
サカキは告げる。
それに答えたのは、私ではなくレッドだった。
「だからどうしたっていうんだ。そんなときの為に、俺がここに居るんだ！」
ガラガラと共に、レッドが走り出す。
あのモーションは、敵討ちか。
たしかにミュウツーにも少なくないダメージが……。
「うおぉぉぉ！」
「待ってレッド！　誘われてる！」
気づくのが、ワンテンポ遅かった。
せめて普段通りのコンディションであったら。
決して犯すことの無い判断ミス。
その一瞬が勝敗を分けた。
レッドの目が見開かれる。
避けようがない、それほどまでに完璧な一撃。
私はそれを見送ることしかできず。
ただ呆然と立ち尽くした。
「カウンター」
サカキが告げ終えるや否や。
レッドとガラガラが弾き飛ばされた。
「レッド！」
壁にぶつけられたレッドに駆け寄った。
血こそ流れてはいないが、返事がない。
手を取り、脈を測る。
大丈夫、気を失っているだけだ。
よかったと。
無事でよかったと思う一方で。
形容しがたい怒りがわいてくる。

私に、この男と同じ血が流れている。
……嫌だ。
（向こうのサカキを語る時、この男は見下すような口ぶりだった）
誰からも受け入れられずとも、掲げ続けた信念を、この男は嘲ったのだ。
私の、私たちの在り方を、根底から否定したのだ。
「……ごめん。ごめんなさい」
「どうした？　命乞いか？　それもまたよかろう」
そう、サカキが告げる。
命乞い？
バカ言ってんじゃないよ。
「違う、違うよ。もうこの勝負は潰す」
ああ、分かっている。
それは私のわがままだ。
傲慢で奔放で。
だけど、ちょっと付き合えよ――
「消してやる。この世界を汚す一切合切を」
――地獄への片道切符に。
「その体で何ができる。今もなお、ウツロイドの毒に侵されている状態だろう？」
「……だからどうした？」
サカキの言うことなど気にも留めず。
私は右手を天高く掲げた。
ボールの輝きと共にアーゴヨンが飛び出す。
なあサカキ、お前さ。こんな諺、聞いたことある？
「毒を以て、毒を制す。なんてね」
「なっ！」
スーちゃんが私の首に針を刺す。
その毒は一瞬で体を巡り、体の中で暴れまわった。
全身を焼くような痛みが駆け抜ける。
「かっ、は。はは、なんだ、全然余裕じゃん」

「メア……、お前は、狂っている」
「……狂う？　ははっ、お前らが、世界を生きているやつが正常だというのなら。私は狂っていたって構いやしない」
そんな正常、糞喰らえだ。
根底から覆し、全て無かったことにする。
それまでは。
たとえ狂人と謳われようと。
たとえ悪と謗られようと。
私はひたすら進み続ける。
あの人が、そうであったように。
「行くよ、スーちゃん」
アーゴヨンにぶら下がり、私たちは空を走り出す。
空中戦に挑んだ理由は単純だ。
平面上を動く点と、三次元空間上を動く点。
どちらの方が狙いにくいかということだ。
「小癪な」
サカキが指示をし、ミュウツーが攻撃する。
無数に迫る透明の刃を、シャドーボールを。
紙一重で避けていく。
タイプ相性は不利なんだ。
持久戦に持ち込み、有効打のＰＰが切れた後。
そのタイミングを狙うしかない。
徐々にサイコカッターを放つ回数が減り、シャドーボールの回数が増えていく。
ＰＰの温存……、ということは、着実にサイコカッターの使用限度が迫ってきている。
（あるいはシャドーボール一発くらいならスーちゃんでも耐えられる。狙うはその一瞬！）
ヒットアンドアウェイを繰り返せばいつかは倒れる。
ミュウツーには自己再生があるが、あちらは使うまでに時間が掛かる。

使おうとするのを見てから横取りしてしまえばいい。
「チィッ、ミュウツー！」
「スーちゃん！」
サカキが指示を出し、ミュウツーがサイコカッターを放つ。
それだけは喰らってはいけない。
スーちゃんに旋回してもらい、ギリギリで回避する。
「行くよ！」
狙うべきは、この一瞬。
「うおおぉぉぉ！」
翼をはためかせ加速する。
ミュウツーとの距離が、加速的に縮まる。
そんな私たちを見て、サカキが嗤った。
「私が、それを考慮していないとでも思ったか？」
ミュウツーから飛んできたのは、二発目のサイコカッター。
水平方向に伸びた、不可避の一撃だ。
「なっ、二発目!?」
「誰が先のが最後のサイコカッターだと言った。本命は、こちらだ！」
サイコカッターが、私とスーちゃんを目掛けて迫る。
ぶら下がったままの私。
水平方向に伸びた刃。
スーちゃんがどこに避けようと、私かスーちゃんのどちらかには当たってしまう。
「……なんてね」
それを見た私は、スーちゃんから手を離した。
重力に従い、落下する。
重荷を下ろしたスーちゃんが高度を上げる。
サイコカッターは私たちの間を素通りした。
「バカな！」
「あいにく、こちとらシルフの十階から飛び降りたことがあるんだ。室内での飛び降りに恐怖なんざないよ」
私は私の右手首に噛み付き、血管を引き裂いた。

滴る血が慣性に従い、宙に飛散する。
「大人しく、引っ込んでろォ！」
スーちゃんが上空からエアカッターを放つのと、私が右手を振り払うのはほぼ同時だった。
スーちゃんのエアカッターがミュウツーの体を引き裂き、傷をつける。
その傷口に、私の血を流し込む。
次の瞬間、目を見開いたミュウツーが暴れ出した。
「ミュウツー!?」
「アハハ、思った通りじゃん」
乱れる呼吸を整えようともせず、私は語り出した。
「ミュウツーは捕まえた程度で制御できるポケモンじゃない。なのにあんたはミュウツーを制御していた。なら、当然仕掛けがあるよね。そう、例えば――」
全身が熱い。
スーちゃんの毒を取り込むのはやり過ぎたか。
でも、それ以外に術はなかった。
「――ウツロイドの神経毒」
「まさか、アーゴヨンの毒を用いたのは！」
「そう、抗体を生み出すためさ」
今、私の中ではアーゴヨンの毒がウツロイドの毒を攻撃している。
それは毒であると同時に、薬だ。
その特効薬を、ミュウツーに注ぎ込む。
ある種の賭けだったが、上手くいったようだ。
「さぁ、そろそろ終わりにしようよ。もう、時間がないんだ」
私がサカキの手を掴む。
安心しなよ。
あんたを殺したら、私も追いかけてやるから。
独りぼっちは、寂しいもんな。
「ふざけるな、フザケルナァ！」
「……だから、ごめんって言ったじゃん」

スーちゃんに、アイコンタクトを送る。
視線が交差し、その瞳の色が私の瞳に映る。
スーちゃんが躊躇っているのが分かった。
それに対し、私は首を振る。
（……これで、いいんだ。私を思う気持ちがあるのなら、私の願いを聞いて？）
アーゴヨンが、少しだけ頷いた。
ああ、本当に。
君に出会えて、良かったよ。
「……バイバイ」
「やめろォ!!」
天から無数の流星が飛来し。
ロケット団の城を打ち砕きながら襲来する。
ドラゴンタイプの最終奥義。
万物必壊の究極技。
「龍星群ッ!!」
＊
「うっ……」
周囲を引き裂く破砕音で、意識が引き戻された。
耳をつんざくような、そんな爆音だ。
並々ならぬ気に圧され。
思考にかかった霞を払う。
そうだ、俺はミュウツーと対峙して……。
（しまった、どれだけ落ちてた!?）
俺はまたメア姉を一人にしてしまった。
何が大事な人だけ守り抜ければそれでいいだ。
お前はまた失うつもりか。
ぼける視野。
ピントを調整し、視界を整える。
まず目に入ったのは、室内とは思えない白煙。
コンクリートを蒸発させたような霞の向こうに、彼女はいた。

徐々に霧が晴れ、その姿を見せる。
その姿を見て、俺は血の気が引いて行くのを感じた。
その後ろ姿には。
ずっと憧れたその人は。
右肩から先が欠けていた。
「メア姉ッ！」
俺が声を掛けるが早いか。
メア姉の体が崩れ落ちた。
腕を失うというのはそういうことだ。
体のバランスが取れなくなるのである。
痛む体を叱咤して。
全速力で走り出す。
一秒でも早く寄り添うために。
「メア姉！　しっかりして！」
「……ああ、レッド」
震える姉を抱き寄せる。
冷たい。
まるで血が通っていないようだった。
「あぁ、あああぁ……！」
苦しくて、泣き声を上げた。
悲しくて、悲鳴を上げた。
そんな俺に、姉はやさしく語り掛けた。
「良かった、最期に、言いたいことがあるんだ」
「何を言って……」
メア姉がその手を伸ばし、俺の顔に触れる。
凍える人のようにその手は震えている。
俺はその手を掴んだ。
震えを肩代わりするために。
なんで。
折角ここまで来たのに。
「私はね、この世界に存在しないんだよ」

「それを言うなら、俺だって……」
「ううん、違うの。レッドはどの世界にも存在するけど、私は違う。サカキが生み出したイレギュラー。秩序を乱す不純物」
私の存在そのものが、世界を穢しているんだよ。
そう言って、メア姉は自嘲った。
なんで、なんでそんな簡単に。
「なんでメア姉は、いっつも自分を蔑ろにするのさ！　俺も、グリーンも！　みんなメア姉の事を思っているのに！　なんで、なんで……！」
「……許されない、からだよ。私のしでかした、一切合切が」
メア姉が続ける。
罪を打ち明けるように。神に祈りを捧げるように。
か細く、頼りない震えた声で、胸中を明かす。
「世界を、好きになりたいんだ。この世界を醜く歪ませる一切を、消し去りたいんだ」
「やめて……やめてよ。そんな、そんな言い方って」
「……私は、私を許せなかったんだ。世界の在り方を歪ませた私を、歴史を捻じ曲げた私を、許せなかったんだ」
そんなことない。
あってたまるか。
認めない。
認められない。
それでもメア姉は、話すことを止めやしない。
「私がいなくなることまで含めて、予定調和、なんだよ」
「なんで、なんで話してくれなかったのさ。そうしたら、俺も別の方法を一緒に……」
「ううん。これで、これでいいんだ。ようやく私は、この世界を好きになれる。そんな気がするんだ」
そういったメア姉の瞳から、雫が滴り落ちる。
一つ、また一つと零れ落ちて行く。
それでもメア姉は、不変だ。

「あはは。むしろ良かったや。法に裁かれるなんてまっぴらごめんだ。これで私は、私のまま死ねる」
俺はそれが、作り笑いだと知っていた。
自分が消えるというのに、強気に振舞おうとする姉を見ていられなかった。
今度は俺の瞳から涙が零れ落ちる。
「はは、また泣いてる。ほら、笑ってよ。お姉ちゃん、レッド君の笑顔が見たいな」
あの日と同じ言葉を紡ぐ姉。
視覚が、嗅覚が、触覚が。
ありとあらゆる感覚器官が呼び起こされ、あの日を俺に追体験させる。
時間ばかり経過しても、まるで成長していない。
また同じ過ちを、俺は犯そうとしている。
そんな、そんなことッ。
「ふざけんなよ！　痛みも、苦しみも、全部。全部抱えていくつもりかよ！　俺を、俺を頼ってくれって、言ったじゃないか！」
言葉遣いも敬う気持ちも放っておいて。
俺は心の思うままに叫び出していた。
なんで、なんで分かってくれないんだよ。
「そんなに俺は頼りないか!?　そんなに俺は役立たずか!!」
そう言っている間にも、姉の体は弱っていく。
焦点がぼけ始める。
掲げている手が、ずり落ちそうになる。
時間が足りなすぎる。
一秒先が、光の速さで駆け抜けていくようだった。
顔をぐちゃぐちゃに歪めて。
涙で醜く顔を濡らして。
それでも俺は叫んだ。
「最期だっていうなら……、表面ばかり繕ったりなんかしないで！
思うがままに、思う存分に！　言いたいことを言えよ！」

姉が俺の手を、ぎゅっと握り返した。
俺はきっと、生涯この感触を忘れない。
「あぁ、くそ」
姉が小さく、そう呟いた。
最後に見た顔は。
俺が最後に見た姉の顔は。
困った様子で、へたっぴに。
だけど、とてもうれしそうに。
穏やかに、笑っていた。
「悔しいな……、もう少しだけ、一緒に、いたかった……な」
俺の手から姉の手が零れ落ちた。
俺はまた、大事なヒトを、取り零したんだ。
＊
＊
＊
（俺、何してたんだっけ？）
何か、何か大事なことを忘れている気がする。
失っちゃいけないものを無くしてしまったような。
心にぽっかりと穴が空いたような。
そんな感覚だけが残る。
次第に、自分は本当に何かを忘れているのかと疑い始める。
失ったと思っているだけで、実は何も失っていないのではないか。
しかしそれは、頭を振って否定した。
だとしたら、この左手に残る感触は何だ。
何も思い出せない。
だけど、忘れてはいけないことだった。
それだけはこの左手が覚えている。
（あれ？）
涙が、止まらなかった。
何が悲しいのか分からない。
分からないことが、ひどく悲しかった。

（なんだっけ、俺が無くしてしまったものは）

その心の内の呟きは、誰にも届くことなく消え失せた。

エピローグ

物語の始まりは、いつからだったか。
私がコラッタに、腕を引き裂かれたときからか。
サカキが手足となる道具を求めた時からか。
思うにそれは、サカキがマサラの女性を愛してしまったときから。
本来ありえない歴史。
誰も立ち寄らないマサラに、サカキが立ち寄る偶然。
そこで後に子を授かる女性と、邂逅する偶然。
その二人の間に、愛情が芽生えた偶然。
すべては偶然だ。
だけどその偶然は、あらかじめ決められた世界の意思でもあった。
けれども、たとえ世界の意思だったとしても。
別世界のサカキが片手間に生み出した世界だったとしても。
その物語の始まりは、ここからだったというべきだ。
少なくとも私はそう思う。
だから、ここに終止符を打とう。

＊

ニューアイランドにいた時、ロクな死に方をしないと私に言ったやつがいた。
確かに私の死に様は、最後の一回を除いてどれも酷いものだった。
だがしかし、だがしかしだ。
最後の最後にあれだけ穏やかな気持ちで終わりを迎えられるなら、それだけで十分だ。
私はそう思う。
さて、死後の世界と言えば天国か地獄か。
あるいはギラティナがいると言われる、破れた世界なのか。
死ぬ機会は何度もあったというのに見たことがないというのもおかしなものだ。
（あるいは、死の先にあるのは、ただの無なのかもしれないけどね）
だとしたらそれは嫌だなぁと思う。

何もない場所で、一人孤独に生き続けるのか。
いや、既に死んでいたか。訂正しよう。
何もない場所で、一人孤独に死に続けるのか。
（それはまぁ、何とも苦しいものだね）
どうせならこの思考すら残っていなければ、随分と楽だったというのに。
（ふふっ）
少しだけ、笑みが零れた。
世界は私を嫌ったかもしれない。
でも少しだけ、私は世界を好きになれた。
なら、それでいいじゃないか。
（さて、もうひと眠りしますか）
永眠とはうまいこと言ったものだと、私は思った。
だけど、それは許されなかった。
「おい、起きろ」
聞き覚えのある声がした。
丸まっていた体を開き、声の主を探す。
瞳を開けた先には、一人の男性が立っていた。
オールバック風の黒髪に黒いスーツ。
顔は彫りが深く、目つきは鋭い。
「……お父さん？」
「……サカキと言え」
その言葉で確信した。
いや、聞くまでもなく見分けてはいたけれども。
目で見て、耳で聞いて。
そこまでして私は確証を得た。
何故そこにいるのかは分からない。
けれどここに居る男は、私の世界のサカキで。
サンたちの世界のサカキではなく、私の父だった。
誰からも認められることなく。
それでも一人、正義を翳し続けた、自慢の父親だった。

「お父さん、ごめんなさい、私……」
謝りたいことがたくさんあった。
「誰がお父さんか。よく聞け。お前はお前の正義を貫いた。そうだろう？」
「うっ……、でも……」
私は間違っていた。
その過ちを孕んだまま許されるのは、なんというかこう、気持ち悪い。
そんな私の思考を読んだように彼は言う。
「それなら胸を張っていればいい」
……サカキは続ける。
「善だろうと、悪だろうと。最後まで貫き通した信念に、嘘偽りはない。ならば誇れ。自らの生き様を」
そんな考え方もあるのかと思った。
私は今、豆鉄砲を喰らったポッポのような顔をしているだろう。
「何を呆けているんだ、行くぞ」
「……行く？　どこに？」
サカキが嗤う。
「決まっている、私たちを地獄に堕とした閻魔相手に、正義を振り翳しに行くのだ」
目を見開いた。
この男は、まだ諦めていないのだ。
「むこうでは時代が私達を恐れたが、こちらでは誰にも邪魔されん」
だから、と。
サカキが私に手を伸ばす。
「私の部下になれ。メアよ」
暴論だと、人は笑うかもしれない。
不可能だと、皆が嘲るかもしれない。
だけど私は、その提案に。
（少しだけ、惹かれたんだ）
だから私はこう返す。

「お母さんに会いたいし、それまでは力を貸してあげるよ。だから、さ」
そして、こう続けたんだ。
「一緒に、会いに行こうよ」
「……そうだな」

ようやく与えられた死も平穏も。
全部かなぐり捨てて。
私は宣誓する。
「この世界も狂っている。だから私が、私たちが救ってあげる」
それが私の最期で、そして始まりだった。